昭和二十八年三月

国道六号線改修工事地内遺跡

# 福島県東部地区遺跡発掘調査報告書

―福島県文化財調査報告書第十集―

福島県教育委員会

# 序

本県は、古く「えぞの国」「道奥・陸奥国」に属し、華外の蛮地として取扱かわれてきたが、戦後の考古学、古代学の研究が進み、新しい資料が数多く発見されるにおよんで新たに東北の歴史を書き替える段階にたちいたっております。この裏付けとなったものは、「埋蔵文化財」と称されている、いわゆる「土中の宝」がもたらした新事実であります。本県は、地理学的に、文化史的に見ますと、東北地方の南端に位し、東北と関東・北陸の文化圏に接触しております。さらに地形から、浜通り（太平洋）会津（日本海系）中通り（阿武隈川流域）に三分され、それぞれ特色ある文化を醸成して、著名な遺跡、遺物が発見されております。

昭和三十六年八月、本県においては文化財保護委員会の特別のはからいにより県下の遺跡台帳作製の一斉調査を実施した結果約四千箇所におよぶ遺跡が明らかになりました。このうち浜通りといわれる東部地区・太平洋岸には、貝塚、古墳などきわめて重要な遺跡がありますが、数年前より、この地域を南北に縦走している奥州浜街道「国道六号線」が建設省の直轄事業として改修工事が行なわれ、すでに岩城地方は完了したが、この際いくつかの遺跡が破壊されております。

さらに双葉、相馬郡下におよんで、重要な遺跡が同じ運命にさらされておりますので文化財専門委員渡部晴雄氏を派遣して数度にわたる現地調査を行ないました。幸に建設省磐城国道工事事務所は遺跡の保存に深い関心を示してこの調査に協力し、さらに予定線を変更し、土取場をかえるなど好意ある措置を講じてくれた。しかしながらなお止むを得ず破壊される箇所が数箇所あるので、国庫補助金四〇万、県費四〇万円、総計八〇万円の予算をもって、発掘調査を実施いたしました。炎天下の八月、調査員、関係各位の御尽力により、予期以上の成果を上げることができました。本書はその報告書で、学術、教育の資料として大いに活用されることを期待いたしております。

なおこの調査に際しまして協力された調査員、関係市町村教育委員会、建設省磐城国道工事事務所の各位に、深甚なる感謝の意を表し、あわせて県下の遺跡が完全に保存されるよう希望するものであります。

昭和三十八年三月二十五日

福島県教育委員会教育長　大槻文夫

# 例　言

一、本報告書は、国道六号線（奥州浜街道）の改修工事によって、潰滅を予定されている遺跡について昭和三十七年八月発掘調査を行った次の遺跡の発掘調査報告書である。

根岸古墳群　　相馬市
大窪横穴古墳群　　相馬郡鹿島町
寺内前古墳群　　双葉郡双葉町
塚ノ越遺跡　　双葉郡浪江町

一、編集は梅宮茂が当り、渡部晴雄、佐藤高俊、堀込静夫、西徹雄、秋山政一がそれぞれ分担して執筆した。

一、写真は前記の者のほか竹島国基、鈴木啓、渡辺一雄、馬目順一等の撮影になるものである。

一、実測図は山本明、臼井一郎、木田一等が当り、事前の地表調査測量は、平岡三郎、鈴木敏一が相馬農業高校の生徒を指揮して実施したもので、遺物の実測ならびに図の修正および製図は、編集者が行ったものである。

# 目次

序
例言
第一章　序説……1
第一節　緒言……2
第二節　国道六号線の遺跡……3
第二章　相馬郡鹿島町大窪横穴古墳群
第一節　古墳の位置と現況……11
第二節　発掘調査の経過……14
第三節　各横穴の構造……15
第四節　遺物……24
第五節　むすび……27
第三章　双葉郡双葉町寺内前古墳群
第一節　古墳の位置と現況……31
第二節　発掘の状況……33
第三節　遺跡……34
第四節　遺物……35
第五節　むすび……36
第四章　双葉郡浪江町塚ノ越遺跡
第一節　遺跡の位置と現況……39
第二節　発掘の状況……40
第三節　遺跡と出土品……42
第五章　相馬市根岸古墳群
第一節　古墳の位置と現況……45
第二節　発掘の状況……45
第六章　総括
第一節　相馬・双葉郡下の横穴古墳の特性……47
第二節　相馬・双葉郡下の山上墳について……50
第三節　土師式住居跡について……51
図版
写真版

# 第一章　序　説

## 第一節　緒　言

本県の東部地区は浜通り（太平洋岸）地方と称し、原始古代の遺跡が多く、学界に知られた著名なものが少くない。

文化の流れからみると、関東地方と、仙台平野の中間に位して特色ある様相をもつている。この地域を南北に縦走しているのが、旧奥州浜街道で、目下建設省はこの国道六号線の改修を行っており、石城地区では勿来の関田横穴群が破壊されて、火葬骨をおさめた蔵骨器が発見されており、四倉町においては地引洞窟遺跡が半壊に瀕し、晩期の縄文土器、骨角器が検出されている。

双葉、相馬両郡下の改修予定線が建設省磐城国道工事事務所の手により計画されつつあることを知った。県においては、文化財専門委員渡部晴雄氏を数度にわたり派遣して現地調査を行い、この報告によって破壊される予定線上の四遺跡を発掘調査することとなった。

先づ七月中旬、相馬農業高等学校の平岡三郎、鈴木敏一両教諭が生徒を指揮して四箇所の地表調査を実施し、測量図を作製した。

一方浜通りに居住する研究家で、昭和三十六年度県下の遺跡台帳作製の調査を行った福島県考古学会員十五名を調査員に委嘱し、次の班別を編成した。

○相馬班（根岸、大窪遺跡）

発掘担当者　梅宮　茂（県教育委員会）

調査員　岩崎敏夫（相馬女子高等学校、文化財専門委員）
佐藤高俊（相馬高等学校）
臼井一郎（相馬女子高等学校）
山本　明（原町高等学校）
竹島国基（原町第二中学校）
渡辺一雄（湯本第二中学校）
堀込静夫（中村向陽中学校）
馬目順一（早稲田大学生）
今野栄八（県教育委員会）
浅野　静（〃）

○双葉班（寺内前、塚の越遺跡）

発掘担当者　渡部晴雄（県文化財専門委員）

調査員　秋山政一（飯坂高等学校）
西　徹雄（双葉高等学校）
鈴木　啓（耶麻高等学校）
木田　一（内郷第一中学校）
村上善八（平市第一中学校）
木暮幸雄（富岡高等学校）
蓮沼宏二（福島大学生）
山田　広（富岡第二中学校）
遠藤吉昭（県教育委員会）
長沢克浩（〃）

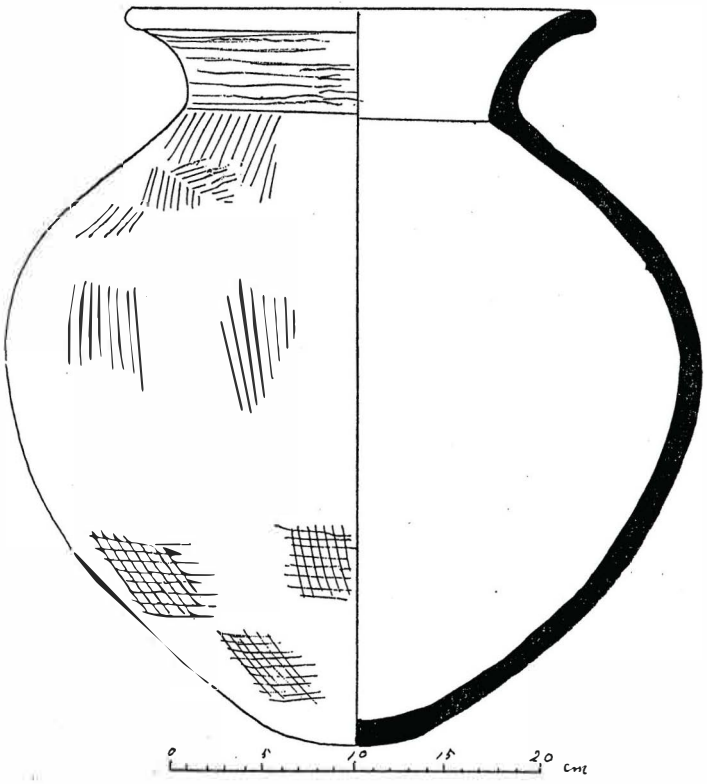
八月三日全調査員は双葉郡浪江町公民館に集合して、詳細の協議を行い、両班に分れて現場におもむき、翌四日より調査にかかった。相馬班は四日から十日まで相馬市根岸古墳群二基の発掘を行い、後半十

一日から十六日まで鹿島町の大窪横穴古墳群の発掘を行う。双葉班は前半、双葉町寺内前古墳群三基横穴二基を掘り、後半浪江町の塚ノ越住居跡を発掘した。

八月十七日、両班はそれぞれの出土品を携行して浪江町に集合し出土品の整理を行い、展示会を行って、協力した関係市町村の人々に公開展示し、その後研究会を開催して根岸古墳については佐藤高俊、大窪横穴については堀込静夫、寺内前の山上墳については西徹雄、同所横穴については木田一、塚ノ越住居跡については秋山政一、鈴木啓などがそれぞれ発表を行い、これについてデスカッションを行って、予定の日程を終了散会した。

十五日間にわたる発掘調査は、雨一滴も降らぬ炎天続きで、調査員ならびにこれに協力した相馬高校、相馬女子高校、原町高校、双葉高校、富岡高校各社会科研究会の生徒諸君、さらに、双葉町、浪江町、鹿島町、相馬市の各教育委員会、市町当局者、土地所有者各位の御尽力に対して心から感謝の意を表したい。

（梅宮　茂）




須恵器　　坩

大窪横穴36号墳出土

## 第二節　国道六号線沿線の遺跡

### 1　はじめに

陸前浜街道はこのたび改修されることとなり「一級国道第六号線磐城国道」と改称され、今後数年でその工事も完了するようである。

この磐城国道の通過地域には多くの遺跡が存在するが、このうち工事によって滅失の止むを得ないものも生じたので、第一節のような経過で発掘調査も行った。これにさきだち、工事当局の協力により沿線遺跡調査の便宜を得て工事現場を歩き、未知だった遺跡の発見や、出土遺物の探索を行い、現在なお継続調査をつづけており、一～二の発見もある。工事の進むにつれて、発掘調査を必要とするものもあろうし、新発見もあろうかと思われるが、とりあえず国道六号線計画図に標示し得る遺跡中、路線近接のもののいくつかを表示し、そのうちの主なものを概観したいと思う。

なお次表の外、小さな遺跡まで詳細にあげたらこの二～三倍に達するであろうことを付記する。

### (1)　沿線遺跡地名表

#### a　双葉地区

久之浜町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 田之網貝塚 | 田之網字平松山 | 縄文中期 |
| (2) | 鹿島古墳跡 | 久之浜字鹿島 | 前方後円 |
| (3) | 新屋敷古墳群跡 | 末続字新屋敷 | 円墳群跡 |

広野町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 関ノ上遺跡 | 折木字関上 | 縄文後期 |
| (2) | 東町遺跡 | 下北迫字東町 | 弥生 |
| (3) | 下北迫遺跡 | 下北迫集落東裏 | 弥生 |
| (4) | 林蔵寺遺跡 | 下北迫林蔵寺背後 | |

楢葉町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 堂平廃寺跡 | 山田岡字後沢 | |
| (2) | 稲荷前遺跡 | 下小塙字稲荷前 | 縄文晩期 |
| (3) | 上原横穴群 | 下小塙字上原 | |
| (4) | 北田古墳群 | 北田字新田東 | 円墳 |
| (5) | 北田横穴群 | 北田字合張（かっぱり） | |
| (6) | 天神原遺跡 | 北田字天神原 | 縄文後期 |
| (7) | 洞横穴群（ぼら） | 波倉字洞 | |

富岡町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 大膳原遺跡 | 小浜字大膳原 | 弥生、土師 |
| (2) | 東原遺跡 | 下郡山字東原 | 土師 |

大熊町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 塚ノ草遺跡 | 熊字塚草 | 縄文後期 |
| (2) | 棚和子（たなご）古墳群 | 夫沢字棚和子 | 円墳 |
| (3) | 熊ノ沢古墳群 | 夫沢字熊ノ沢 | 前方後円墳 |
| (4) | 熊ノ沢横穴群 | 夫沢字熊ノ沢 | 円墳 |

双葉町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 清戸迫横穴群 | 新山字清戸迫 | |
| (2) | 清戸迫古墳群 | 新山字清戸迫 | 円墳 |
| (3) | 塚ノ腰古墳群 | 郡山字塚腰 | 円墳 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| (4) | 郡山貝塚 | 郡山字塚腰 | 縄文後期、晩期 |
| (5) | 五番廃寺跡 | 郡山字五番 | |
| (6) | 深谷古墳群 | 長塚字深谷 | 円墳 |
| (7) | 深谷横穴群 | 長塚深谷 | |
| (8) | 寺内古墳群 | 長塚字寺内前 寺内迫 | 円墳 前方後円墳 (発掘地) |
| (9) | 寺内迫横穴群 | 長塚字寺内迫 | |
| (10) | 中田横穴群 | 中田字大仏前 | (五小群あり) |
| (11) | 鴻草横穴群 | 鴻ノ草 | (五小群あり) |

浪江町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 塚ノ越遺跡 | 高瀬字桜木 | 土師住居跡 (発掘地) |
| (2) | 小高瀬古墳群 | 高瀬字小高瀬 | 円墳 |
| (3) | 丈六古墳群 | 高瀬字丈六 | 円墳 前方後円墳 |
| (4) | 丈六横穴群 | 高瀬字丈六 | |
| (5) | 本屋敷古墳群 | 藤橋字本屋敷 | 円墳 方墳 |
| (6) | 百間沢遺跡 | 北幾世橋字西原 | 縄文中、後期 |
| (7) | 宮林古墳群 | 谷津田字宮林 | 円墳 前方後円墳 |
| (8) | 藤橋古墳 | 藤橋字山居前 | 前方後円墳 |
| (9) | 西台遺跡 | 藤橋字西台 | 縄文晩期 |
| (10) | 原遺跡 | 酒田字上原 | 弥生 |
| (11) | 原古墳群 | 酒田字上原 | 円墳 |
| (12) | 観音前横穴群 | 藤橋字観音前 | (二群) |
| (13) | 植畑貝塚 | 北幾世橋字植畑 | 縄晩、弥生、土師 |
| (14) | 堂ノ森古墳 | 北幾世橋字堂ノ森 | 前方後円墳 |
| (15) | 狐塚古墳群 | 棚塩字狐塚 | 円墳 前方後円墳 |

b 相馬地区

小高町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 行津横穴群 | 行津字宮下 | |
| (2) | 上浦加賀後貝塚 | 上浦字加賀後 | 縄文中期 |
| (3) | 宮田貝塚 | 上浦字宮田 | 縄文中期 |
| (4) | 小谷津貝塚 | 泉沢字小谷津 | 縄文晩期、弥生 |
| (5) | 小泉横穴群 | 耳谷字小泉 | (二群) |
| (6) | 耳谷横穴群 | 耳谷字表 | |
| (7) | 蒲迫古墳跡群 | 耳谷字蒲迫 | 円墳 |
| (8) | 山沢古墳群 | 耳谷字山沢 | 円墳 |
| (9) | 上岩崎横穴群 | 福岡字上岩崎 | |
| (10) | 浪岩横穴群 | 泉沢字浪岩 | (二群) |
| (11) | 花輪古墳 | 大井字花輪 | 円墳 |
| (12) | 花輪遺跡 | 大井字花輪 (俗称花台輪) | 弥生、土師 |
| (13) | 岩迫横穴群 | 大井字岩迫 | |
| (14) | 塚原古墳群 | 塚原字諏訪原 | 円墳 |

原町市

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 垂谷古墳群 | 堤谷字垂谷 | 円墳 |
| (2) | 大瓮遺跡 | 日祭神社台地 | 縄文後期 |
| (3) | 京塚沢窯跡 | 雫字京塚沢 | |
| (4) | 折ケ沢窯跡 | 北原字折ケ沢 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| (5) | 桜井遺跡 | 桜井字原中 | 弥生（二群） |
| (6) | 荒屋敷遺跡 | 桜井字荒屋敷 | 縄文晩期 |
| (7) | 桜井古墳群 | 上渋佐原畑 | 前方後方墳<br>円墳（指定地） |
| (8) | 高見町遺跡 | 高見町二丁目 | 土師、須恵 |
| (9) | 北山古墳群 | 下北高平字北山 | 円墳<br>前方後円墳 |
| (10) | 植松廃寺跡 | 上北高平字植松 | |
| (11) | 植松遺跡 | 上北高平字植松 | |
| (12) | 泉廃寺跡 | 泉字寺家前<br>館前 | （県指定地） |

鹿島町

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 川子横穴群 | 川子溜池西側 | （三群あり） |
| (2) | 大窪横穴群 | 江垂字大窪 | （発掘地） |
| (3) | 塚田、塩崎横穴群 | 江垂字塚田<br>塩崎字船着 | |
| (4) | 江垂古墳群 | 江垂字大窪 | 円墳 |
| (5) | 八幡林遺跡 | 寺内字八幡林<br>大谷地 | 縄文中、後期 |
| (6) | 真野古墳群 | 寺内字八幡林<br>大谷地 | 円墳<br>前方後円墳 |
| (7) | 長沼古墳群 | 小池字長沼 | 円墳 |
| (8) | 柳町遺跡 | 横手字柳町 | 縄文後期 |
| (9) | 横手古墳群 | 横手字八斗蒔<br>榎内 | 円墳<br>前方後円墳 |
| (10) | 御所内廃寺跡 | 横手字御所内 | |
| (11) | 御所内遺跡 | 横手字御所内 | 縄文晩期 |
| (12) | 永田古墳群 | 八沢永田 | 円墳<br>前方後円墳 |
| (13) | 天神沢遺跡 | 江垂字天神沢 | 弥生 |
| (14) | 真野古城跡 | 江垂御前山 | |

相馬市

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 地ノ内遺跡 | 日立木字地ノ内 | 弥生 |
| (2) | 太郎穴横穴群 | 日立木字立谷 | |
| (3) | 潜石（くぐりいし）横穴群 | 飯豊字潜石 | |
| (4) | 高松古墳群 | 坪田字高松円墳 | 前方後円墳 |
| (5) | 福迫横穴群 | 馬場野字福迫 | |
| (6) | 根岸古墳群 | 小泉字根岸 | （発掘地） |
| (7) | 小泉横穴群 | 小泉字根岸 | |
| (8) | 小泉古墳群 | 小泉二六、五△附近 | |
| (9) | 馬場野横穴群 | 馬場野丘陵西側面 | |
| (10) | 中村城本丸横穴群 | 中村城跡内 | |
| (11) | 表西山横穴群 | 中村字表西山 | |
| (12) | 丸塚古墳群 | 成田字船橋 | |
| (13) | 藤堂塚遺跡 | 成田字藤堂塚 | |
| (14) | 塚部古墳群 | 塚部字新城下 | |
| (15) | 椎木住居跡 | 椎木字新城山 | 土師 |

新地村

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 三貫地貝塚 | 駒ヶ嶺字高田 | 縄文晩期 |
| (2) | 藤崎横穴群 | 駒ヶ嶺字藤崎 | |
| (3) | 大壇古墳 | 駒ヶ嶺字藤崎 | |
| (4) | 新地貝塚 | 小川字貝塚西 | 縄文後、晩期 |
| (5) | 小川竪穴群 | 小川長清水原 | |

(6) 富穴前横穴群　駒ヶ嶺字富穴前

(7) 富穴前古墳　駒ヶ嶺字富穴前　円墳

(8) 富穴前遺跡　駒ヶ嶺字富穴前　弥生

(9) 雀塚古墳群　小川字二羽渡（にはたり）　円墳　方墳

(10) 熊野迫田古墳群　福田字迫田　円墳　方墳

(11) 大崎古墳　福田字埒木崎（らちきざき）　円墳

### (2) 遺跡の種類と分布状態

本県遺跡の分布には粗密があるが、会津平野、阿武隈川流域、海岸地帯の三地区に区分され、縄文、弥生、古墳、上代仏教関係などの遺跡が相当豊富に存在する。

国道六号線はこのうちでも密集地区の海岸地帯を通過し、特に遺跡の多い丘陵と平野の中央部を縫って横断する。従って多くの遺跡が破壊の運命に遭遇するものと予想されたのであったが、工事関係当局の配慮により、予め通過地域内の遺跡分布図を求められ、それを参考に計画されたかのようで、予想外に破壊数が少なかった。通過地域内の遺跡の分布状態を概観すると、久之浜、広野、楢葉、富岡、大熊の各町にはあまり多くなく、双葉、浪江、小高、原町、鹿島、相馬、新地などの各市町村には各種遺跡が多い。このうちでも双葉、浪江、小高、原町、鹿島、相馬に特に密集している。

これを種別にみると、縄文式遺跡は各市町村ともにあるが、特に双葉郡北部と相馬郡とに密集している。弥生式遺跡は、そう多くないが広野町、浪江町、原町市、相馬市、鹿島町には貴重なものがある。古墳は双葉町、浪江町、原町市、鹿島町、相馬市、新地村に重要なものがある。

また仏教遺跡としては楢葉町、双葉町、小高町、原町市、鹿島町、相馬市などにのこり、築跡、古館、城跡、住居跡など多種である。

## 2 遺跡概説

### a 縄文、弥生、土師などの遺物散布地

本地区内縄文遺跡には早期はまだ見当らず、前期のはあるが少なく、中期、後期、晩期が多い。阿武隈山中とその東麓には、早期は少ないながらもいくらか見られる。弥生遺跡では桜井式の名ある土器片散布する原町市桜井、石庖丁の多く発見された鹿島町天神沢、彩色土器が見出された小高町小谷津貝塚、縄文晩期からつずくと思われる浪江町上原、植畑両遺跡、籾痕ある土器圧を出している広野町字東町遺跡などがある。

このほかにも所々にかなりの遺跡があり、土師器を出す遺跡としては浪江高瀬の塚ノ越、清水一連の大遺跡、小久村大場、富岡町原、西原、大膳原、浪江町大平山、南大坂、小高町大井の花輪台、原町市高見町二丁目、鹿島町大河内（だいこうち）その他の、竪穴住居跡のほとんどは土師で相馬市椎木新城山、新地村小川の長清水原は沿線よりそれるが、地表観察によっても明らかに竪穴であることがわかる。

さらに鹿島町字川原、原町市折ケ沢溜池南方高地、小高町神山字竹ノ町、浪江町川添字南大坂竪穴群、双葉町郡山字沼ノ沢、楢葉町山田岡字後沢その他などが挙げられる。

b 貝　塚

前記六号沿線遺跡表にいくつかあげておいたが、本報告書に関係ある久之浜町、新地村間に所在する貝塚を特に記しておきたい。それは本県では海岸にしか見つかっていない重要な遺跡だと思うからである。

久之浜町

田之網貝塚（平松貝塚ともいう）

双葉町

郡山貝塚

浪江町

植畑貝塚

小高町

上浦宮田貝塚

上浦加賀後貝塚

浦尻西向貝塚

浦尻台ノ前貝塚

浦尻北向貝塚

小谷貝塚

南台貝塚

片草貝塚

相馬市

迎貝塚

朝日前貝塚

新地村

三貫地貝塚

新地貝塚

これらのうち新地貝塚は昭和五年史跡として指定されているし、三貫地貝塚は昭和二十六年、二十七年の二回の発掘によって多数の（約一〇〇体）の人骨と、各種重要な遺物（二ッ口壺や、甕棺、朱塗土器、土面など）を出した。

新地の小川は新地式と呼ばれる土器が主で手長伝説を伴っており、片草貝塚は縄文前期、南台、小谷津、植畑の諸貝塚は縄文晩期から弥生につづくものとみられ、上浦宮田は繊維土器を含み、上浦加賀後は諸磯黒浜の両式混在の中期に属し、その他のもそれぞれの価値をもつ重要な遺跡である。本県には指定貝塚はまだ小川だけだが他のも濫掘をせず保存したいものである。

c 古　墳

古墳は各町村にあるがとくに双葉町以北に多く高塚、横穴古墳ともにあり、高塚古墳には前方後円墳、前方後方墳、方墳、円墳の各種、地下遺構にも横穴式、竪穴式とがある。横穴には棺床のあるもの、ないもの、丹彩を敷したもの施さないもの、ていねいに削られたもの、粗造なものなどあり大小また各種である。

埋納遺物は一般に少ないが、そのうちには僅かながら貴重なものが含まれている。ずなわち双葉町清戸迫横穴出土の異形頭椎太刀、浪江町南上ノ原円墳の鉄剣、槍、鉄鎌、鹿角製直弧文刀装具（この刀装具は、国有になっている）、鹿島町寺内前方後円墳の双魚佩、各地円墳から発見

の各種の石製模造品、鹿島町長沼円墳の馬鐸、同町大窪横穴からの金銅製杏葉、相馬市成田墳跡に埋没していた埴輪の人物馬その他各種埴輪破片、同市高松前方後円墳の女性埴輪頭部と同筒片、鹿島町横手の環湟円墳の円筒片など、また石棺にも浪江町南大坂円墳二基からそれぞれ刳抜石棺が出ており一基からは二つの石棺が発見されている。刳抜石棺は東北には少なく本県では石城の一とこの二の三棺だけだろうと思う。

鉄剣が古墳時代中期を示すものとするなら、関東以西のそれよりは年代が降るだろうが、形式は中期のものということになる。この鉄剣があった円墳には三棺埋納していた。一墳多棺の一例でもある。埋納三棺は墳麓近くしかも墳をとりまくような置き方であった。

また、鹿島町横手前方後円墳（六号線がかかるので事前に発掘調査した）石室の玄門は切石を用い二枚の扉を閉じ合せた感をもたせる状態につくられていた。あるいは観音開きというべきであるかも知れない。石室構造上注意すべき一例であろう。

次に高塚古墳の墳形であるが、原町市桜井には史跡指定の前方後方墳があり、前方後円墳は大熊町夫沢字屋敷前、浪江町谷津田字宮林、同町高瀬字丈六、同町棚塩字狐塚、同町北幾世橋堂ノ森、同町藤橋山居平、原町市下北高平字北山、同市高平権現壇、鹿島町永田（二基）、同町寺内（二基）同町横手字八斗蒔、相馬市高松など十数基。方墳も新地村熊野迫田古墳群中に三基、同村小川字二羽渡に一、浪江町立野字巡礼堂に大小三基、同町藤橋字本屋敷に一と八基を数いる。他は円墳であるが新地村駒ヶ嶺字富穴前には葺石環湟円墳があるのは珍らしい。

大形の高塚を営まれた関東と宮城県とに挾まれた本県海岸古墳帯の高塚古墳は一般に小さい。これはいかなる理由によるものであろうか。当時の史的事実と、地方豪族の消長などから究明すればおのずから明かになるであろう。

### d　仏教関係遺跡

寺院跡は、双葉郡檜葉町山田岡字後沢に、俗称堂平という小台地が、谷と谷とに挾まれてあるがそこの畑の縁に三箇の礎石が南北に並んでいる。かっては何十の礎石があったという。時代は明らかでないが礎石は可成大さく中心間の距離は約三㍍二〇糎（約十尺）建物は草葺か板屋根でもあったろうか。とにかく瓦は使用しなかった。近接地に須恵の窯跡があるのに寺院跡にも窯跡附近にも瓦片が見られない。

双葉町郡山字五番にある廃寺跡には古丸が数多く発見されているが礎石はほとんど見当らない。後人が利用したものであろう。瓦片の散布状態から考えると相当な面積をもった寺院だった思う。

相馬郡では原町市の泉と植松と、鹿島町横手字御所内、相馬市中村字黒木田との四ヵ所にある。泉廃寺は非常に広い寺域であったようで礎石の所在も、瓦の分布も地方では見られない広さをもっていて、今は県指定の史跡となっている。瓦は同市雫字京塚沢の瓦窯で焼かれたもので、植物の葉の変化模様の特殊な瓦が含まれており、県の考古資料として重要文化財に指定されている。

植松は面積はあまり広くなく縄文遺跡でもある。ここの瓦は多いが礎石と思われるものは僅か一基あるだけであるが珍らしい遺物が泉とここからと発見されている。泉のは須恵製円面硯の残片、ここのは墨書銘ある土師、ともにそれぞれの寺院に関係あるものであろう。この植松

廃寺の瓦は同市入道迫瓦窯で焼かれたものと思う。入道迫瓦窯跡は昭和二十六年後藤守一氏が発掘調査している。

鹿島町横手字御所内の御所内廃寺跡は県指定史跡、長径約一㍍、やや楕円形造り出しのある礎石が一つ残っている。他に三十数個配置されたままの礎石列があったが明治三十年代、畑から取り除いて庭石に使用したと地主が話している。今は瓦片も少なくなっている。ここで珍らしいのは丸味をもった土塔が出たことである。

相馬市黒木田にある廃寺跡には瓦が非常に多い。瓦に朱塗のもあったと思われ瓦片に朱が点々ついているものが出ている。耕地整理した田の間に一段高い畑となっているから耕地整理の際何かに利用されたか礎石はなくなっている。

最後にこの地域にのこる磨崖仏について簡単に述べておく。相馬郡小高町泉沢に「後観音、前薬師」と呼ばれる石窟仏がある。呼名のように、磨崖仏は水田になっている小谷をへだてて前後の丘陵の南面に造られていて、後岩屋には約三十尺の千手観音一躯と左右に賢劫千仏の浮彫があり、前岩屋には約十尺の仏体四と二体の菩薩形仏像、円頂比丘形像、天部などとともに光背も彫刻されている。

刀法雄渾しかも軽快、惜むらくは永年の星霜に破損はなはだしいことである。様式は従前奈良期といわれたことがあるが、藤原時代の作であろうとされ、国の指定史跡になっている。今は真言宗の慈徳寺に属している。寺はこの石仏から東北に三〜四百㍍はなれた所だったといわれているがそこには礎石も瓦片もなく寺院跡としての徴証はない。慈徳寺の寺名は後世のものであろう。

e　古館、古城跡

鹿島町江垂の御前山と俗称される丘に、深い空濠と、高い土塁とを二重に施工した古城跡がある。面積は多賀城に近いと思われ、後世の城でいえば本丸に当る部位には古瓦片が散見するが礎石は見当らない。瓦は胆沢城のによく似ているから平安期のものであろう。また小高町と原町市との境界丘陵上六九、八㍍三角点のある所は瓢形でくびれ部に空濠をつくり頂部は二区にわけているが両区とも削平されている。

この両区には土師片が露出している竪穴が十基ほどある。丘陵北斜面には高さ一〜二㍍の土塁が東、北、西の三方、各辺とも直線に回らしている。一見土豪の館跡とも見えるが、頂に土師の竪穴があることは上世のものであることを物語るものであろう。真野古墳群の一劃にも、土塁と空濠をめぐらされた遺跡がある。

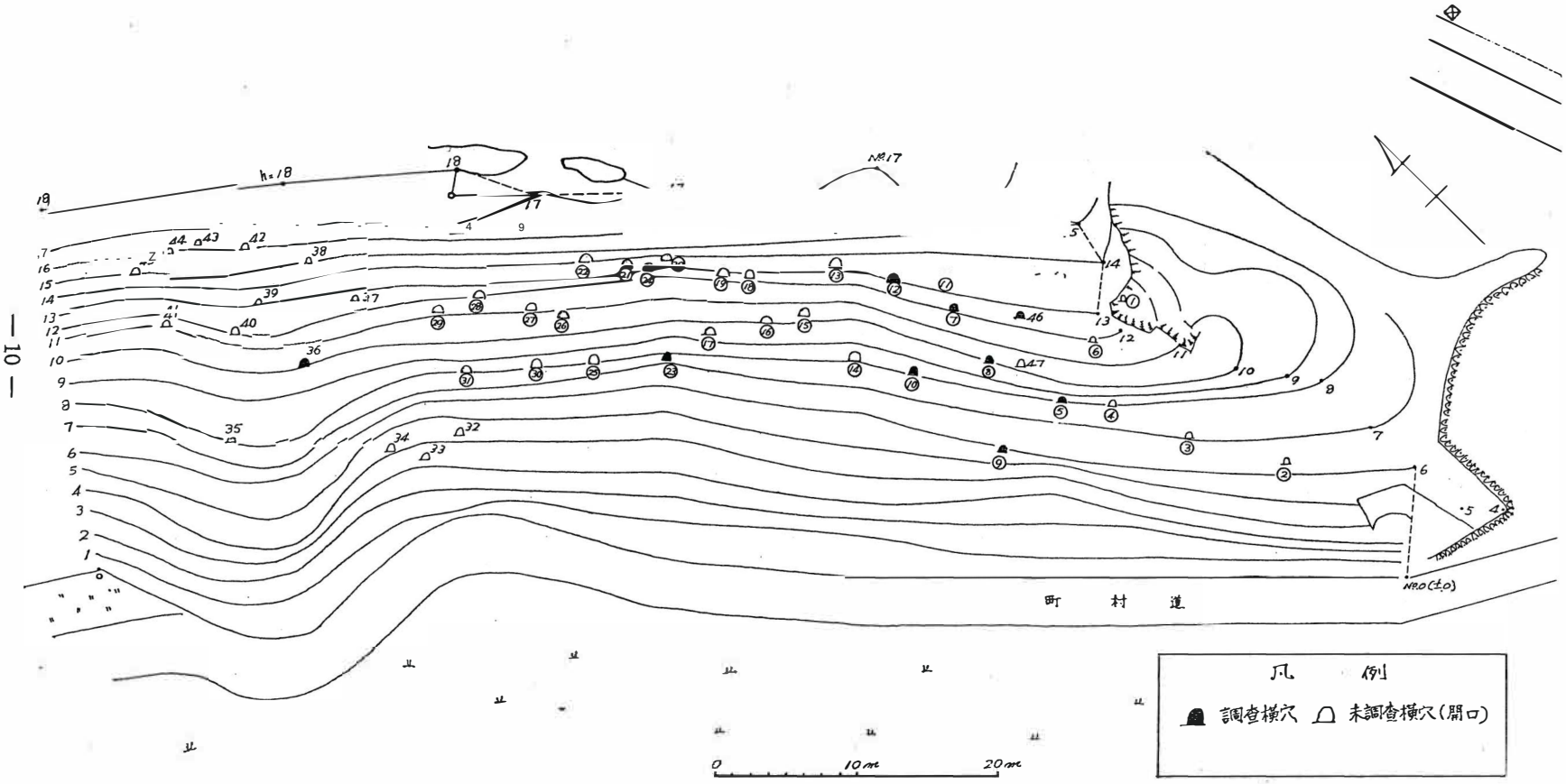
## 3　むすび

以上の各地、各遺跡についてその現状を書くべきであろうが、それは前述および、発掘記録によってほぼ明かになると思うので略すこととする。

（渡　部　晴　雄）

附記　近時双葉郡富岡町小浜の海岸に近い丘陵上から古瓦が発見された。

大窪横穴古墳附近地形図　（地理調査所５万分の１「相馬中村」より）




—大窪横穴墳は下段常磐線の東にあり—

# 第二章　大窪横穴古墳群

相馬郡鹿島町

## 第一節　古墳の位置と現況

### 1、位　置

本横穴墳群は相馬郡鹿島町江垂字大窪地内にある。常磐線鹿島駅から南々東約一・五キロの地点で鹿島町立真野小学校の西南辺に位置する俗称八崎山の南斜面である。

八崎山丘陵は、常磐線をはさんで東西に長く走り、南斜面にある横穴古墳は、西は塩崎の磨崖仏のある附近から、東端まで断続しており、福島県遺跡地名表第五五九号（相馬一三一号）の「江垂横穴古墳群」に当る。

江垂横穴墳群は三支群に分けることができよう。常磐線の西を、本書においては、「塩崎横穴支群」とし、鉄道の東から今回調査を行った四十八号墳までの間を「江垂横穴中部支群」と名づけ、ここから東端まで一、〇〇〇㍍の間を「大窪横穴支群」と呼称し、本書においては、単に「大窪横穴古墳群」と称することとする。

この区分は便宜上名づけたもので、塩崎支群にはまだ未開口のものが多いとされ、学術調査は施されていない。江垂中部支群と大窪支群との間には、何らの区分する理由はない。地名からいっても大窪地内であるから「大窪横穴」に包含されるのであるが、本書の報告の対照としなかったので二分したに過ぎないことを断っておく。

この附近は阿武隈山脈に源を発した真野川が海岸近くにおいて蛇行しながら太平洋に流れこみ、周辺に沖積低地を作っている。この低地の三方は新生代の丘陵によって取囲まれており、なだらかな起伏を見せているが、その陵線は複雑に入り乱れつつも、随所に低地に向って東に延び、小さな舌状丘陵を呈している。本横穴墳の位置する八崎山の他に、新山・小山田等の丘陵がそれで、眺望のよい所となっている。八崎山は標高約三十㍍で、高いとはいえないが、海蝕をうけて急傾斜をなし、低地との地差が大で、吃立した観がある。これは新山・小山田の丘陵においても同様でその南斜面に横穴墳群があることや、陵線上に円墳群をもっている点でも、三丘陵共通している。

### 2、附近の遺跡

鹿島町における古墳文化の遺跡は以前から知られ、大正の頃から学術調査や盗掘を受けている。次にその遺跡の概略を列挙してみよう。

〔寺内古墳群〕　大窪横穴墳群の西北西約二キロの台地上で、鹿島町寺内字八幡林を中心にその数七十基を越える代表的な後期古墳群である。前方後円墳二基をまじえた小型の円墳で、戦前には福島県史蹟調査員、小此木忠七郎、内務省考査官、柴田常恵両氏の調査があり、〔註一〕戦後は福島県立相馬高等学校〔註二〕、及び慶応義塾大学〔註三〕の調査があった。

出土品は直刀・馬具・玉類が多く、他に石製模造品、鹿角装刀子・金銅製双魚佩等が知られている。内部構造は組合せによる箱式石室が多く、他に舟形の礫槨・箱形礫槨もみられる。

〔小池古墳群〕　寺内古墳群の西方約一㌔、鹿島町小池字長町にあり、寺内古墳群と同一台地上に分布する。いわば寺内古墳群の支群と見るべきであろう。同じく後期に属するもので、銅製馬鐸・兵庫鎖付轡等の出土が知られている。現在は十三基を数えるが、かっては二十基を越えたといわれ、戦後開墾によって失なわれたものと思われる。

学術調査は相馬高等学校、慶応義塾大学によって行なわれている。いろいろな点で寺内古墳群と共通性の多い古墳群である。

〔横手古墳群〕　真野川冲積低地の北岸、鹿島町横手字八斗蒔から横手字原田にかける一帯の畑及び水田である。一基の前方後円墳と十数基の円墳群より成り立ち、一号（前方後円墳）～十二号墳が一群をなしているのに対して、十三号墳及びこれをとりまく数基小円墳は陪塚を思わせる。これは前記一群より約五百㍍程西方に孤立した形で分布している。

立地的に寺内・小池その他の丘陵上の古墳群とは相異する低地に分布している点に注意すべきであるが、調査の結果からもその差違が感じられ、編年的に重要な意味でもっている。即ち墳丘が当地方においては比較的大きく中期的な印象を与え、第十三号墳が円筒埴輪を伴なっている。しかし昭和三十五年に発掘された第一号墳の例では、新生代砂岩を用いて、よく整形された横穴式石室で、羨道部を失っていたが、特に玄門部の石組みに独得の組合せをしている。

明治末期鉄道敷設工事の際に殆んど大部分が盗掘されたとのことであるが、墳丘はそれ程損なわれてはいない。（註四）

〔屋形古墳群〕　真野川冲積低地の北辺を劃する新生代丘陵上の円墳群で、大窪横穴墳群とは真野川を隔てて対応する位置にある。殊に俗称陣場山の頂上には双円墳と見られるものがある。また南斜面には横穴墳も点在している。まだ学術調査をうけていないが、農道工事の際、横穴墳附近の斜面より、須恵器の平瓶一箇が出土している。

〔川子横穴墳群〕　大窪丘陵から真野川支流による冲積低地を隔てた南側の丘陵で、屋形横穴墳群と同じく陵線が複雑なため遺跡の全貌はつかみ得ないが、川子溜池を中心とする周辺の斜面に横穴が開口している。

またこの附近から更に東へ延びて烏崎に至る丘陵の陵線上には円墳が点在する。

〔新山古墳群〕　真野川冲積低地の西辺を劃する丘陵の陵線上の円墳群で薬師神社の背後に二基をみる事が出来る。南斜面には横穴墳が点在して、新山横穴墳群を形成する。これ等の大部分は戦時中防空壕として使用された。

〔小山田古墳群〕　新山古墳群の北方約七百㍍を隔てて東に延びる丘陵上に五基の円墳が点在する。南斜面には、十数基の横穴墳が点在し、小山田横穴墳群を形成している。

〔細内墳跡〕　横手古墳群の西方約一・五㌔の地点で、同じく冲積低地に位置している。墳丘は全く失われ、墳形は知るよしもないが背後の降居神社境内に石棺に用いられた石が残存しており、その大きさは一・七㍍を数える。明治三十四年頃掘崩し直刀等が出土した。

〔大六天遺跡〕　大窪横穴墳群の西北方約一・五㌔を隔てた、江垂字大六天に所在する。真野川南岸に沿った低地遺跡で、水田下で層位が深いため出土量が少なく土師器と思われる。周辺の古墳群と対応した住居跡

と思われる。

〔大河内遺跡〕　真野川を隔てた大六天遺跡の対岸で、大河内橋のたもとにあたり、現在宅地になっている。真野川が蛇行する内側の低い河岸段丘上である。数年前土採中土師坩が二箇出土した。一箇は破壊しが一箇は地主宅に保存されている。円筒状の縦に刷毛目文が走る坩である。

### 3、江垂古墳群〔円墳群〕〔横穴墳群〕

鹿島町の古墳時代遺跡は非常に豊富で、古墳群の立地条件からみると沖積低地に分布するもの、周辺の丘陵上に分布するものとに分類され、更に丘陵上の古墳は寺内古墳群、小池古墳群等の如く台地上のものと、さらに高所の陵線上のもの、及びその斜面の横穴墳とに大別される。それぞれの立地条件の相違は、それぞれ相違する文化様相を示しているようである。

江垂古墳群は鹿島町に於ける古墳群の中では東南部に位置し殊に横穴古墳は交通の便のよい事や寺内古墳群に近い事等から以前より知られ、しばしば盗掘の厄にあっていた。殊に戦時中は真野小学校の避難場所とされ、横穴墳の多くは防空壕として利用されたため、大部分が開口しており、未知の出土品も少なからずあったであろうと推定される。これらのうち、いくらかは、附近の掘越直人氏によって保管されていたが、今回福島県教育委員会に寄贈されたことは斯学のため誠に喜ばしい次第である。

江垂、大窪丘陵の陵線上には十数基の円墳が点在し、出土品は勾玉が相当量出土したうわさがある以外は不明である。樹木が茂っているため、台地西部の緩傾斜の処は割合によく保存され、大型の円墳であるのに対して大窪横穴の頂上にある円墳は傾斜が急で頂上が狭いため封土が流れ、小型で不整形な円墳になっている。

横穴墳は、この丘陵の前端から南斜面のほとんど全体にわたり、国鉄常磐線に沿って彎曲し、さらにこれをこえて西部の塩崎部落に到る広範囲におよび、鉄道の西方約一・五キロの塩崎磨崖仏附近まで点在するようで、その数は百数十基といわれる。全面の調査は限られた日数で分布状況を詳細に踏査することは不可能であった。恐らく鉄道沿線からは密度がうすくなって、断続しながら西方に延びるものと思われる。分布のもっとも濃密な部分は鉄道トンネルより東方へ約三百㍍の区域で、上層から下層まで三層ないしは四層をなして並列する。

今回の調査は丘陵の東端約七十㍍の部分で、分布密度はややうすくなっている。それでも四十八基の横穴墳が、不整ながら二層をなして並び、二十六号附近から以西は三層をなしている。すなわち三十六号から四十一号に連なる中層をはさんで、二号～三十五号は下層、一号～四十五号は上層をなして断続する。分布状況からみて、下層は二号～三十一号が一グループをなし、三十二号～三十五号は別のグループとして西方にのびるのかもしれない。壁画（朱描）を有するといわれる横穴墳は下層の三号墳である。

## 第二節　発掘調査の経過

第一班の相馬班は、後半の調査として相馬郡鹿島町江垂横穴群の支群である大窪横穴群を調査することなった。

八月十日　晴

梅宮は、前半の調査地点である相馬市根岸古墳の整理を終って渡辺一雄、馬目調査員と共に午前十一時鹿島町に到着し、鹿島町教育委員会、公民館を訪問して協力を依頼し、さらに岡本武男主事と計画を協議し、人夫の手配を行う。午後関連遺跡である天神沢遺跡を踏査す。夕方堀込静夫調査員今野主事到着。

十一日　晴暑し。

午前八時半宿の車で現地に到着。九時一五号墳の前で慰霊祭を行う。調査上の注意を話した後次の班別役割を行う。

| | |
|---|---|
| 調査担当者 | 梅宮　茂 |
| 調査主任 | 堀込静夫 |
| 写真係 | 竹島国基 |
| 記録係 | 渡辺一雄　山本　明 |
| 出土品係 | 山本　明　臼井一郎 |
| 測量係 | 平岡三郎　鈴木敏一 |

調査会議を開き、試みとして次の三横穴に着手した。もちろんすでに開口されているものである。

五号墳　○臼井、渡辺、今野　相馬女子高校生徒
九号墳　○佐藤、馬目、堀込　相馬高等学校　〃
十号墳　○山本、梅宮　原町高等学校　〃

この間梅宮、今野は地主である大窪徳三氏を訪問して日頃の協力を謝して、なお今後の協力を依頼、また本遺跡の出土品を所有する堀越直人氏に助力を求めた。

十二日　快　晴

大窪、堀越両氏の協力で、未開口の横穴をボーリングにより探すが、発見されない。五号の室外に内黒の土師器片を発見、十号から須恵器出土。これらの実測を行う。午後新に三十六号に着手、佐藤調査員相馬高校・相女生の応援を受け、前庭部から須恵器三箇を発見する。この日県史編さん委員事務局の宗像主査、佐藤堅治郎委員ら来訪。

十三日　晴

人夫は調査完了した五号、九号の埋めもどしにかかり、新に七号（山本）八号（渡辺）二三号（堀込）に着手する。八号は慶応大の清水潤三氏らが発掘したものである。三六号の前庭から玉類出土。

この日松田県社会教育課長来訪。二三号前室から提瓶出土。

十四日　晴

十一号を埋めもどし、三六号、七号の実測にかかり、八号の羨門外に副室のあるのを発見し、雲珠一箇鉄鏃出土。二三号続行。新に四六号の未開口横穴を発見着手（臼井）、小さい粗略されたもので鉄斧出土する。

女子生は土器洗いを行う。梅宮、堀込は、四八号までの全開口横穴を踏査し記録する。

十五日　晴むし暑し

七号八号実測後埋めもどし、二三号実測続行、新に十二号に着手（佐藤、渡辺）小さな副室あり、金環、勾玉一箇発見。梅宮は堀越氏の案

内で、本横穴群の頂上陵線に分布している山上墳（円墳）の分布状況を視察。

夕刻全調査員、宿舎において明日の最終日の調査を協議し、夜出土品を整理仮梱包を行う。

十六日　晴

十二号墳の実測後埋めもどし、午前にて終了。午後新に小横穴四八号を発見し、梅宮、今野、大窪、堀込とともに調査し、四六号と同じ状態で直刀一を発見、小形の横穴の好資料を確認した。

夕刻、浪江町に移動し、第二班双葉班と合流し、出土品の整理を行う

十七日　晴

浪江町の宿舎において、本調査の出土品を公開陳列し、研究会を行い、調査結果について討議研究を行い、昼食後調査隊を解散する。事務局員のみ残って事務整理、出土品の梱包を行い、輸送業者に委託し、一切を終了する。

## 第三節　各横穴の構造

今回調査を行った江垂古墳群のうち大窪横穴支群は第一章に記述したとおり、国道六号線工事の影響を受ける八崎山丘陵の東部で、突端から約一、〇〇〇㍍。地形が急に傾斜の度を増し、小さなV字形の凹部をなす沢が頂上より麓に一線を劃している地点までとし、その間に四八基の横穴を確認した。

分布状況を見ると、頂上部に近く開口しているのが多い。中腹以下麓近くにも存在しているのは、横穴構成に適する地形（傾斜、土質等）によるのであろうが、便宜上上下二層に区分して記述し、今回発掘を行なわず、玄室に入って観察した資料は、別項に記すこととする。

したがって、本項において詳述する横穴は既に開口しているものを再発掘を行った十基についての資料とする。

(1)　上層に位置するもの。

**〔七号墳〕**　玄室の最大幅二・六㍍、奥行二・四四㍍で、略々正方形のプランをなし、天井はドーム形になっている。平面プランは隅丸であるが前壁の隅よりも奥壁の隅が大きな丸みをなす。しかし床面と壁面との接線は鋭角をなして丸みをもたないことは、他の横穴墳と同様である。

床面は玄門附近に少しの敷石があっただけで排水溝等の構造はない。羨道は前壁の中央よりもやや右寄りに開口し、玄門部より羨道奥端の方がやや巾広になって、殊に左壁が羨室に向って広がる。玄門は幅六六㌢、高さ一㍍で上端が直線をなすアーチ形をなす。玄室の床面はそのまま羨門まで続き、羨門外で十二㌢低くなり、そのまま外方に開く。

羨門閉鎖装置は花崗岩の一枚石をたて、塞石とし、その両側の下部をおさえるために三〇㌢内外の三ケの板石が残存していた。塞石は半ば外方に倒れかかり開口していたが、かって羨道より平瓶が出土し（写真第九図④）また玄室の左奥隅より玉類が出土したというが詳細は不明である。天井は羨門外において六十四㌢内外高まり、幅一・八㍍の前室となっている。

**〔八号墳〕**　この横穴は慶応義塾大学が真野古墳調査の際調査を試み

て、雲珠、杏葉、須恵器を発掘したとのことである。

平面プランは隅丸のほぼ正方形をなす玄室であるが、前壁に比して奥壁の長さがやや長い。幅三・一四㍍、奥行二・七㍍で左右の側壁の長さが等しくないため、ゆがんだプランをなす。羨門は縦長の梯形状で直線により構成され、（台形と表現する）閉鎖装置として塞石の切り込みがあり、重圏をなす。

玄室には排水溝はないが、敷石があり、盗掘によって捲乱されていた。天井はドーム状で均整のとれた張りを示している。前壁ほぼ中央に羨道が開口するが、七号墳と同じく、右壁は玄室に直交するに対して、左壁はラッパ状に開く。そのため羨門の幅が七〇㌢に対して、羨道奥端においては一㍍になっている。このような傾向は他の横穴墳にもみられるが、横穴を造作するに当り羨道を掘り進める時は、相当身体の自由を拘束されるわけで、これから逃れるために、自然このようなプランを示すことになったのであろう。床面は羨門外において十㌢低くなり、塞石を安定させるために一たん平らになるが、次いで弧をなして低くなっている。これは排水をよくするためであろう。これに対応する天井は羨道に鋭角をなして十四㌢高くなり更に段をなして二十八㌢ほど高くなる。この段は塞石を定着させるためのものであろう。塞石は幅五十㌢、長さ一・一四㍍、厚さ二十八㌢ほどの板状の自然石で、羨道に倒れ落ちていた。羨門外は幅一・八八㍍、高さ一・四六㍍、奥行一・三㍍の比較的広い前室をなしている。傾斜の急な地形のため前庭部は狭い。

玄室右壁下から鉄鏃が出土した外、前壁と左壁のなす隅及び奥壁と左壁のなす隅の床面より一・五㍍の高さに鉄釘が打込まれ、その下から鉄に金張りの雲珠一箇が発見された。以前の調査の際も杏葉と共に数個発見されたよしである。鉄釘は後世に打ち込んだものではなさそうである。使途については下の雲珠との関係から、馬具（雲珠等）を釘に吊るしたのであろうという臆測もなりたつ。疑問が存するが問題として提示したい。

また前室左壁の前端部高さ一㍍の場所に径二十六㌢の小さな副室があり、須恵器の提瓶二箇（写真第九図①⑤）が副葬されてあったという。

**〔十二号墳〕** 玄室は正方形に近い隅丸で、八号と反対に右壁よりも左壁が長い。天井は平面的なドーム状をなし、幅の広いノミを用いてあらく仕上げている。棺台の構造はなく、奥壁・右壁の下を一本に連なる排水溝が走り、更に中央を奥壁から羨門に至る排水溝が走って、これに直交する。羨門はアーチ型をなし、幅六十六㌢、高さ九十二㌢、羨道の長さは七十八㌢で、やはり玄室に向って開くが極端ではない。玄室より羨道にかけてほぼ水平をなしていた床面は羨門外で十四㌢低くなり、傾斜をなして前方に開く。天井は羨門外において二十四㌢ほど高くなり、その先は直線状で床面と平行に延び、奥行・高さともに一・二㌢の前室をつくっている。

また八号墳と同様に前室左壁一・五㍍の高さに副室がある。幅五十㌢、高さ三十㌢、奥行五十七㌢で八号墳より大きい。副室の口縁部には五㌢ほど幅の塞石をはめるための凹がみられる。ただし副室の塞石も羨門の塞石もすでに失われていた。前室の床面左壁の下から、金環（半欠）一箇及び須恵片二箇が出土しており、副室から落ちたものと推定される。玄室内に盗掘の時と思われる土を寄せ集めた盛土があり、その中から瑪瑙製勾玉が一箇出土している。

〔四十六号墳〕　横穴墳とはいい難いような小穴で、極めて粗製であり、従来われわれがもっていた横穴墳の概念には全く通用しない。

羨道の構造はなく、直接玄門が開口しているが、これも玄室の一端が地上に現われたような感じである。玄室は幅一・九㍍、奥行六十二㌢の不整形な楕円形のプランで、高さはわずか五十一㌢にすぎない。もちろん側壁・天井の区別はなく単なる球状の横穴にすぎない。鉄斧が一箇発見された。

〔四十八号墳〕　四十六号墳と同じ構造をもつ小穴であるが、玄室の幅二・五㍍、奥行九四㌢、高さ六〇㌢の長楕円形プランで、四十六号墳より少し大きく、開口部は独得の構造がみられる。すなわち玄門にあたる部分の床面を十五㌢ほど高くして、敷居のような作り出しがあり、そこに幅・深さとも八㌢ほどの溝を穿っており、更にその外側には十一㌢ほどの高さに土塊が積まれていた。恐らく溝を利用して何かの蓋をし、外から粘土をもって密閉した閉鎖装置であろう。内部のやや左によって刄部を外に向けた直刀一本が斜に横たえてあった。

このような小穴は三二号、四二号、四三号、四七号もそうであり、堀越直人氏は中部支群のうちに二〜三例があったという、中から玉類を多く発見している。相馬市表西山横穴群にもあり、遺物が築外豊富であった例がある。

(2)　中層に位置するもの

〔三十六号墳〕　隅丸で方形のプランをなす。左右両壁の長さが一致しないため、形がゆがんでいる。幅一・八四㍍、奥行二・一四㍍で縦長の玄室である。殊に変っているのは天井が水平で、ほとんど床面と平行になっていることで、玄室における高さも羨道部における高さも他の横穴墳のごとき大差はない。羨門は太鼓型で側壁が弓状に凹んでいる。羨道は上層に位置するものとは反対に羨門部の方が幅が広くなっている。羨門の幅八十八㌢、長さ五四㌢、高さ一・一㍍で、羨門外には幅・深さともに十㌢の溝を穿って塞石の安定を図っている。溝の周辺には塞石の残りであろう玉石が数箇残存していた。羨門から前庭にかけての床面はゆるやかに傾斜する。しかしこれに対応する天井は、羨門においてなくなり、上層の横穴墳に多くみられた羨門外の前室は、ここでは認められない。すなわち羨門が直ちに前庭部に接するわけである。粗製の横穴墳である。

しかし出土品は豊富であった。すなわち玄室内は盗掘にあって、わずかに右壁下より鉄片一箇と東南隅に綜麻石一箇を出土しただけであるが、前庭部からは須恵坩一、平瓶一、長頸坩一が羨門付近に副葬され、その外右の壁によって琥珀玉二、切子玉一、ガラス小玉三、管玉二、鉄片が発見された。玉の出土状況からみると後世攪乱されたというよりは遺体につけたままのように右壁にかたよって一括出土している。地形上前庭部全部の調査は不可能であったから、玉類はもっと多かったのであろう。

(3)　下層に位置するもの

〔五号墳〕　玄室は巾二・四八㍍奥行二・四六㍍のほぼ正方形のプランで隅丸をなす。側壁がゆるやかに彎曲して、全般的に丸みが強い。敷石はないが、羨道の奥に、羨道の中で平行する二本の短い排水溝が作られている。この排水溝は玄室においては明瞭であるが、羨道部にくる

と徐々に巾が広がり、遂に二本共接触して羨道床面に消えている。天井は丸みの強いドーム状をなす。羨道は高さ八十二糎、長さ三十六糎で羨門はアーチ型をなし、両側壁は垂直に下向する。羨門外の床面に巾十糎、深さ二糎の浅い溝があるが、塞石を定着させるためのものであろう。

また羨門の周囲を巾二十五糎内外平滑にして、塞石を固定しやすいようにしている。羨道の巾は羨門において六十二糎、奥壁において八十六糎と、上層の例と同様にラッパ状に開くがその差は少なくなり左右両壁が対応して開くようになっている。羨門の壁面は直角で、閉鎖装置の切り込みがあり、ドーム形の重圏をなす。

天井は羨門において終り、羨門外は前庭となっている。塞石は一枚石であったらしく前庭の羨門附近に破壊されて散乱しており、その外側の左壁下から土師器（内黒）一片が出土したのみであった。

〔九号墳〕　玄室は巾二・七六㍍、奥行二・六八㍍、正方形のプランデ、四隅は鋭角をなす。天井はドームであるが、これに四隅の陵線を延長して刻み、ドームの中央で交差させて、宝形造を表わしている。家型の横穴墳であるが、ドームに刻線を入れて宝形にする点は独得の手法である。未調査、盗掘、であるが三十号墳の場合は、壁の下端から刻線を入れ、壁と屋根の区別はしていないが、九号墳の場合は壁と屋根部を明瞭に区別し、これを明らかにするために、両方の接線を食違わせて軒回りを表わしている。屋根に固い堆積岩（俗称岩玉）が出てきたため、壁面に比して屋根の部分が粗製になっている。床面は左側に棺台がある外に何の構造もなく羨道部に連なる。羨道は五号墳と同じく玄室に向ってラッパ状に開く。

羨門は巾七十四糎、高さ一・二四㍍で台形をなす。羨門の周辺を巾二十糎内外、深さ十六糎内外階段状に凹ませて平滑にし、塞石の固定を図って重圏を呈する。床面は羨門外で八糎程低くなり、そのまま開いて前庭を形成する。天井は羨門外で終り、前室は形成されない。羨門外には新生代砂岩を切り出した数個の塞石が半分程重なり残存していた。出土品はなかった。

〔十号墳〕　玄室は不整な正方形プランの家形で、巾二・五六㍍、奥行二・五四㍍の寄棟造をあらわしている。壁面はすべて直線的に表現され、陵線は鋭角をなす。玄室のほぼ中央に棟が七十糎の長さで表わされ、平入りになっている。屋根裏には平行線で垂木と軒回りを表わす朱描があり、家構を有するものとして特筆すべきである。屋根と壁との接線を食い違わせて軒回りを表わすのは、九号墳と同じである。左側の床面に巾十四糎、高さ五糎内外の敷居状の棺台が設けられている。床面はなだらかに傾斜しながら前庭に連なり、一般的にみられるような閉鎖装置の塞石を固定するための切り込みの構造はみられない。ただ羨道部に於いて床面は急傾斜で八糎程低くなるのみで、これも羨道内であるから塞石のための構造とは思われない。羨道の長さ七十糎、羨門に於いて巾八十糎、奥端に於いて一・〇四㍍と玄室に向って開くことは他の例と同様であるが、直線的であるため漏斗状を呈する。羨門は高さ一・〇八米の台形をなす。天井は羨門で終り前庭は広く、長さ三㍍以上前端に於いて巾二・四八㍍である。

出土品は盗掘のため玄室にはなく、前庭の左側前端に近い場所から須

恵平瓶（口頸を欠く）土師片鉄片が出土した。塞石は細破されている。

**〔二十三号墳〕** 玄室巾三㍍、奥行二・九㍍の家形でほぼ正方形をなし、隅丸の寄棟造である。左壁が直線的であるのに対して、右壁と奥壁が丸みをもって、形がゆがんでいる。十号墳よりも粗製の感が強い。棟は長さ九十八㌢の陵線で表わされ、中央よりやや、前寄りに位置して、平入りになっている。奥壁に不整形の棚状の突起があるが、これは九号墳の場合と同じく工事中岩玉に当ったためである。床面に特別の構造はない。羨門はアーチ型で巾約八十㌢と思われるが、側壁が崩れて広くなっている。羨道の長さ四十㌢奥端の巾九十二㌢で、十号墳と同じく漏斗状である。

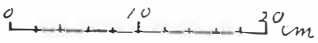
羨門外で床面は段状に八㌢低くなり、塞石を安定させるのに役立っている。塞石は新生代砂岩の切石を積んだもので、基部だけが残存している。天井は羨門外で終るため前室はなく、前庭はその前端において巾二・三四㍍、長さ二㍍以上である。羨道部から前方は直線的な構造であるのに対して、玄室は曲線的であるが、岩玉に当ったため粗製になった結果ではなかろうか。これは九号墳の屋根裏部と壁面の場合にも共通することである。

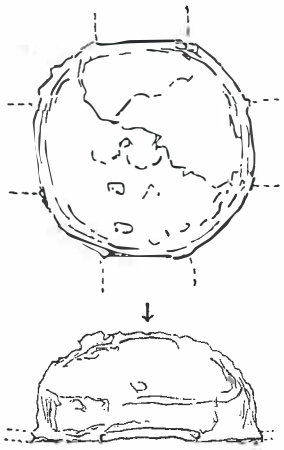
出土品は羨門附近の前庭から、鉄片（刀子片及び直刀）が出土し一部は塞石の下になっていた。同じ場所の左壁下より須恵の提瓶一面、その下から風化した大形の須恵片が出土した。附近の前庭壁面に、焚火の跡らしきものがあったが確認できなかった。玄室内には多くの鉄製品が副葬されたらしいが、盗掘時の攪拌のため細片化しており、平根形の鉄鏃、鹿角製刀子片、直刀片二振分金銅片を確認したに止まった。

図版第2図

大窪横穴古墳出土品

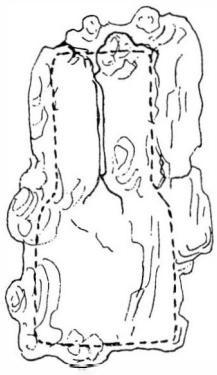
直刀　48号墳



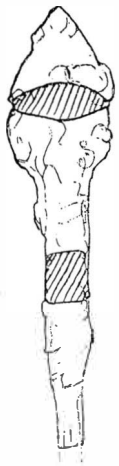



雲珠（一部欠失）

鉄斧　46号





# 大窪横穴古墳群調査一覧

〔今回発掘調査を行なったもの〕　　<備考>出土品欄の（　）内は旧出土品

| 番号 | 墳形 玄室 | 墳形 その他 | 出土品 玄室 | 出土品 羨道 | 出土品 前室 | 出土品 前庭 | 出土品 前調査 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) 上層に位置するもの | | | | | | | |
| 7号 | 方形　隅丸<br>ドーム<br>敷石あり | 前室あり<br>羨門アーチ型<br>塞石花崗岩一枚石 | （勾玉約10） | （平瓶） | | | 盗　掘 |
| 8号 | 方形隅丸ドーム<br>敷石あり | 前室あり<br>前室左壁に副室<br>羨門台形<br>塞板状自然石 | 右壁下より鉄鏃左壁に鉄釘あり<br>下より雲珠（雲珠数ケ） | | 副室より須恵器提瓶2 | | 〃 |
| 12号 | 方形隅丸ドーム<br>三周及び中央に排水溝 | 前室あり<br>前室左壁に副室<br>羨門アーチ型 | 瑪瑙製勾玉1 | | 副室下より金環1<br>須恵片 | | 〃 |
| 46号 | 小穴<br>横長の楕円形 | 特別な構造なし | | | | 鉄斧1 | 新規調査 |
| 48号 | 小穴<br>横長の楕円形 | 敷居型の閉鎖装置あり<br>外側を粘土で包む | 直刀1 | | | | 〃 |
| (2) 中層に位置するもの | | | | | | | |
| 36号 | 方形隅丸<br>平天井 | 羨門太鼓型<br>前室なし | 左壁下より鉄片1 | | | 須恵器坩1<br>平瓶　1<br>長頸坩　1<br>コハク玉2<br>切子玉　1<br>小玉　3<br>管玉　2<br>綜麻石 | 盗　掘 |
| (3) 下層に位置するもの | | | | | | | |
| 5号 | 方形隅丸ドーム<br>平行線状に排水溝 | 前室なし<br>羨門アーチ型 | | | | 土師器片1 | 盗　掘 |
| 9号 | 家形　宝形造<br>軒回りを表わすための刻線あり<br>左側に棺台 | 前室なし<br>羨門台形<br>塞石砂質岩 | | | | | 〃 |
| 10号 | 家形　寄棟造平入り<br>屋根に朱描線あり<br>左側に敷石状の棺台 | 前室なし<br>羨門台形 | | | | 平瓶　1 | 〃 |
| 23号 | 家形　寄棟造平入り | 前室なし<br>塞石砂岩<br>羨門アーチ型 | 鹿角刀子片<br>直刀片　2<br>{綜麻石<br>勾玉　小<br>玉　管　玉} | | | 直刀片<br>刀子片<br>提瓶　1 | 〃 |

# 大窪横穴古墳一覧

今回発掘調査を行うことができなかたっが、残り38基については、梅宮、堀込の両名が、盗掘により開口している、玄室内に入って踏査を試みた。その記録は下記のとおりである。本表と、20ページの調査一覧表の10基、計48基が大窪横穴古墳群である。

【・】は不明箇所

| 番号 | 玄室<br>巾×奥行×高さ | 玄室の状況 | 羨道部<br>羨門巾・羨道奥端<br>巾・長さ・高さ | 摘要<br>（単位cm） |
|---|---|---|---|---|
| (1) 上層に位置するもの | | | | |
| 1号 | 消滅 | | | |
| 6号 | 280×192×34 | 横長の方形隅丸ドーム<br>朱塗りあり<br>四周に排水溝あり | 120×・×30×34 | 前室崩壊 |
| 47号 | 小穴 | | | |
| 11号 | 295×335×153 | 縦長の方形隅丸ドーム<br>コハク玉及び人骨散乱<br>T字形に排水溝 | 90×・×60×75 | 前室あり |
| 13号 | 205×270×160 | 隅丸ドーム<br>側壁から奥壁にかけて弦をなし、半円形 | 75×130×54×・ | 前室なし |
| 18号 | 287×269×70 | 方形ドーム、四隅の陵線の床面66糎から彎曲してドームになる | 75×・×55×70 | 前室あり、この天井もドーム状をなす<br>羨門アーチ型 |
| 19号 | 268×249×180 | 方形隅丸ドーム　全面に朱塗り。内面精製、砂敷 | 79×103×89×110 | 前室あり　長い |
| 20号 | 344×340×180 | 方形隅丸ドーム　朱塗り<br>形状19号墳に似る　21号と玄室つらなる　玄室のノミ刃巾5糎 | 75×92×62×・ | 前室あり　構造良 |
| 24号 | 270×270×177 | 方形隅丸ドーム　朱塗り<br>広く精製されている | 60×75×50×85 | 前室あり　長く広い<br>羨門　重圏馬蹄形 |
| 21号 | 217×235×125 | 方形隅丸ドーム<br>壁面、天井面共に羨造よりラッパ状に玄室中央に向って広がり区別なし | 108×82×60 | 前室あり短い<br>羨門下部広い<br>20号と玄室つらなる |
| 22号 | 175×150×75 | ドーム方形<br>床面から直接天井になる<br>一見岩穴　のような感じ | ・×・×・×・ | 前室なし |
| 37号 | 不明（乞食住む） | | | 前室長く広い |
| 38号 | 286×267×127 | 方形隅丸ドーム<br>粗製 | 65×90×・×55 | 前室あり羨門アーチ型<br>羨門の周辺を台形にととのえる（重圏） |
| 42号 | 小穴 | | | |
| 43号 | 小穴 | | | |
| 44号 | 290×250×150 | 方形隅丸ドーム<br>精製 | 105×120×50×130 | 前室あり長い　精製<br>羨門大きく側壁が垂直に下向する |
| 45号 | 340×325×185 | 方形隅丸ドーム、大形排水溝T字型 | 65×75×55×90 | 前室あり　長い製精　左前室壁110糎の高さに副室あり |

(2) 中層に位置するもの

| 番号 | 玄室<br>巾×奥行×高さ | 玄室の状況 | 羨道部<br>羨門巾・羨道奥端巾・長さ・高さ(cm) | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 26号 | 380×343×210 | 方形隅丸ドーム<br>19号、20号と似る<br>27号とつらなる | 80×90×50×・ | 前室あり　狭い　羨門<br>アーチ型羨道長い感じ |
| 27号 | 267×290×150 | 方形隅丸ドーム<br>26号とつらなる | 65×85×60×・ | 前室あり　広大<br>アーチ形羨道長い |
| 28号 | 320×320×190 | 方形隅丸ドーム朱塗りあり<br>塞石内部に落ちこむ | 45×70×78×・ | 前室あり長い<br>羨門アーチ型　重圏 |
| 29号 | 274×250×160 | 方形隅丸ドーム<br>刀巾7㌢のノミ使用 | 61×78×42×70 | 前室破壊<br>羨門台形 |
| 39号 | 236×180×130 | 隅あり奥壁丸みをもち<br>半円形のプラン　粗 | 106×125×120×・ | 前室あり。<br>羨道広大 |
| 40号 | 333×290×155 | 方形隅丸ドーム　三周に排水溝あり　やや粗製 | 78×80×54×90 | 前室あり広い<br>羨門台形 |
| 41号 | 235×245×120 | 方形隅丸ドーム広く精製<br>朱塗り<br>中央に排水溝防空壕に使用 | 65×70×55×80 | 前室なし（破壊） |

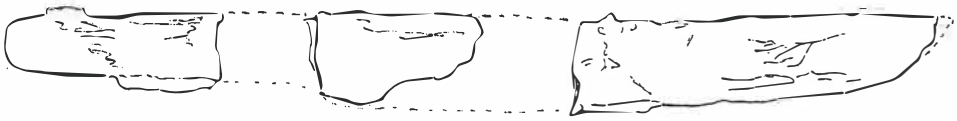
(3) 下層に位置するもの

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 2号 | 297×266×140 | 方形隅丸ドーム<br>平面的なドーム | 70×・×・×・ | 前室なし |
| 3号 | 283×264×214 | 方形隅丸ドーム<br>敷石あり　人骨あり<br>左側に棺台奥壁に朱描壁画があったとのこと | 60×110×60×115 | 前室なし |
| 4号 | 240×260×175 | 方形隅丸ドーム<br>奥壁丸みをもつ　精製 | 58×70×45×105 | 前室あり　短い<br>羨門ドーム形塞石の切り込み凹部大きい（重圏） |
| 14号 | 不　明 | 家形　寄棟造　平入<br>方形　　朱塗りあり | | 前室なし |
| 15号 | 325×295×240 | 家形　寄棟造　平入<br>方形　隅丸　朱彩精製 | 70×75×60×100 | 前室あり保存良好　塞石の切り込みあり<br>羨門ドーム形（重圏） |
| 16号 | 220×235×170 | 方形　隅丸ドーム<br>やや　粗製 | 90×・×・×130 | 前室なし（破壊） |
| 17号 | 280×205×200 | 家形　寄棟造平入屋根部精製棟は巾15㌢深さ2㌢長さ108㌢の溝状に表わす　降り棟120㌢方形　壁面直線　軒の切り込みあり | 70×92×45×67 | 前室簡略 |
| 25号 | 300×315×190 | 方形隅丸ドーム（円形に近い） | 95×115×40×150 | 奥前室なし<br>羨門大きい台形 |
| 30号 | 325×300×198 | 家形　宝形造　床面の隅よりドーム中央に向って刻線を入れて宝形とする<br>刻線は巾6㌢深さ5㌢の溝状鈴釧金環玉類出土とのこと　朱塗　精製 | 80×95×35×130 | 前室破壊 |

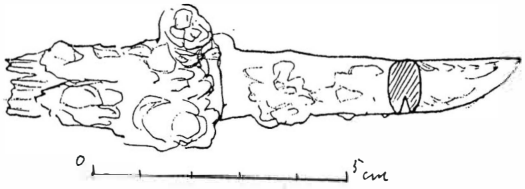
| 番号 | 玄室<br>巾×奥行×高さ | 玄室の状況 | 羨道部<br>羨門巾・羨道奥端巾・長さ・高さ(cm) | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 31号 | 280×275×235 | 家形　寄棟造　平入　朱塗りあり　精製<br>壁の高さ15㌢棟の長さ120㌢凹む　降棟170㌢ | 140×・×・×・ | 羨門大きく<br>側壁は垂直に下向し前室は直線状に開く |
| 32号 | 小　穴 | | | |
| 33号 | 195×180×・ | 楕円に近い方形　横巾90奥行40　高さ30隅丸ドーム天井は羨道よりて直線状で玄室中央にのびる　粗 | 90×・×・×・ | 前室なし |
| 34号 | 220×180×120 | 方形隅丸ドーム<br>天井33号と　同　低い | 75×75×40×80 | 前室あり短い |
| 35号 | 280×260×215 | 家形　寄棟造　平入　軒回りのつくり出しなし<br>中央に排水溝<br>精　製 | 65×90×50×105 | 前室あり、短いが横に広い<br>塞石切り込み大きい(重圏) |

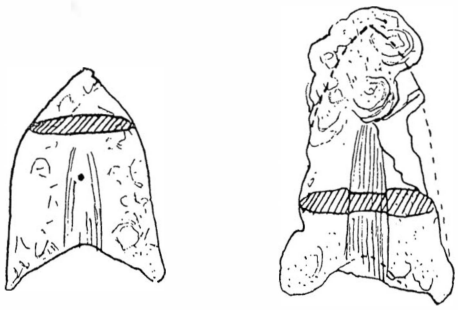
図版第3図

刀子



23号墳出土



鉄鏃




二六号墳出土

# 第四節　遺物

大窪横穴穴古墳群から出土した遺物は次のとおりである。このうち事前に発見された出土品を保管していた堀越直人氏から提供を受けたので出土状況を聴取の上今次の報告に加えることとした。ここに堀越氏の好意を感謝しておく。

一、土　　器

須恵器

把手付平瓶　一

平　瓶　二　うち一箇口頸をかく

提　瓶　三

長頸坩　一

坩　一

土師器（破片）

二、装身具

玉　類

勾　玉　一

管　玉　二

丸　玉　三　他に破片

棗　玉　（破片）

切子玉　一

金　環　（断片）

三、鉄製品

直　刀　一　他に破片

刀　子　二　他に破片

鉄　鏃　二　他に破片

鉄　斧　一

不明鉄製品　若干

四、馬具その他

鉄地金銅張雲珠　一

その他鉄製品

五、綜麻石　二

## 1、須恵器

把手付平瓶

胴は、その名の如く上部が平らで、底部に丸味をもち、口縁部に近い中央に、ひも状に粘土をひねった小さな把手がある。把手は離脱して発見されたが、申しわけ的につくられたように小さい。底部がかけている。

三六号墳の羨門外に、坩、長頸坩、玉類と共に発見された。

平　瓶（写真第九図②④）

④図は七号墳の羨門から出土したもので、小型の通例形である。胴の径一二・七㌢、口縁部をふくめた高さ一一・八㌢同心円のろくろ目を残す。

②図は十号墳の前庭部から、土師器破片と共に出土した。口縁部をかくか、④よりやや大き目のもので、胴部の一六・二㌢高さ約九㌢。上部が円形にかけているのは製作過程におけるろくろの継目である。

提　　瓶（写真第九図①⑤⑥）

提瓶は三箇出土している。⑥は二三号墳の羨門前、閉鎖施設の切石の左端から出土したもので、青黒い色を呈する。口縁を羨門にむけて横だおしになっていたので、下の部は肌が荒れている。提瓶としては大きい方で、高さ約三四㌢、偏平をなす胴部は径二九・二㌢の円形で、両面に同心円のろくろ目がある。口径は短く、外反し、数条の波状文がある。把手は一方がとれているが、環状に粘土の帯をつけている。

①⑤は八号墳の羨門前で前室の左側につくられた副室から、転落した状態に出土したものという。

①は高さ二五・四㌢、胴部は偏平で径二〇・八㌢、短い口頸の上端がくずれている。かぎ状の把手は一方が失なわれている。青灰色。

⑤は赤褐色で焼成は比較的よいが、口縁部の上端がくづれている。残存部の高さ約二〇㌢。胴部の径一五・八㌢、一方が偏平で、片側は球状を呈する。口頸部に数条の波状文があり、胴部に、荒い同心円の整形文があり、そのうちに数条の波状文がある。肩部に一対の把手の痕がある。赤色の提瓶は本遺跡としては唯一の例である。

坩　　（写真第八図①②）

共に三六号墳の羨門外から、把手付平瓶と共に出土したもので、三者が閉鎖施設である丸石群の前方に三箇鼎状にあり、近くに玉類があった。

①は大形の壺でやや底がとがった球状で、総高三九・八㌢、胴部の径三八㌢。口径は二五・六㌢で頸部は短い。青黒色の堅い焼成で、整形の叩き文がある。完形品

②の長頸坩は高さ二六㌢、球状の胴部は径一七㌢。同心円のろくろ目があり、頸部は約九㌢、普通に見る長頸坩で、淡青黄色を呈し、頸部から胴にかけて自然釉が美しくにじみ出ている。　完形品。

この古墳群には、いたる所に須恵器の破片が散布し、青海波文の叩き目を有する大形のものもある。盗掘の際、相当量の須恵器が破壊されたのであろう。

土　師　器

完形品はない。十号墳と五号墳から破片が出土している。いづれも内黒で、器形は明らかでない。杯と思われる。

## 2、玉　　類

当地方の古墳盗掘は、勾玉を目的として行なわれたので、多数発見されているが、現在所持しているものは案外少い。

勾　　玉（写真第一一図①）

一二号墳の玄室内清掃中一箇出土した。盗掘の際見逃したものである。瑪瑙製の粗悪なコの字形である。

管玉・切子玉・丸玉・璞玉（図版第五図）

三六号墳の須恵器三箇と共に羨門外から出土した。管玉は碧玉岩製で通有の例のように濃緑色を呈しているが、著しい滑沢はない。大きいものは長さ三・五㌢径一・二㌢、小さいものは長さ三㌢、径〇、九㌢穿孔は大は両方より、小は一方からである。二箇のみの発見であるが、二つとも色も大さも穿孔法も異っている。

切子玉は水晶製で二、二㌢通有形、ガラス製の小玉は、濃青色で径八～五㌢丸玉というよるは、小玉の部類に入れてよかろう。他に破片二～三箇分がある。琥珀製の棗玉は、細砕しているので箇数は不明、棗玉は十三号の玄室内にも細砕して遺存している。

三六号墳は前庭部が急傾斜で、余地が少くしかも地主の要望により土砂の流出を極力さける調査であったから、玉類出土附近の精査ができなかったので、玉類の発見が少なかった。玉類は右側の前庭部壁面に偏よってあり、羨門の鎖閉装置や須恵器の出土状況から見ると、盗掘の際門外に出たものとは思われない。前庭部にも埋葬したのではなかろうか。

金環断片（同）

十二号墳の玄室清掃中に勾玉と共に発見したが、径二㌢ほどの粗悪な銅に金張りとした金銅製の耳飾である。

### 3、鉄製品（写真第一〇図）

直刀

通例の如く直刀の出土が多いが盗掘のため断片となっている。四八号墳の小穴から、ほぼ完形の直刀が一口発見した。長さ約八〇㌢。他にもう一口の断片がある。茎の部や鞘に木質部が僅かにのこる。〔写真（右）〕

二三号墳の羨門前蓋石の間に直刀破片が出土しているが、副葬か盗掘の際のものか不明である。

刀子（図版第三図）

二三号墳の玄室内から鹿角装の刀子断片が出土している。もう一つ木質部が残っているが、わずか六㌢ほどのものが出土している。刃の部が割れて口を開いているので刀子と見てよいか疑問である。

鉄鏃（図版第三図）

これも二三号墳で発見された。二つは無茎の平根式で逆刺がある。一つは長さ約四㌢、最大幅三㌢、厚さ約二～三㌢で、極めて薄い。中央に穴が一つあり両面から身をはさんだ竹製の箆代のあとがある。もう一つは更に大きく、錆がついているが、長さ約五・五㌢。幅約三㌢箆代が前者よりも明瞭にのこされている。他に断面角形の茎が出土しているので有茎の鉄鏃があったことがわかる。

鉄斧（図版第二図）

四六号の小穴外から出土した鉄塊は長さ一三・五㌢ほどで錆付が甚だしいが、袋部の合わせ目があり、鉄製の手斧と考えられる。

鉄地金銅張雲珠その他〔写真第一一図③〕

八号墳から雲珠が一箇出土した。さきに慶応大学の清水氏がこの横穴を試掘しているが、その節数箇の雲珠が出土しているので、これと一括のものであろう。玄室内の左壁面によって発見されたというが、その上方の壁に鉄釘が二箇所にさされており、鉄釘に馬具がかけてあったのだろうと、発見者の説明である。他に鉄製品若干があるが、いづれも馬具の断片と思われる。

今回発見の雲珠は、革帯をとめる四つの脚が失なわれて、中心部の半球状のみで、四脚の辻金具である。径四㌢ほど、鉄地に金銅を張ったもので、他に金銅張りの断片が一片ある。他に杏葉もあったという金銅の薄い断片は二三号墳から出土しているので（写真一一①）、本横穴墳に

金銅製のものが副葬されていたことがわかる。

4、**綜　麻　石**（図版第四図）

円錐の頭部を切断した通有の形で、滑石製。機織具の巻子（へそ）で、径約四・五糎三六〇号墳の右前方隅より出土した。一箇は二三号墳から勾玉小玉管玉等とともに出土している。

（附）　**従前の出土品**

当地地主の大窪氏、堀越氏らの談によると本横穴古墳群からは次の出土品があったという。（前記のものは省く）三〇号墳からは、鈴釧、金環、碧玉製管玉一一個、切子玉一一が出土。（図版第五図下）本調査区域の西方の小穴から瑪瑙勾玉六土製臼玉四、ガラス小玉多数が出土している。この小玉は濃青色の外に、淡青色、緑色、黄色を呈するものがある。（堀越直人氏旧蔵、相馬高等学校保管）

## 第五節　結　び

今回の調査による収穫は、次の三つの問題が提起されたことであろう。

### (1)　部分名称と構造についての問題

横穴墳が高塚古墳の横穴式石室から発展してきたものであるなら、基本的に羨道と玄室から成立つものである。しかし横穴墳は更に形態的な発達をとげあるいは退化して、羨道部は短かくなり、単に塞石をするための施設となって、本来の玄室に通ずる道としての意義を失なったようである。殊に羨門の外の部分にいろいろの構造をもつようになり、各地において地域的特性をもつようになった。すなわち大窪横穴墳の場合は、羨門外の構造は天井を有する部分と、天井を失ない単なる空間をあらわしている部分の二つの例がある。われわれはとりあえず前者を前室と呼び後者を前庭と呼ぶことにした。したがって今回調査された横穴墳の中で各部の施設すなわち、玄室・羨道・羨門・前室・前庭の五つの部分から成り立つことになり、この基本的な構造をもつものは七号・八号・十二号がこれに該当する。

しかしここでいう前室と前庭との相異は単に天井の有無によって判別するもので、葬制の上でどのような意義を持つかは別に論ずることとし、後述のごとく、形態的な変遷過程を知る上で重要な手がかりになることを特に指摘したい。更には他の地域との発展的な相互関係を知る上で一つの手がかりになるのではないかという考えをもって、これを区別して取扱うことにした。

なおこのことについては日本大学考古学会（平沢一久氏）においては一括して前庭と呼び（註六）、氏家和典氏等は前室にあたる部分を羨道外室と称している。（註七）

### (2)　形態と分布との関係

前述のごとく、本横穴墳は玄室・羨道・羨門・前室・前庭の五部分から成立つのであるが、前室を具備するものと欠くものに明らかに分布的な特徴がある。すなわち上層に位置する横穴墳二十二基のうち、十三基は明らかに前室を有しており、他の九基のうち一基は消滅しており五基は小穴であって一般の横穴墳とは異なったものであるから、明らかに前

室を構成しなかったものは三基にすぎない。これに対して中層八基のうち六基が前室を有し、二基が有しない。つまり前室を有しないものの割合が多くなっているように思われる。更に下層になると、十八基のうち前室をもっものが四基のみで、内二基の前室奥行は極めて短かく、他の十四基は全く前室をもたない。

これは本地形が下層ほど傾斜が少く、前室を構成し得ない地形上の理由があったとしても、また破壊されたとしても前室をもつ構造が時期的に異なることを示すものとして編年上重要なポイントになるのではあるまいか。

また、家形横穴墳は合計九基みられた（内三基を調査）が、これが全部下層に位置していることと、そのうち七基が前室を欠いていることは注意を要する。しかも下層のものは大型で、精製されたものが多く、前室を欠き家形を含むのに対して、上層のものは小型で前室をもち型態的に五つの部分の完備したものが多いようである。

上層と下層とは、編年的にいかなる関係にあるかは盗掘にあったものの再調査で出土品も不足しているので、結論をいそぐ段階ではないが、型態的に編年する場合、この前室の存在が重要な手がかりになるであろうことを指摘しておきたい。

なおこの点に関連してもう一つ注意すべきことは、羨道が玄室に対して広がっていることである。すなわち上層においては曲線的なラッパ状に開くが、下層においては直線的な漏斗状に開くものが出て来ることである。しかも上層においては一方の壁面だけが開き、下層においては両壁が平均に対応して開く例があり、上層が自然発生的であり、下層においてこれが様式化したごとき印象をうけることを附記しておく。

### (3) 小型横穴（小穴）の問題

今回の調査でもっとも注意されるものの一つに小穴の問題がある。前記平沢一久氏の調査になる相馬市表西山の横穴墳の小形横穴から多くの副葬品が出ている。今回の調査においては六例があった。ここの横穴群は大てい盗掘によって開口しているので未開口の新しい横穴をさがすため、ボーリングによって発見しそのうち二基を調査した。したがって四十七号、四十二号、四十三号、三十二号等未調査のものはボーリングと表面観察によって、小穴ではないかと推定されたもので発掘を経ずには正確を期し難い。

いかなる目的で小穴を作ったかについては、二つの想定が成り立つ。第一は他と同じく一種の横穴墳で、もちろん遺体を埋葬するために作られたものとする考えである。これは自然な考え方であるが、玄室の広さから考えて、遺体を納めたらほとんど一杯になる容積であるから、極端な退化様式ということになる。

四十六号、四十八号からは人骨の出土をみることはできなかった。第二は他の横穴墳に従属する横穴であろうとする考え方で、副葬品を格納するためのものではないかという考えである。

事実副葬品の出土はあるが、それにしては出土量が少ないように思われる。殊に四十六号墳は玄室よりはずれた前部から鉄斧が出土している点からいって疑問が残る。六基の小穴のうち下層に分布するものは一基だけで、ほんど全部が上層に位置していることは注目すべきものである。

（註）

一、小此木忠七郎「昨年発見されたる福島県の古墳」人類学雑誌三九ノ三号

二、福島県立相馬高等学校「上真野村古墳発掘に関する一般記録」

三、慶応義塾大学藤田亮策「真野古墳群調査概報」三田史学会編輯〃史学〃二三ノ三

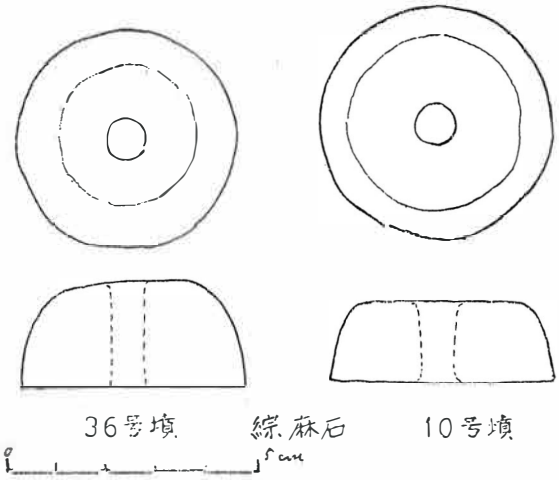
四、福島県相馬郡鹿島町教育委員会「横手古墳群第一号墳調査報告書」昭和三五・八

五、福島県立相馬高等学校「相馬地方横穴壁画調査報告書」

六、日本大学考古学会「埋蔵文化財発掘報告書」（福島県相馬市西山横穴墳群）昭和三四・一〇・六

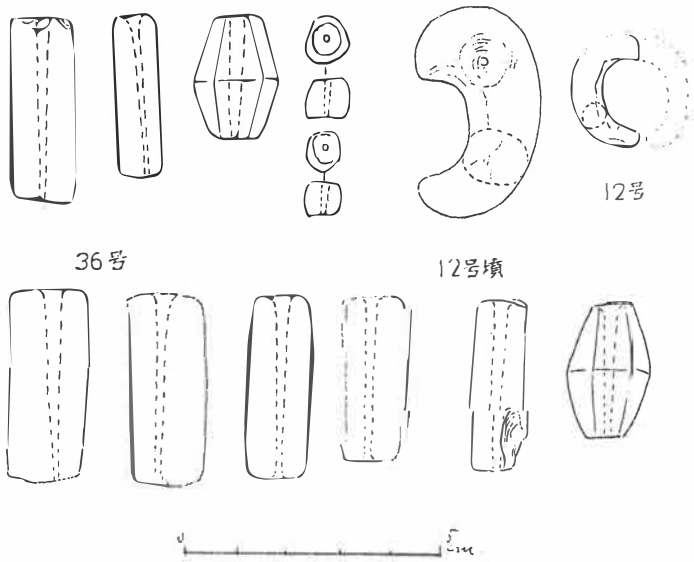
七、鍛冶一郎・氏家和典・佐藤宏一「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」東北考古第三輯

図版第4図




図版第五図

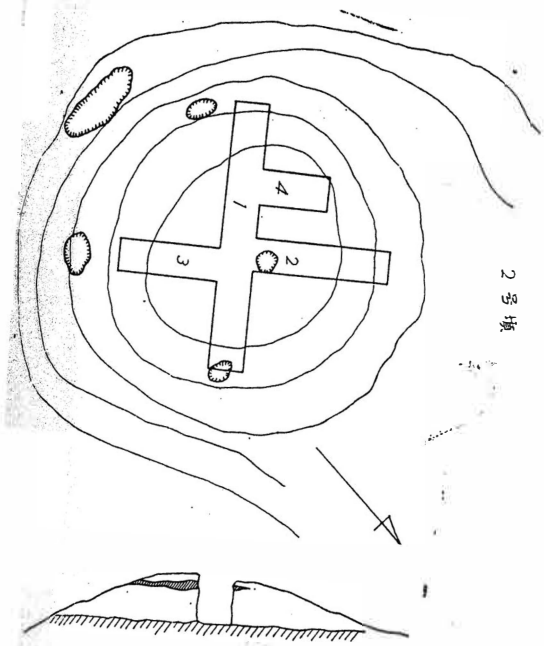
大窪横穴出土玉類



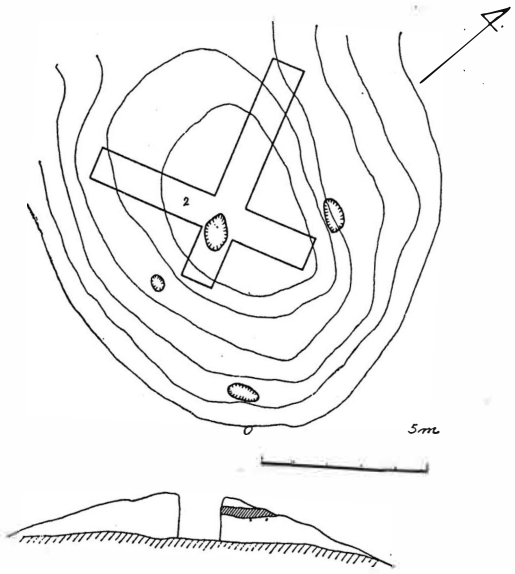

上段左玉類三六号墳、下段玉類及び上段勾玉、金環一二号墳出土

図版第6図

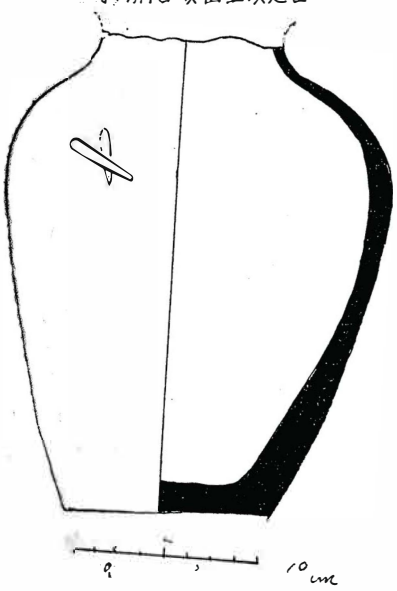
寺内前古墳（山上墳）



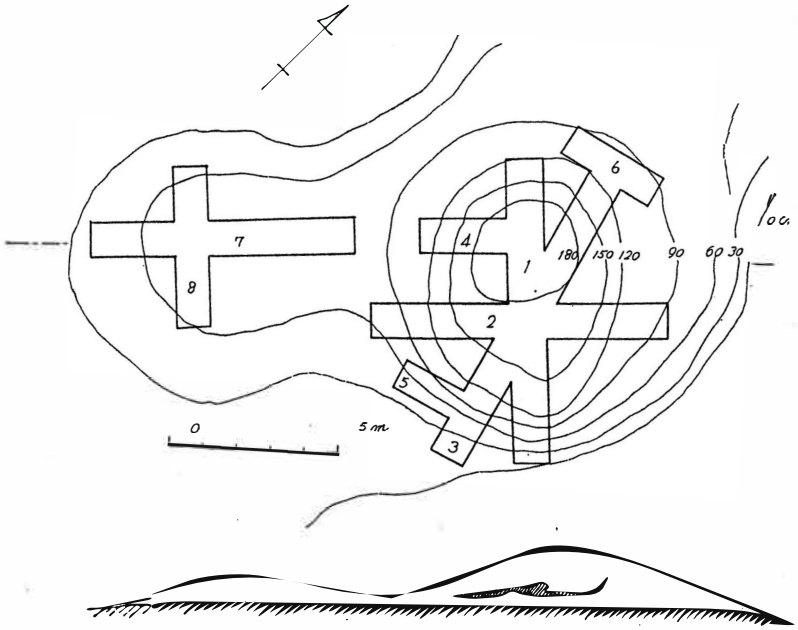

第3号墳




寺内前古墳出土須恵器




寺内前山上古墳第1号墳



# 第三章　寺内前古墳群

双葉郡双葉町

## 第一節　古墳の位置と現況

### 一、位置と周辺の遺跡

寺内前古墳群（山上古墳群と横穴古墳群とを含める。）は、常磐線双葉駅の北方約一・五キロ、国道六号線と常磐線との交叉点踏切の東方に連らなる丘陵の東南側面に点在している。この丘陵は、前田川をはさんでいるが双葉町のほぼ中央に位置し、東西に約一キロ伸びており、双葉町の沖積平野を見おろすことができる。この丘陵と前田川をはさんで対立する南方の台地には通称「七曜塚」と称する塚の腰古墳群、さらにこの台地の東端、郡山海岸の絶壁上には「郡山沼の沢古墳群」などがあり、いずれも七～一〇基程の小円墳群で、沼の沢古墳群には前方後円墳が一基存在するが海岸の絶壁上のために、すでに崩壊し去った。沼の沢古墳群の一部に、昭和二十六年に発掘調査されて横穴式石室をあらわしている。

さて、双葉町の古代遺跡の特色は（これは双葉、相馬の両郡に共通する現象であるが）古墳時代の後期に属すると考えられる横穴古墳群の多いことであろう。前田川をはさむ両岸の丘陵の南側面、あるいは東側面には「清戸迫横穴古墳」（直刀一振、刀片多数、桂甲片を出土した。）「北沖横穴古墳群」「稲荷迫横穴古墳群」（その中の一基玄室奥壁正面に南無阿弥陀仏の刻文がある。）「狸穴横穴古墳群」「寺内前横穴群」など大小約一〇〇基程を数え得る。それらの多くには前室（羨道外室）羨道、玄門、玄室を整然と備えたものがある。また、この地方の通例で、横穴古墳群の存在する丘陵の陵線上には山上墳（主として円墳）の存在する場合が多く、しかもそれらの山上墳を発掘調査した二、三の例からすれば、何らの地下遺構も出土品もないものが多い。土師器、須恵器を出土する遺跡は「郡山塚の腰古墳」の周辺の外に「石熊遺跡」もこれに属する。塚の腰周辺の遺跡には布目瓦を出土する「郡山五番廃寺跡」があり、平安初期のものと思われる。郡山遺跡周辺の台地は縄文、弥生、古墳、土師と幾時代にもわたる遺跡であり、古代の生活地として最適の地であったろう。

次に双葉町内の縄文遺跡には、前田川上流に土師と複合遺跡の石熊遺跡があり、「寺沢遺跡」からは中期以降の土器片、郡山遺跡からは後期の土器片を出土している「深谷遺跡」は双葉駅の西方にあたり、寺内前古墳群には最も近い距離にあり、寺内前古墳の封土中より採集される縄文土器片は、この遺跡のものと思われるので、この地から封土を運搬したものであろう。弥生の遺跡は郡山塚の腰古墳群の周辺に発見される。

### 二、遺跡の現況

寺内前山上古墳群は現在判明しているもの七基ありその中一基は今回の発掘調査により前方後円墳と判明、他は小円墳である、六号墳と七号墳の二基は、昭和三四年八月、慶応大学の清水潤三教授の指導で、相馬高校郷土クラブが中心となり発掘調査され六号墳石郭の内部から須恵の坩が発見された。（図版第六図）

この坩はすでに押しつぶされていたが、周囲と底を径一〇糎前後の

ヨ石で囲み上を平石でおおってあり内蔵物は発見されなかった。（註一）

これらの山上墳はいずれも盗掘の跡が残っており、一号墳はかなり古く、二号墳は墳丘の南側面に三ヵ所、中央部と東側面にそれぞれ一ヵ所の盗掘跡がみとめられた。さらに三号墳は墳丘の中央部に深さ一㍍、東西径二㍍程の盗掘跡（つい最近のものと思われる）があり、墳丘側面に石槨を構成していたと思われる玉石一五〇個程が散乱していた。

この山上墳の南斜面に横穴が六基ある。一号墳は風化し半壊状態にあり、二号墳、三号墳は昭和三六年九月、渡部晴雄氏担当のもとに、双葉町教育委員会が主体となり、双葉高校史学生徒により発掘調査された。

三号墳は戦時中防空壕として使用され、羨道玄室ともに変形し、二号墳は玄室が一・五四㍍×一・二㍍の小型のもので遺物は出土しなかった。（註二）

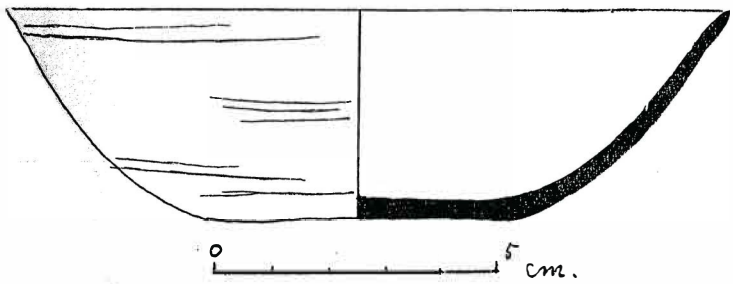
註一、昭和三四年八月　寺内前古墳発掘調査報告書
　　ブ相馬高校郷土クラ

註二、昭和三六年九月　寺内前横穴古墳発掘調査報告書
　　双葉町教育委員会

**寺内前古墳群調査一覧**

| 墳号 | 墳形 | 遺構 | 遺物 |
|---|---|---|---|
| 1号墳 | 前方後円墳<br>西南一東南　21m<br>前方部径8m　高<br>1m後円部径11m<br>高2.1m<br>松林 | 地下遺構なし<br>トレンチ7号まで | 鉄片　2<br>木炭片<br>土師片　10<br>封土中より |
| 2号墳 | 円墳<br>SN　15m<br>EW　20m<br>H　4m<br>5カ所盗掘跡<br>もみ林 | 地下遺構なし<br>トレンチ3号まで | 縄文片数点<br>土師片数点<br>封土中より |
| 3号墳 | 円墳<br>SN　13m<br>EW　12m<br>H　2.1m<br>4カ所盗掘跡<br>松林 | 地下遺構なし<br>トレンチ2号まで<br>玉石150個程墳側に散乱 | 土師片　2<br>須恵片　2<br>弥生片　2<br>封土中より<br>玉石数個 |
| 横穴墳<br>5号 | 前庭、羨道、玄室　排水溝を備う<br>ドーム型 | 玄室　奥行　2.8m<br>巾　3.2m<br>高さ　2m<br>羨道　奥行　40cm<br>巾　60cm<br>高さ　90cm<br>前庭　巾　1.7m<br>長　1.2m<br>棺床部3つ | 直刀　1<br>直刀片　4<br>（前庭部より） |
| 横穴群<br>6号 | 前庭部羨道部の天井崩壊ドーム型<br>床面周囲に溝 | 玄室　奥行　8.5m<br>巾　3m<br>高さ　1.8m<br>羨道　巾　60cm<br>高さ　1m<br>前庭　巾　1.7m<br>長さ　1m | 刀子片1<br>土師杯1<br>勾玉1<br>小玉4<br>鉄鏃2<br>金銅製釧片 |

図版第7図




土師器杯　寺内前横穴古墳（第6号出土）

## 第二節　発掘状況

八月四日　（土）

移霊祭ののち各古墳の実測を開始。実測終了の古墳よりトレンチを掘る。一号墳の第一トレンチを一㍍の深さに掘り下げる。表土層は約二〇㌢㍍でその下は粘土の層に移り、さらに約八〇㌢㍍掘り下げて粘土で構成されたと思われるものを発見、慎重に調査を行う。封土中より小鉄片と木炭片を採集した。午後別班により前方部の第八トレンチの発掘にかかる。　生徒一〇名、人夫五名　発掘に参加。

八月五日　（日）

別班は前方部第八トレンチを深める。第一トレンチを深め、粘土郭の形跡となるかを調査。さらに第二トレンチを掘り下げたがめぼしい層位の変化はなかった。別班により前方部の第八トレンチを一・一㍍掘り地山の一部まで掘り下げて、表土、粘土層（地山の層と同じ）に達した。また、第七トレンチは鞍部は表土が殆んど流れてなかった。一号墳の封土中より土師片、木炭片、鉄片二点を採集した。

午後双葉高校史学部生徒を中心に三号墳の発掘にかかる。この円墳は、封土の中心部に深さ一㍍、東西径二㍍程の盗掘跡があり、槨に使用したと思われる石一五〇個程散乱しており、東斜面にも深さ一㍍程の横穴状盗掘跡があり、北面にも径一㍍程の盗掘跡、さらに南斜面にも小規模の盗掘が認められた。また、封土の中心部には相当古い盗掘があったことは一号、二号トレンチの発掘により確認された。封土は小粒の砂礫層のため予定より進行した。　生徒一三名、人夫五名参加。

八月六日（月）

一号墳の調査を徹底させるために第四、第五のトレンチを入れたが何ら変化がない。三号墳の第一トレンチを深め、さらに第二トレンチを入れる。表土の下に腐蝕土が混り盗掘されたことが確認された。封土より玉石数十点と土師片、弥生片、須恵片を採集し、三号墳を終了。

別班は朝より二号墳の調査にかかる。この円墳にも数カ所の盗掘跡がみとめられた。第一トレンチを中心部で一・五㍍の深さに掘り下げ、ほぼ地山に達した。午後第二トレンチを掘り調査にかかる。二号墳の封土中より、縄文土器片、土師片を採集した。生徒一〇名　人夫五名参加。

八月七日（火）

一号墳の最終調査を行う。盗掘と断定。二号墳は第二トレンチを掘り深め、第三トレンチを掘る。昨日と同じに変化なく終了する。やはり盗掘と思われる。午後人夫の一部は丘陵の東斜面にある横穴古墳群のうち、五号墳の発掘にかかる。この五号横穴墳は前庭天井部の一部が崩壊したのみで原型をとどめ、この地方に見る典型的な横穴墳である。

別班は一号墳の埋返しの作業をする。

生徒　九名　人夫五名

八月九日（木）

朝より一、二、三号墳の埋返し作業を行い、さらに第五号横穴墳の発掘調査に従事、午前中に前庭部より直刀一振と直刀片を発見。

午後全員をもって五号横穴墳の発掘にあたる。一部をさいて第六号横穴墳の発掘に着手。六号墳は前庭部天井部が殆んど崩壊し去り、羨道天井部の一部を露出したのみで土に埋っていた。

八月一〇日（金）

第五号、第六号横穴墳の調査を行う。第五号墳の清掃を終える。東角の玄室壁に近く長径六〇糎程の穴があり六号墳に通じている。これは五号墳築造の時六号墳（時間的に先に造られた思われる。）の壁に突き当り偶然にできたものと思われる。別班は第六号横穴墳の発掘にあたる。後世積上げられた土を掘出し、床面を精査し、午後四時頃まで発掘清掃を完了した。

## 第三節　遺　跡

### 一、山上墳の構造

寺内前古墳群は前述の通り、前方後円墳一基を含む円墳群で、丘陵の陵線を巧みに利用し、沖積平野を見下すことのできる位置に築造された山上墳である。この地方に点在する山上墳の形式と全く共通する。

**一　号　墳**　極めて小さな前方後円墳で、鞍部は確認されない程低い。長径約二一尺、前方部の径八尺、高さ一尺、後円部一一尺、高さ二・一尺は発掘は先づ幅一尺の第一トレンチを入れ、一尺の深さの地点に粘土層を確認。三〇糎の厚さに広り、その下に中心部より南寄りに厚さ五糎程の黒土層を発見。その下は地山の層位に続く。二号トレンチは幅一・二尺、中心部に盗掘跡と断定できる層位の変化があり、第一トレンチに発見された粘土層も、地上の層に続き消えている。三号トレンチは、中心部より西南寄りに、盗掘層を深め、粘土層から地山に続く。前方部第六トレンチ幅は一・一尺、深さ一・一尺で地山に達し表土、粘土層（地山の層）に終る。第七トレンチは幅八〇糎尺、鞍部で三〇糎尺の深さに掘り、ほぼ同じ結果であった。この一号墳では第一トレンチに粘土層と黒土層が発見されたが、遺骸を葬った痕跡とは断じ難く、封土を築く際の層位と考えられる。

**二　号　墳**　南北の径一五尺　東西二〇尺、高さ四尺の小円墳、この古墳も地下遺構は発見されなかった。

第一トレンチは巾一尺に掘り進め、一・五尺の地点で地山に達した。表土の下に粘土混りの砂の層があり中心部に表土より五糎尺の深さまで盗掘跡と思われる層の変化を確認したにとどめまった。第二トレンチは約一尺程深め第一トレンチとほぼ同じ結果であった。

**三　号　墳**　南北径一三尺、東西一二尺、高さ二・一尺の円墳。附近より運んだと思われる砂礫で封土を築造しあり、発掘は容易に進んだ。

一号トレンチは巾一尺深さ八〇糎尺に掘り進め表土より三〇糎尺～七〇糎尺の間から棺に使用したと思われる玉石数点（径一〇糎尺前後のもの、海岸より運んだものと思われる。）弥生片、須恵片と土師片を採集した。二号トレンチ一号同様の巾、深さで掘り、中央部の盗掘が意外に深くまで入っていることが確認された。

**四号、五号、六号墳**　三号墳と一連の丘陵上、北東に約一五〇尺の地点に連って存在している。四号墳は径四尺、高さ六〇糎尺、五号墳は径六尺、高さは径七尺、高さ六〇糎尺といった小規模墳である。

今回の発掘は一号、二号、三号墳の調査を行ったが、一号墳、二号墳ともに地下遺構は発見されず、三号墳からは槨に使用されたと思われる玉石数点を採集したにすぎない。各古墳ともに盗掘跡が認められたがめぼしい地下遺構、遺物は発見されなかった。

## 二、横穴古墳の構造

**横穴五号墳**　本横穴はこの地方に一般的に見られる典型的様相を呈している。前庭部の端で六〇糎、羨道部入口で五〇糎の深さに、後世流入した土に埋もれ玄室奥壁で五糎の高さになっていた。玄室はドーム型を呈し、大きさは奥行二・八㍍、巾三・二㍍程度の方形で天井部は入口上部からゆるやかに曲線をえがき、奥壁に近づくに従って急曲線になっている。

棺床部は三つ設定されたものと考えられ、巾三糎、深さ二糎の程の溝によって三区分されている。床面中央部は一〇糎の段落で棺床部と区分され、一・一㍍程の巾で羨道部に向いゆるやかに傾斜し、さらにその中央部には八糎、深さ五糎の溝があり羨道部の入口にまでおよんでいる。玄室内周壁には穿鑿に使用された鑿のあとが縦に残りその巾は四糎程度である。

さらにこの棺床部には径一〇～一五糎程度の玉石を敷きつめそれらの一部は攪乱された形跡があり、また床面中央部に一〇数個散乱していたところから盗掘と推定された。羨道部は奥行四〇糎、巾六〇糎高さ九〇糎程で、天井部は玄室入口に向い高さを増している。入口には羨道部を塞いだと思われる水成岩の一部が認められた。前庭部床面は、羨道床面と一〇糎程の段落が見られ、巾一・七㍍、先端までの長さに一・二㍍程である。出土遺物は、玄室内よりは全く発見されなかったが、前庭部では床面上より直刀片と直刀一振が発見され、直刀は羨門に対し、柄部を右斜下に向けて発見された。

**横穴六号墳**　羨道部、前庭部の天井は崩壊し去っていた。玄室はドーム型で、その大きさは、奥行二・五㍍巾三㍍、高さ一・八㍍程度で、周壁に沿って巾六糎前後の溝が周らされている。棺床部の設定はなく、床面は羨道部に向ってゆやかるに傾斜し、排水に便ならしめている。

玉石を敷きつめた形跡もない。周壁の鑿の巾は五糎～七糎程である。羨道天井部は崩壊し去っていたが、床面は巾六〇糎、高さ一㍍程である。前庭床面は、玄室、羨道部の床面と同位にあり、巾一・七㍍、先端までの長さ一㍍程で羨道部を塞いだと思われる水成岩の一部が認められた。五号墳に比べると粗製ともいえる。

出土遺物は、玄室床面の腐蝕土を精査し、勾玉一個、小玉五個（黒玉三個、白玉二個）鉄鏃二本、金銅製釧一個と、玄室入口の右壁面に沿って土器の杯、中央右壁面に沿って刀片を発見した。

## 第四節　遺物

寺内前の山上墳三基とも、副葬品として出土はなかったが、一号墳の封土中から、縄文土器と土師器片が含まれている。土師器片は黒色土層にふくまれた破片であるから、遺体に添えられた破片と見られないこともないが、少量である。二号墳からも土師器片が出たが、これは盗掘

にあっているので埋葬地点も器形も不明である。

当地点から谷をへだてた山上墳（円墳）から、礫槨と思われる礫に囲まれた須恵器が出土したが細破している。復原した大きは、高さ約二〇㌢で、口縁部を欠く。このように口縁部を欠く容器は、往々にして蔵骨の場合がある。（時代が下ると経塚の容器となる）実測図を提示して後考をまつこととする。（図版第六図）山上墳の下、横穴古墳二基は盗掘にあい、開口していたが、幸に次の遺物を発見した。

### 1、土師器杯

六号墳の羨門右裏側の壁近くから出土した。径約一二、八㌢高さ四㌢の内黒で、氏家和典氏の「東北土師器の型式分類とその編年」による第六型式に当り、同氏が調査を行った仙台市燕沢善応寺横穴一号墳出土の土師器に近いもののようである。（図版第七図）

### 2、玉類

六号墳から、勾玉一、丸玉五個が出土した。勾玉は瑪瑙製で、よく滑磨されている。コの字ではなく、二、七㌢の小型ではあるが古式である。同時に出土した丸玉は二個は白灰色で径一、三㌢、黒色岩質の丸玉は径一㌢である。（図版第八図）

### 3直刀、刀子、鉄鏃

五号墳の羨門前、崩された蓋石のさらに前方部中央に斜に埋没していた。数個に分断しているが、全長約一㍍の身巾の広い直刀である。（写真一〇図②の左）また鍔の断片が出土している。こわれているが八窓の倒卵形の鉄鍔で、口金物と密着している。

六号からの鉄鏃は箆代の一部をかいているがほぼ完全な三角形式の尖根である。鏃頭の断面は丸味のある重厚なもので、逆刺はない。残存部八㌢。他に角形の箆代が二、三出ている。（図版第二図）

### 4、釧（破片）

六号墳出土。三箇に分断され完全ではない。図上（図版第八図）の復原によると径七、五㌢程度になろう。断面をみると〇、四～〇、五㌢の円形で、黒い心の上に、白灰色の物質で包んでいる。質は不明であるが、粗悪な銅の合金に粗悪な銀の如きものを張ったのであろう。

## 第五節　むすび

山上墳の発掘調査の結果について一考を要する。この地方の山上墳について発掘の二、三の例から考察すると、何らの地下遺構も副葬品も発見されない。しかも、そうした山上墳の丘陵南斜面、或は東斜面には、多くの場合横穴古墳が存在する。今回の寺内古墳についても一、二号墳は必ずしも盗掘によってのみ遺物が散逸したとはいいきれないのではないか。横穴古墳との関係は考えられないか。つまり横穴墳に対する祭祀的装飾墳とは考えられないか。も少し多くの事例について考察する必要があろう。次に三号墳は明らかに盗掘されており、散乱していた礫（海岸より持ち運んだ丸い扁平な小石で二〇㌢×一五㌢×から五㌢×四㌢までで、一番多いのは径一〇㌢前後のもの。）から考えると、昭和三四

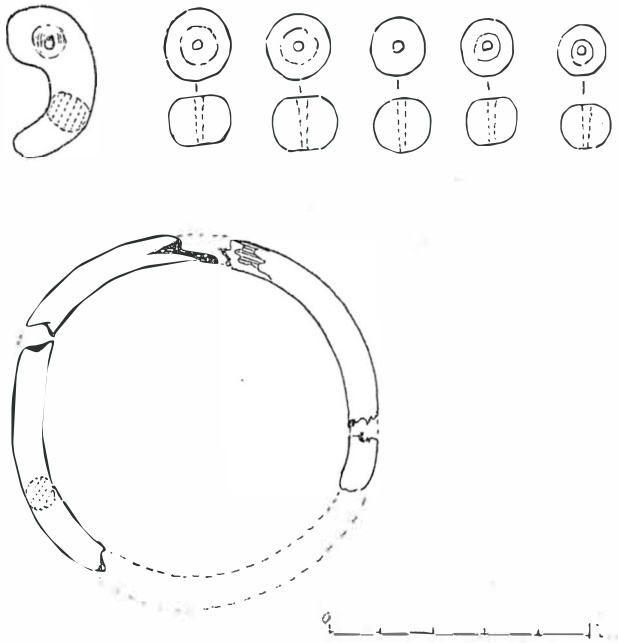
年八月、相馬高校郷土クラブによって発掘調査された古墳の場合に似たものと考えられ、礫囲いの中におそらく須恵器か土師の壺があったろうと推定される。これが火葬墳と考えられるとすれば、末期古墳の中でも、その性格、年代の推定に新たな考察がおこってこよう。

横穴古墳は、出土した土師器の形式などから七世紀半頃から八世紀始めにかけてのものと考えてよかろう。双葉地方の横穴古墳はドーム型を呈するものが殆んどであり、棺床の設定のあるもの、ないものの区別は存在しても、立派に羨道、前室の形態をとどめている。五号墳をその典型的なものとしてよいであろう。また、棺床設定状況からして家族墓的な性格をもつことは勿論である。

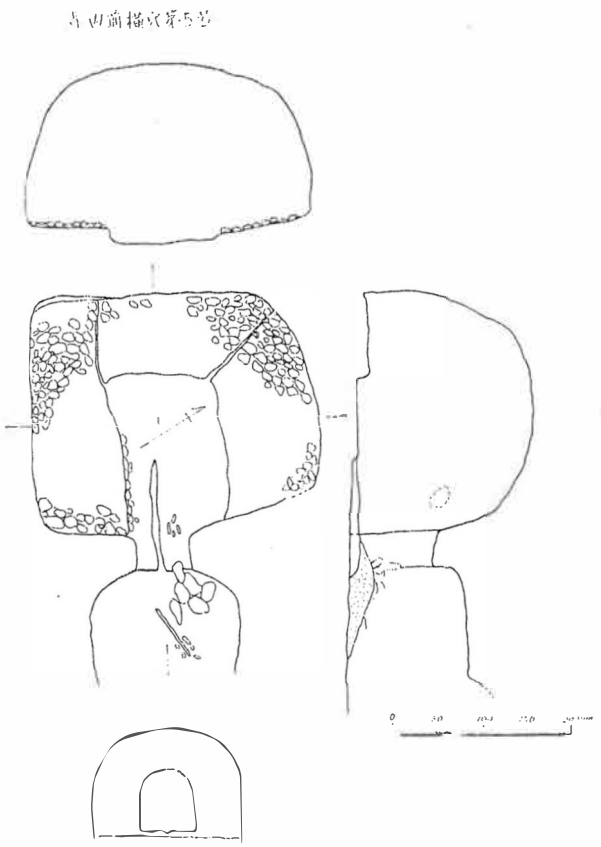
（西　徹雄）

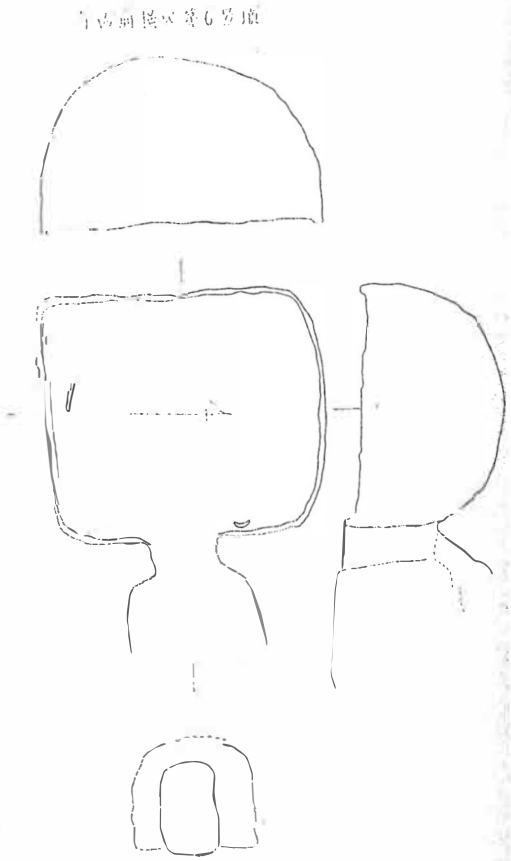
（註）　東北土師器の形式分類とその編年、氏家和典歴史一四輯

図版第8図

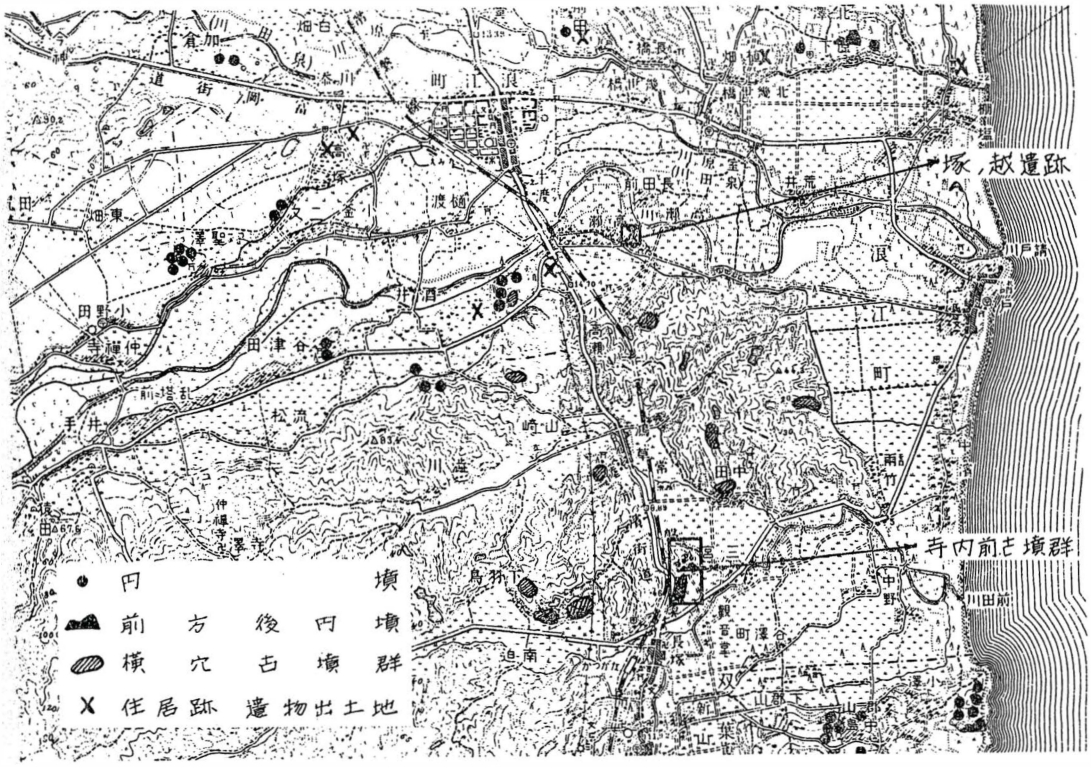


図版第9図



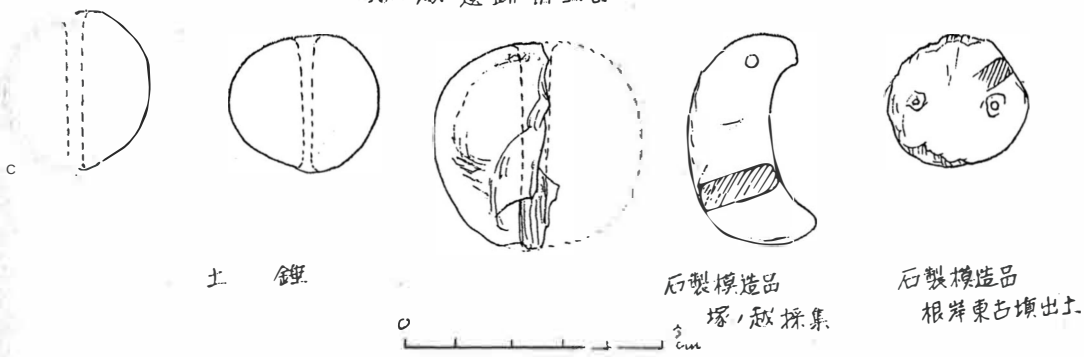


図版第10図　　寺内前古墳・塚ノ越遺跡附近

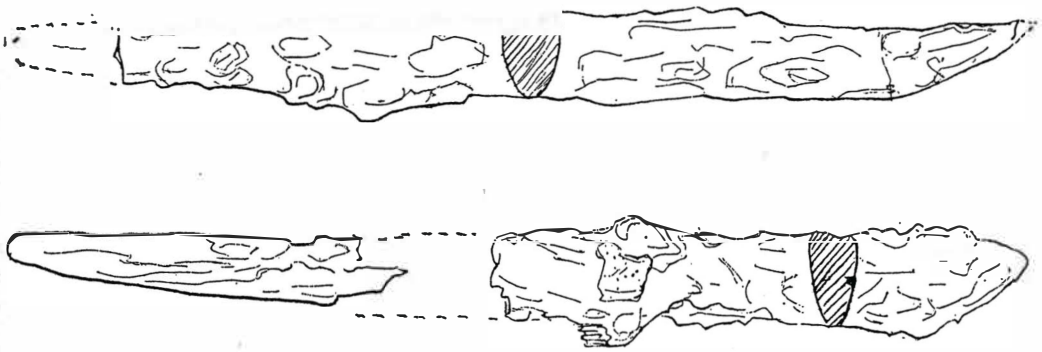



図版第11図

塚ノ越遺跡出土品




寺内前横穴出土品



# 第四章　塚の越遺跡

双葉郡浪江町

## 第一節　遺跡の位置と現況

### 一、自然的位置

阿武隈山地に源を発した室原川と高瀬川が浪江町の東方海岸から約二キロの上流で合流すると請戸川となる。このうち高瀬川は双相の海岸に多く見られる第三紀の砂岩を侵蝕し氾濫原を広げながら、浪江町の南を東に流れている。おそらくこの高瀬川は古くは現位置よりは南方を流れていたもののようで、現在の用水堰「請戸五十鈴」はこの旧河跡の一つにつくられたものであろう。

しかも高瀬川の右岸は、この「請戸五十鈴」を境にして、ゆるい扇状地をわずかにつくりながら、南方砂岩の丘陵地まで、ゆるい傾斜をみせ、多くは水田として利用されている。

遺跡のある位置は、高瀬字桜木とよばれる高瀬川のつくったデルタ上にあり、浪江町の南、国道六号線と国鉄常磐線が高瀬川を平行して越える地点から、高瀬川は北に大きく湾曲して流れ、下流長田地内で再び南に蛇行して、その弓形の流路の内側に生じた氾濫原よりデルタの一つにある。そのためこの遺跡地のようなデルタは、この氾濫原上にはいくつか数えられ、何れも三㍍以内の比高によって高地は畑地となり、低地は水田として利用されている。

遺跡の位置は、高瀬川の何床からは約九㍍の高度を保ち、東西五〇〇㍍、南北一五〇㍍余の、紡錘状のデルタで、西に高く東に低い砂質壌土が表土となっている。しかもその表土の厚さは約一・二㍍から〇・七㍍あって、その底に砂礫層をみせ、伏流がみとめられる。このためこの地域の地下水はおよそ二・四㍍前後で浅い。このデルタの頭部の集落をなす農家の井戸は、この地下水を利用している。

この遺跡をとりまく浪江町の古代遺跡の概観をみるに、大別して三地域に区分して考えることができよう。第一には室原川北岸の沖積平野と洪積台地上に点在する遺跡で、「雫草、巡礼堂縄文遺跡」「百間沢・万開縄文遺跡」「巡礼堂方墳群」「本屋敷古墳群」「堂の森前方後円墳」「安養院古墳群」「酒田古墳群」などがあり、中でも「巡礼堂方墳群」は有名である。

次に、室原川と高瀬川にはさまれた沖積平野と洪積台地上には「上野原遺跡」（縄文、弥生、古墳、土師の複合遺跡）、「清水縄文遺跡」「中平縄文遺跡」「加倉古墳群」「小野田古墳群」などがあり、「上野原遺跡」はとくに、弥生遺跡としてまた数々の貴重な遺物を出土した「上野原古墳群」などで著名である。

第三には、高瀬川南岸の沖積平野を中心として「宮林縄文遺跡」「堂前縄文遺跡」「三反畑遺跡」（縄文、弥生、古墳、土師の複合遺跡）、「堀の内土師遺跡」「塚の腰土師遺跡」などが点在している。これら高瀬川南岸遺跡の特色の一つは、丈六公園を境として、その西側平野には縄文遺跡が多く、東側一帯を中心として弥生土師遺跡が広がっていることであろう。

今回調査した「塚の越遺跡」「堀の内遺跡」などはその例である。

## 二、住居跡としての位置

この高瀬地内には、縄文以来の遺跡が多く上野原、南大阪の弥生遺跡を始めとし、さらに土師遺跡としての「堀の内」「清水」があり、この「塚の越遺跡」もその一連のものである。殊にこの塚の越遺跡について渡部晴雄氏、西徹雄氏等によって紹介されておりまた、この北西、丈六古墳群、上野、高塚古墳群も同氏等によって明らかにされてきた。(註)

このことは、この地が古代人の住居地として、好適の位置であったのであろうが高瀬川のつくった氾濫原と、これをとりまく丘陵地を背景とした自然条件が、人間の居住を可能ならしめたもので、縄文以来の古代からの遺跡は全くこの与えられた環境によったものと見るべきである。

この遺跡は、国道六号線の完成と共に永久に道路として埋没されてしまう運命にあるが、現在は畑地として、この地の有力な耕作地となっている。本遺跡は、土師器の表面採集によって早くから知られてきたが、発掘地の南側、丘陵地の裾にあたる扇状地の末端にあたるわずかな差下に、つくられた、請戸五十鈴の開さくによって多くの土師器の出土があった模様あでる。

遺跡は、くわ畑となり、ごぼうの植付を行いなどして、度々深耕が行なわれた模様で発掘当時は、馬鈴薯の採取が終ったばかりであった。近世の集落は現位置よりも北側によっていたといわれているが、今のようにデルタの頭部に集り、高瀬川よりは離れるように住居が並ぶようになったのは「請戸五十鈴」の開さく以後のことであり、この「請戸五十鈴」の開さくと同時にデルタの末端にまで水田の開こんを促進し、居住地も「請戸五十鈴」にそった部分に移動したことは明らかである。

# 第二節　発掘の状況

### 第一日　晴

予定されていた調査員は、渡部晴雄氏を中心として浪江班が担当し人夫八名に双葉高校の考古研究クラブ員が西氏の指導で従事することになった。すでに予定されていた発掘地国道六号線の中心ポールR一〇一号の地点をもとにして計測し、一号～四号までのトレンチを計画し、十時頃、暑い日ざしを受けて発掘にかかった。午後一号トレンチに層位の変化をみつけて気色ばんだが土師器の破片を採集するにとどまった。二号トレンチも同時に発掘にかかったがここもとくに目新らしいものも出土しないまま第一日が終了した。

### 第二日　(晴)

前日に引き続き発掘にかかる。一号トレンチの南端近く、表面から七六㌢で地下の礫層に達し、デルタの伏流が湧き出すのに出合った。この間における層位の変化は認められない。午後二号トレンチの中央部に新たにピットを入れ一一二㌢で礫層にあい、表土の厚さを確認し発掘をつづけた。この間第三、四号トレンチの発掘にもかかったが、何れも層位の変化はみとめられない。

### 第三日　(晴)

炎暑が甚だしい。第三、四号のトレンチも全く層位の変化がみとめられず低部の礫層につき当った。ここは、表土が耕作殊に、ごぼう、桑等

の栽培による深耕によって荒されてきたことが確認されるに過ぎない結果となった。昼食時調査員協議の上第一号トレンチの東部畑つづき二〇㍍の地点にピットを入れ夕刻になってから地表から五二㌢のところに炉石らしいものを発見した。これをA住居跡と名づいた。つづいてB地点の北方にも数個のピットを入れトレンチの拡張を行った。

第四日　（晴）

A住居のピットを中心に掘り広げ、さらにC地点のピットを広げていくこととし、一方、一号―四号のトレンチのあとしまつをはじめた。正午までのうちにA住居跡は、炉石の如きものの側に赤褐色の焼土があらわれ、重なるように土師のかめが側面をみせた。B地点からは直径二㌢の球状の土製品―（土錘か）―二ケ出土し、この地域の有望さを示したので、ここをC住居跡と名づいた。さらに、C、D、Eのピットを入れ掘り広げたが時間の問題もあるので、A、B、Cの位置に集中して精査することとした。

第五日　（晴）

前日に引続いてA、Bのトレンチを広げてゆく。Bの住居跡からはふいごの跡らしき所、炉跡等を掘り当て土師器の完形品も出土した。A住居跡では西側に柱穴があらわれ、引つづいて周壁の一部がみとめられたが、夕刻となったので現状保存のために覆土作業を行った。

第六日　（晴）

A、B両住居跡の精査を続行する。正午近く、B住居跡の炉の位置から南東に二㍍四十㌢の場所に高さ二十四㌢、長さ約二㍍の周壁を確認しプランを追求した。A住居跡は、炉から、北に二㍍四〇㌢に周壁が、東西に二㍍程確認することができた。周壁の巾は、五十二㌢。その間土師器の出土も多くなり、この地域の住居跡の重要さが明らかになった。午後から実測にかかる。Bトレンチの西辺の壁の内面があらわれた。夕刻になって、二号トレンチの中央一㍍程の下方に、炉跡とが埋立作業中偶然発見され土師器片の多量の出土をみたが、時間不足からプランを明らかにすることができなかったのは残念であった。

第七日　（晴）

最終日である。作業は午前中とし実測と写真撮影を行い、午後は埋立にかかることとした。石灰で化粧し柱穴の位置、炉と壁との関係などプランを明にし撮影、実測した。一方出土品の整理を行い、さらに参考とするために「五十鈴」の堰の左岸にピットを入れたが得るところがなかった。午後から実測と撮影を続行し、埋立てを行い夕刻にいたって予定の発掘作業を終了した。

## 第三節　遺跡と出土品

### 一、A住居跡

住居跡は六号国道予定線上に設定したAトレンチの東方約一六㍍の所に、二箇併列して検出された。南をA住居跡、北をB住居跡と名づける。

A住居跡は、表土から六〇㌢の所に北部の周壁の一部を発見した。それから南方、二㍍八〇㌢へだてて炉跡がある。炉跡は径約六〇㌢、ほぼ

円形に赤色を呈し、木炭片を交えて固く焼しまり、東近く約四五㌢の所に完形の土師器壺二個が横だおしにあり、それから四〇㌢へたてて柱穴一箇がある。西方にも柱穴が六個雑然と配列しており、その間に土師器の破片、砂礫が散布していた。

これだけでは住居跡のプランは明らかにされないが、北辺の周壁は五二㌢、約二〇度南に偏して東西に直線状に二㍍ほど確認されているので方形のプランであろうと推定される。南半は地主の承諾が得られなかったのでその大きさを確認することができなかったのは惜しまれる。

柱穴は結びつけることができない。炉跡近く、偏平な石と礫が十数個あたかも炉を囲むようにあったのは、炉の構造が壊された跡であろうか。

## 二、B住居跡

B住居跡は、A住居跡からほぼ、三㍍離れた北隣に位置する。直線をなす南辺の壁が確認され、その北方に約二㍍をへだてて二個の炉跡がある。炉はA住居跡と同じく、赤色を呈する焼土のみで、石の構造はない。二つの炉跡の中間に、約四〇㌢×八〇㌢方形に焼けた地点があり、ここに、鞴（ふいご）があった痕跡がある。

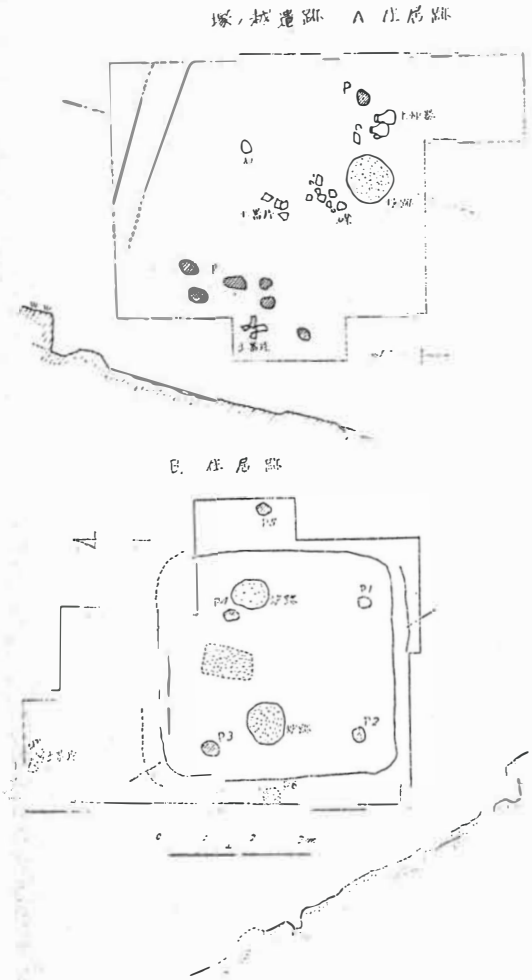
床面を精査して四基、壁外に一箇（P5）の柱穴を検出した。柱穴は径三〇㌢ほどで、深さは一様でないが、二〇㌢前後で、柱穴内には何も見当らない。

東、北、西の三面の壁は、南壁の如く、明瞭に存しないが、土色の変化により想定され、一辺三・八㍍～四㍍隅丸の方形のプランである。深さは表土より六〇㌢で、残存する南の周壁は二〇㌢程であるから、僅かに竪穴をほり周壁を築いた程度で平地住居に近い竪穴住居跡であろう。

柱穴はプラン内にほぼ二㍍の間隔に四本（P1、P2、P3、P4）あり、この主柱をもって屋根を支え、さらに東の壁外に一箇（P5）がある。これと対象的にP6を想定してさがしたが、すでに破壊されたと見えて確認されなかった。

本竪穴住居跡のさらに北方三㍍の地点に、多くの土師器片があり、中に復原可能なものもある。また、径二㌢ほどの球状の土製品が二個出土している。土錘であろう。この地点はB住居跡の関連のものか、別の住居跡に属するものかは確認されない。

図版　第10図



## 三、遺　物

塚ノ越遺跡は土師器を中心として須恵器破片が僅かに混在し、弥生式は四号トレンチ内より少量出ている。高塚遺跡と同じ異条縄文を施した桜井式に通ずるものである。

### 1、土　師　器

壺形、甕形、杯、高杯、甑など各種の器形が出土しているが、完形品が少く、また破片の整理が行き届いていないので、全貌の解説はできないが、口縁の外側に稜線のあるもの、丸底の坩、木葉文のある底部、内黒のものなど、東北地方に遺存する凡その形式が出ている。

次に、復原し得る土師器二、三のものについて考察しよう。

図版第一二①の甕形土器は高さ約三〇糎、比較的厚手である。器形はいわゆる長胴形ではないが、球形までもゆかぬ。口縁部が単調に外反し、口縁部と体部との区別としての段がみられない。体部に、②の如く条痕文があり整形されている。この形式の底部には木葉文がある。

図版⑤は　丸底の坩で、高さ一三糎、手ひねりの粗製土器で厚い。僅かに口頸部がくびれて外反し、体部に刷毛施文の刻目文が施され口頸部両方に小孔がある。

図版　②③④⑥甕形、壺形の口縁部で④は頸部に稜線のある精製土器片で、高杯とも見られるが口縁部の広さからみると、口頸に稜線のある壺形とみられる。

③⑥は刷毛目文をもって整形された長胴形で、②はろくろによる整形の跡がある。

図版⑦　甑形土器　こしきは他に一片出ているが、図は無底鉢で、胴部に刷毛目がある。図版⑩⑪は丸底の坩で、口頸が極端にくびれている丈の短い器形で、⑩はとくに口頸のくびれがはなはだしい。

図版⑫⑬⑭は杯⑭は丸底で口縁が外反し、いくらか稜線を形成する。⑫はいわゆる内黒である。⑬は口縁が小さく外反するが丸味の深い底部をもつ。

氏家和典氏の提唱する東北土師器編集の第四、第五型式が多いようであるが、さらに古式のもの第一型、第二型も見られる。第四トレンチの弥生式との関連は今回の発掘では明らかにされない。

### 2、須　恵　器

完形品がなく、小破片のみであるが、頸部の波状文、内部の青海波文があり、須恵器は、土師器に比べると出土量は僅かである。

### 3、土　製　錘

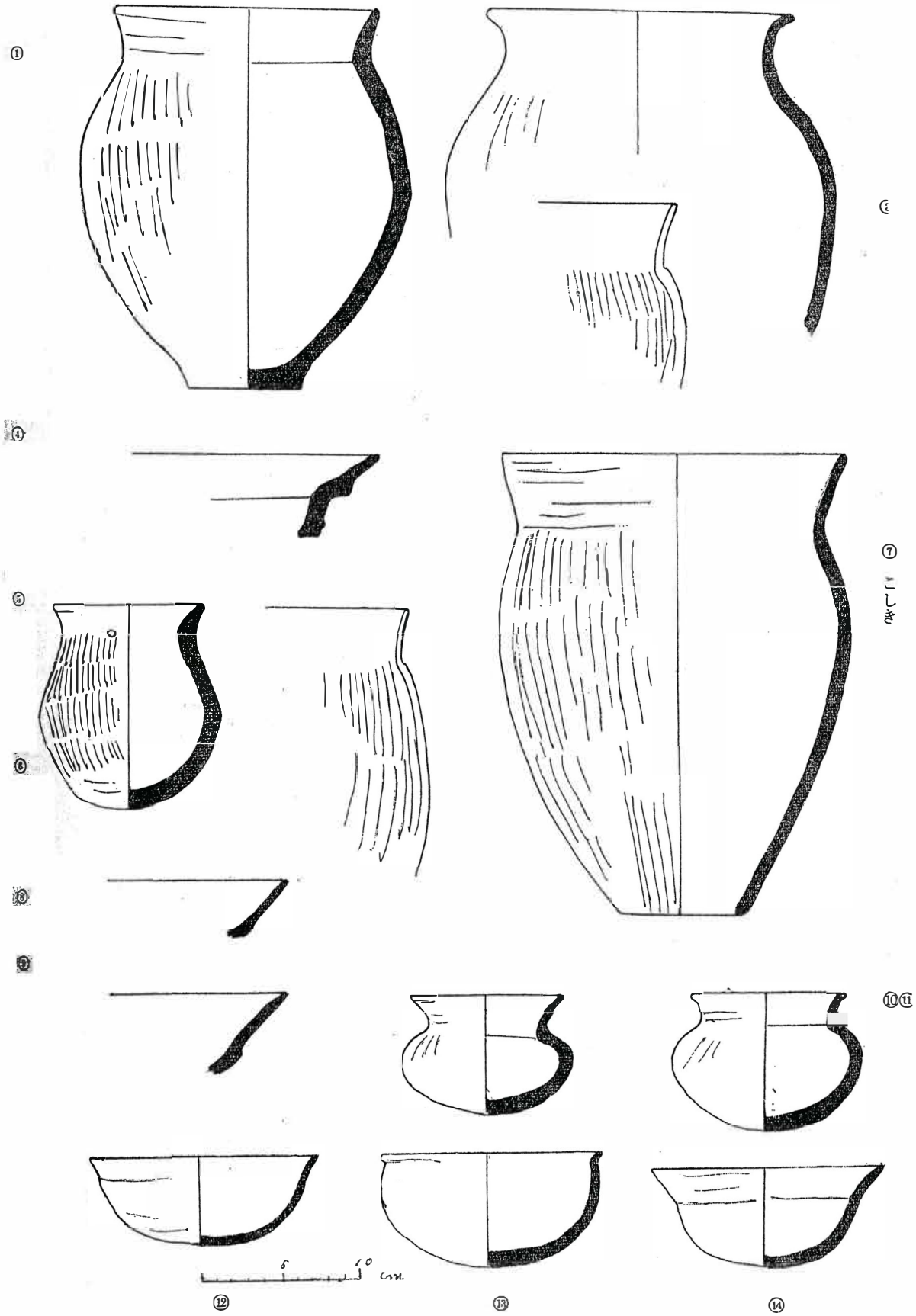
口地区のBピットから大小二種三個が出土している。小さいのは径一・五糎程度球状のもので、孔は一方からあけてある。大形は破片であるが、径約四糎ほどで孔は形に合わせて太く、五～六糎で両方から貫通させている。（第一一図版）

### 4、石製模造品「勾玉」

口地区Aピットから出土した。長さ四糎の平板勾玉形、黒色を呈する滑石質で、厚さが五糎一端に一孔がある。粗製であるが、祭祀遺跡から出土するものと似た形式で、住居跡から発見されたのは注目すべきであろう。

（秋山　政一）

図版　第12図　　塚ノ越遺跡出土　　土師器実測図



# 第五章　根岸古墳群

## ―相馬市小泉―

### 第一節　古墳の位置と現況

国道六号線工事のため破壊される遺跡で、相馬市小泉字根岸地内の円墳二基は、常磐線相馬駅の北方一キロのあたり東西に長く延びる海抜二〇㍍ほどの丘陵上にある。

この辺は福島県の最東北隅にあたり、附近一帯に小高い丘陵が発達しその間には沖積地が数多く開けている。丘陵はいずれも海岸から西へ進む程高くなって阿武隈山系に連り、これらの丘陵のいたる所に長い時代に亘るいろいろの遺跡が散在している。

この遺跡の北方新地小川の貝塚、駒ケ嶺三貫地の貝塚はやや離れるにしても、東方一キロ乃至二キロの丘陵続きには本笑、和田の山上墳と横穴墳、西南方一キロ乃至二キロ相馬氏の居城中村城のある丘陵には西山の横穴古墳群、さらに南方三キロ乃至四キロにある高松山から柏崎に連る山上墳群と横穴古墳群などはとくに顕著なものである。

また高松山の北麓一帯は今はすっかり畑と水田に整地されたが、程田には貝塚の遺跡があるし、成田には縄文晩期の弥生直前の土器を出した藤堂塚の遺跡や、昭和三六年に夥しい埴輪を出して注目された船橋の丸山古墳のあともある。

さて根岸古墳は畑地に開拓された小鞍部を隔てて東西に相対した山頂部に構築されているので便宜上東古墳・西古墳と呼ぶことにした。どちらも長い間に原形が相当破壊されているがとくに西古墳がはなはだしいこの地方の鉄道沿線の古墳は例外なしに鉄道敷設当時、明治三〇年頃盗掘されているし、またこの附近は曾って元禄から天明頃まで中村城下の寺院が立ち並んでいた所といわれるので寺院遺跡と重複して手が入れられていることも考えられる。

### 第二節　発掘状況

東古墳から調査を開始した。稜線の最頂部に構築された径一七㍍ほどの円墳であるが、西側は畑に東側と北側は山道に切りくずされ、南北一六㍍東西一四㍍基部よりの高さ二㍍、南北にやや長い現況をとどめていた。念入りにボーリングを試みたが特別の手ごたえはない。

ほぼ中央と思われる所から正しく南北に巾一・五㍍のAおよびC、東西にBトレンチを入れる。地表より七〇㌢乃至九〇㌢の層に土師の細片を見ただけで間もなく岩磐に達した。

地表から岩磐まで中央部で九〇㌢、岩磐から三〇㌢ほど上部にうっすらと地山の腐蝕土の認められる所もあったが一帯に明瞭でない。墳丘の中央部から南に八㍍Aトレンチの東寄りに、直経二五㌢の丸石を置き岩磐を丸くくりぬいたピット1（P1）を発見し、さらに掘り下げたところ近世の手鏡一面と銅銭（寛永通宝）二枚が現われ、江戸時代の墓穴であることがわかった。ピットの大さは直経八五㌢地表より底部までの深さ一二〇㌢で、これと並んで真南にほぼ同様のP2も発見されたが出土品はなかった。

Aトレンチから掘り上げた封土の中に石製模造品双孔円板（鏡）一箇

が発見された。Bトレンチの東端地表から六〇糎のところに石包丁の破片が一箇あたっ、Bトレンチの縁から四㍍を隔ててD・Eトレンチを入れたがこれからも土師の小片が出ただけで遂に東古墳の埋葬部は発見できなかった。

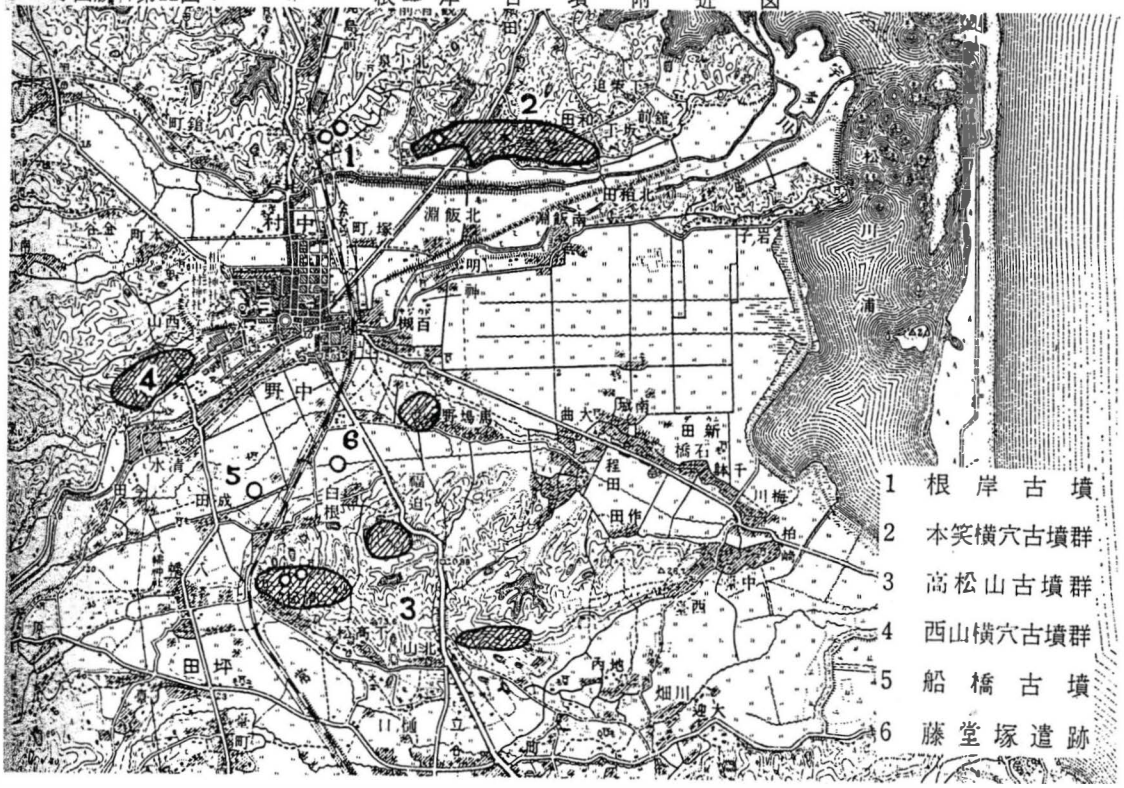
つぎに西古墳を調査した。西古墳は直経約二〇㍍、大体東古墳と同様の円墳であるが、東古墳よりも急斜面を持つ小丘の最頂部に営まれ、南側基部と思われるあたりがあたかも参道でもあるかのように東西に長く地均しされていた。また墳丘の中央部二箇所は大きく浅く窪んで盗掘の跡を示していた。

東南より西北に長さ七㍍、巾一・五㍍のAトレンチを入れた。黄色い粘土質の封土で、中央の窪みの部分は黒い腐蝕土が深く入り交り盗掘の跡であることを確認した。このトレンチは両端とも東古墳において発見したのと全く同様のピット（P1・P2）に突き当り近世の土師質の坏が出土した。さらに東北に延ばしたBトレンチもまたピット（P3）に当った。中央部で封土の厚さ約六五糎、地表より岩盤までの深さは約九〇糎、BトレンチのP3からは火皿の大きな煙管、寛永通宝、漆器の残片が発見された。

切り落されたように見える南斜面に巾一㍍のCトレンチを入れ表土を取り除いたところ岩盤が大きく三階段状になっていて、基部から高坏の破片が一箇出土した。このトレンチの反対側西北にもDトレンチを入れて封土の状況をみると岩盤は緩かな斜面で基部にゆくに従って表土は浅くなった。かくて西古墳においても、古墳としての埋葬施設を確認することができず、墳丘の周辺が江戸時代後期に、墓地として使用されていたことが判明しただけであった。

（佐藤　高俊）

図版　第12図　根岸古墳附近図



# 第六章　総　括

以上四章にわたって本県東部地区――太平洋沿岸地帯のうち、双葉・相馬両郡下の遺跡分布調査、ならびに、横穴古墳、丘陵上の小円墳群、土師器を出す住居跡について、それぞれ発掘調査の結果を記した。

なかでも百数十を算する大窪横穴群の如きは発掘を行ったものは一部分にすぎず、しかも既に盗掘されたものの清掃を中心としたものであるから、玄室内の遺骸、副葬品の出土状況は不明であり、また個々の遺物についての整理研究は目下継続中であるから、記述されたものは概報にとどまり、詳しい研究成果は将来にまたねばならない。しかも短時日の緊急調査であるから不十分な調査であったとはいえ、本県の太平洋岸に分布している後期古墳に関する研究を進める上に新たな知見を加え、土師式の住居跡にも新資料を加え得たことは、本調査の成果といってよかろう。

以下簡単な総括を試みて結語としたい。

## 一、相馬・双葉郡下の横穴古墳の特性

海岸に臨むこの地帯は、砂岩系の台地が多いので横穴古墳を営むには条件がよく、南は勿来市より、北は新地村富穴前横穴群にいたるまで分布している。このうち大群集をなすものは

| | |
|---|---|
| 千五穴横穴古墳群 | 平市高久 |
| 清水尻横穴古墳群 | 双葉郡富岡町 |
| 江垂横穴古墳群 | （本遺跡） |
| 高松山横穴古墳群 | 相馬市坪田 |
| 西山横穴古墳群 | 相馬市中村（注1） |

この他にも、調査によっては大群集をなす横穴もあろうと思われるが、当江垂横穴群は、著名な後期群集墳（中には後期よりさかのぼるものもある）として知られる真野古墳群（一部慶応大学発掘）の一環をなし、山上の稜線にも円墳群が併存している。

今回発掘調査を行ったのは、江垂横穴支群のうち東方に位する大窪地内であり、しかも既に盗掘されて開口しているもの四八基のうち、清掃をかねて再発掘を行ったものは僅かに一〇基である。また他の横穴古墳も、本格的な調査を行ったものが少ないので、比較考証することは困難であるが、一応概観を提示し考察してみよう。

大窪横穴古墳群は占地条件は他と異ることがないが、多数の群集であるので、南面する丘陵の斜面に二段――三、四段に造営されており、中段ないしは下段のものが構造も精製で規模が大きく、最上段が粗略になる傾向があり、特に丘陵頂上の近くには、小規模な省略されたものが配されている。このことは横穴古墳の造営年代を示しているのであろう。

このことについて、さらに詳述すると、第二章第五節において堀込静夫氏が記述してあるとおり、比較的上層に位置するものは小型で玄室は簡素であるが、前室が比較的長い。これに比して中層ないしは下層に位するものは、玄室が大きく、製作も精密であり、朱彩を施し、家型が多い。羨門の構造も良好であるが前室が短く、屋蓋（天井）を有しないのが多く、前庭部が広大となり、家族墳の条件が強くなる傾向がある。

中腹以下は、岩山の傾斜がゆるやかになり、前室の構成が困難な理由

にもよるのであろうが、かかる地形を選定したことは、上層と年代的に差があることを示しているものと考えたい。新発掘でないために出土品や埋葬状態が明らかにされないので、進んで構造年差を示すことはできないが、提示して大方の示唆を求めたい。なお小形で、横穴古墳の形態にはふさわしくない小穴が五例検出したが、多くは最頂上に分布しているのは退化形式とみられ、分布上注目すべきものと思われる。

玄室内部の構造をみると、本横穴群に家形を有するものが四八基のうち九例があり、いづれも下層に位置していることは前述のとおりである。家構のうち宝形造は三〇号と九号で、一〇号、一四号、一五号、一七号、二三号、三一号、三五号の七例は、寄棟で、しかも平入である。このうちでも一〇号、一六号、三一号墳は極めてすぐれており、一〇号の如きは朱描きで、降り棟、垂木、母屋を表現している。

本県の浜通りにおける家構を有する横穴墳の例は多くはないが、小高町福浦の浪岩横穴のうち、同所九十番地、九十一番の一所在のものは、宝形造で、九十番には棺台がある。原町市上太田の前田横穴第一号墳は当大窪横穴とは地理的に近く同形式の寄棟造平入であり、相馬市日立木の高根沢横穴の如きは特殊な家構で、断面が梯形の蓋を有する長持形の石棺を大きくして玄室を構成したような形式で、当大窪横穴群には見当らない。

平沢一久氏の調査した相馬表西山横穴墳(註(2))は、群集墳を一括調査したので諸形式を検出しているが、三基の家構を報告している。皆寄棟造であるが、表西山A地区の十一号、十四号の二つは、棟の線が羨道と平行につけるてある。即ち妻入りの形式であるのは、当大窪横穴の家形玄室とは大いに相違する。

これは表西山の横穴群の玄室は、奥行が深い矩形のプランを有するので、いきおい妻入りの形式をとったのであろうが、氏家和典氏らが調査した仙台市燕沢善応寺横穴古墳群は(註(3))表西山と同じく奥行の深いのが多いようである。東北地方北辺の諸例を熟知していないが、当大窪横穴群と表西山横穴群との間に形式的に(時間的乃至は系統的に)差があるとすれば、今後の問題としてとり上げてよいものであろう。

当横穴の玄室のプランは、主として間口が少し長い矩形であることは前記のとおりであるが家構を有するものは壁と屋根の間に切り込みがあって境界を区切る。このことは他の例と同じであるが、寄棟造は、棟木を掘りくぼめ、一〇号墳の如きは、降り棟、垂木を朱で表現している。

床に排水溝を有するのも通例であるが、棺台を有するものは多くない。有名な泉崎横穴(西白河郡泉崎村、指定史跡)は奥壁にそうてしつらいている。浪岩九十番地内の宝形造の家構を有するものは奥壁に沿うて棺台があり、表西山横穴群の七号墳は玄室の左側壁に沿うて排水溝によって区劃したもの、九号墳は奥壁にそうてやや高い区劃があり、これが棺台とすれば、極めて簡単なものである。

さて、今回発掘を行った寺内前横穴五号墳は玄室の三方が、それぞれ排水溝の如き切り込みにより区分されて一段高い所がある。これも一種の棺台と考えてよかろう。

次は壁画の問題である。

泉崎横穴は朱彩の壁画があって知られるが他に確実に当初からの壁画とみられるものは見当らない。開口した横穴には線刻画のあるものが往

々に存する。西山横穴調査の平沢氏は高松山横穴の壁画にふれているが、筆者はこの古墳群の刻画については疑問を懐いている。本大窪にも刻画が多い。しかしいづれも盗掘後の落書であり、ただ三号墳は開口後間もなく調査を行った慶大の清水氏は朱彩の壁画であろうといっているが、現在は磨滅して何らの形状も見ることができない。今後新に開口した横穴に刻画が存在したことを確認するまで、当横穴群中に壁画が存在したことは保留としたい。

出土品については、未開口の新横穴を調査することができなかったので、玄室内の埋葬状況、副葬品の配置を論ずることはできなかったが、双葉町清戸迫横穴からは、異形の頭椎太刀や、桂甲、鉄斧、直刀等多の出土品があり、表西山A区三十号墳は、横広がりの小さな墓室であるが、右半部の箇所から、硬玉製丸玉、丸玉、勾玉、ガラス小玉、須恵器、馬鈴、鏡片が出土している。人骨はなかつたようであるが、横巾が、一・五〇㍍であり、副葬品が右半部にかたよっていたとすれば、屍体を葬ることは可能のようである。

大窪横穴からは金ばかりの辻金具や、琥珀の玉（破片）が人骨の破片と出ているのでこれらの横穴墳が、後期の群集古墳と、基本的には同じ性格の古墳と考えられる。なお人骨は一二号墳に（盗掘）細破されたのが残存していたが、他の例の如く合葬されていたか否かは確認されない。しかし寺内前五号墳の如く玄室内の三方に棺台があり、また筆者は西白河郡中島村二子塚の西山横穴墳から五体―六体の人骨を出し、白河市芦ノ口の的石山横穴墳から数体の人骨を掘り出したことに立会したことがあり、大窪横穴の群集された形態、玄室の構造からみて、他の例の如く、家父長制家族をその被葬者とした共同墓地であることは事実であろう。

羨門、入口の構造は特に他に異るところはないが、各種の形態があり、入口の閉鎖装置も、板石、切石積み、丸石等があり、カンヌキ穴もみられる。

羨道前の前室（外室）それが発展して大きく開き前庭部を構成しているのも多いようである。前庭部を完全に調査することができなかったが、一〇号、一二三号、三六号の三墳は、ここに須恵器がおかれ、直刀、玉類が検出されている。群集横穴の共通した前庭部がどのような形態であるかは、時間の関係で明らかにされなかったがその存在は一〇号墳の附近に存在していることは推定される。三六号墳の外室からは、管玉、ガラス小玉、琥珀玉が右側の岩壁近く発見されているが、人骨は確認されなかった。しかし玉の出土状況からみると、穴式石室の羨道部から副葬品、人骨が出ている例（勿来金冠塚古墳 註(4)）からみて、後世（時間的にややおくれたという意味）ここに埋葬されたのではなかろうか。

次に注意したいことは、副室と称してよいか判断に困るが、玄門の側壁と、羨道外室の側壁に小さな、棚のような凹部をうがち、ここに副葬品をおいた例が三例ある。この例はいくつか報告されているが、本県の他の横穴からは寡聞にして接していない。

最後に、極めて小さな、羨道を伴なわない横穴墓があることである。大窪横穴には五例があった。また大窪の西に続く同系にも一箇の例があり、ここからは、勾玉、ガラス小玉が発見されている。（註(5)）今回発掘を行ったのは四八号墳で丘陵頂上に近い最上部に位していたが、横の

広がり二、五㍍奥行九四㌢天井の高さ六〇㌢で、開口部に入口の閉鎖装置として巾八㌢程の敷居状の切り込みがあり、板のようなものを建てるに都合のよい形式である。左側奥壁近く直刀が発見されている。四六号墳からは鉄斧と見られる鉄塊が出土している。

この例は、表西山横穴の遺物を多く出したA三〇号もこれに属するもののようである。屍体を葬ることは可能ではあるが、粗雑な構造に比して意外の出土品がある場合があり、独立した小墓穴とみてよいか疑問が存する。西山A三〇号も最上段にあり、大窪横穴の場合は五例のうち四例が最上段に位置していることは、時間的に最も新しく造られた退化形式と見られないこともない。同例の追加により判断したいので、しばらく問題として提示したい。

## 二、相馬・双葉郡下の山上墳について

この地方の高塚古墳には、真野古墳の如く平地に造営されたものと、丘陵の稜線上に形成されたものがあり、両者の間には構造において出土品において、かなりのへだたりがある。

これまで発掘調査され、あるいはまた内容の明らかにされた円墳、ないしは前方後円墳は数多くないので、両者の比較考証をすすめるには資料が不足であるが、次の点は明らかに指摘されよう。

先づ墳形からみると、山上墳は比較少さい円墳が大多数をしめている。ただし江垂横穴古墳の中央部（大窪横穴群の同峯西方）の山上墳の如く径三〇㍍に及ぶものがある。また、双葉町の寺内前古墳群と浪江町丈六古墳群の中には、小さな前方後円墳を交えていることは見逃せない。

これら山上墳で、学術調査を行った例は少いが、丈六古墳群は渡部晴雄氏が担当者として調査したが、封土中に何らの遺構もなく葬った形跡を示す層位の変化も確認されなかった。（註(6)）

今回の調査と同期に実施した原町市泉の大磯古墳群（これは海岸の河口に臨む丘陵上であるから、厳密には山上墳とは称しにくい）約十基のうち一基から切石で構成された組合せ石棺が出土したのみで、他は遺構がなかった。（注(7)）今回発掘した、相馬市根岸古墳も前述の如く遺構がなく、寺内前古墳群も、一号前方後円墳に層位の変化はあったが、遺構と断するまでにはいたらなかった。

封土を持つ古墳で、棺や槨等遺構が見られない古墳に、我々はいくつか遭遇している。田村郡田村町正直古墳や、双葉郡浪江町上野原古墳、真野古墳群一一二号（前方後円）の如く、中心部に縦横にトレンチを入れても発見されず、マウンドの端や、鞍部に石室が存在していた如き、従来の古墳研究の常識では考えられない箇所に残存する場合はあるが、前記の例の如く、マウンドを細断し、全掘に近くまで掘っても確認されないのは、決して調査の不備ではない、一体どうしたことであろうか。

今回の調査は、偶然であろうが、山上墳とその斜面に横穴墳が共存している例を発掘したが、その際両者の関連をとき、山上の高塚が形式化された象徴的なものではないかとの推論も出たが、これは想定の域を出ていない。

この場合注意すべきは、寺内前古墳の三号墳は事前に盗掘にあい、玉石が数多く封土内外に攪乱されて存在していたことである。この三号墳の西、谷一つをへだてた稜線上に同じ程度の小円墳がある。これは昭和

三十四年八月相馬高校社会部が慶大清水潤三氏を担当者として発掘調査を行ったことがある。この際、玉石で構成した小石槨があり、中に押しつぶされた形で、須恵器の坩が出土している。復原したものを見ると、腹部の径一七糎高さ二〇糎口縁部を意識的に打ちかいたもので、内蔵物は不明であるが、火葬骨を入れた蔵骨器のように見える。

原町市大磯古墳五、六号円墳の中央部から、須恵器の大甕破片が多数出土している。これについて平沢一久氏は遺体を入れた一種の棺（或は蔵骨器）と考えられないだろうかといっている。

相馬・双葉二郡下の平地に造営された高塚古墳からは、各種の遺構があり、出土品にも優れたものがあるが、山上墳には岩石を使用した石室や豊富な遺物を出土した例は少い。相馬市高松山前方後円墳の如く、人物埴物を伴い、大石を使用した竪穴式の石室から金銅製椀、金鈴等を出しているが根岸東墳の如く石製模造品一箇しか発見されない例外もある。

一般的に山上墳は高塚古墳としては末期的傾向が強い。このことは後期の群集古墳として著名な真野古墳と地続きの大窪横穴群の頂上にある山上墳や、双葉町の鶴山古墳群を望む山上にある寺内前古墳は特にこの感が強い。寺内前古墳の坩の例が火葬の蔵骨器であることが許されるなら、これらが末期に営なまれたことになる。

遺構を出土しない古墳については、さらに後考をまつこととしたい。

## 三、土師式の住居跡について

浪江町塚ノ越の住居跡は、炎天下の努力にかかわらず完全に住居跡を検出することができなかったのは惜しいが、とも角二つの住居跡を出したことは、今後の土師式の遺跡研究に一つの例を出したこととして意義が深い。

本県浜通り（太平洋岸地方）には土師の住居遺跡は数多く指摘されている。新地の小川貝塚に近い、長清水原竪穴群や、既に開墾されてしまった当遺跡の西方にある上野原遺跡などは地表上から、円形の凹みが観察される。しかし発掘調査を行った例は少く、早大の桜井清彦氏が、相馬市の塚部古墳群に近い椎木住居跡を発掘したのが唯一の例になっている。これは弥生式に近い古式の土師器を伴う住居跡であるが、塚ノ越住居跡は、東北の土師器編年から見ると、中、後期に位し、本県東部地区（太平洋岸）に盛行した土師式住居跡の一つの規範となるところに意義を見出したい。

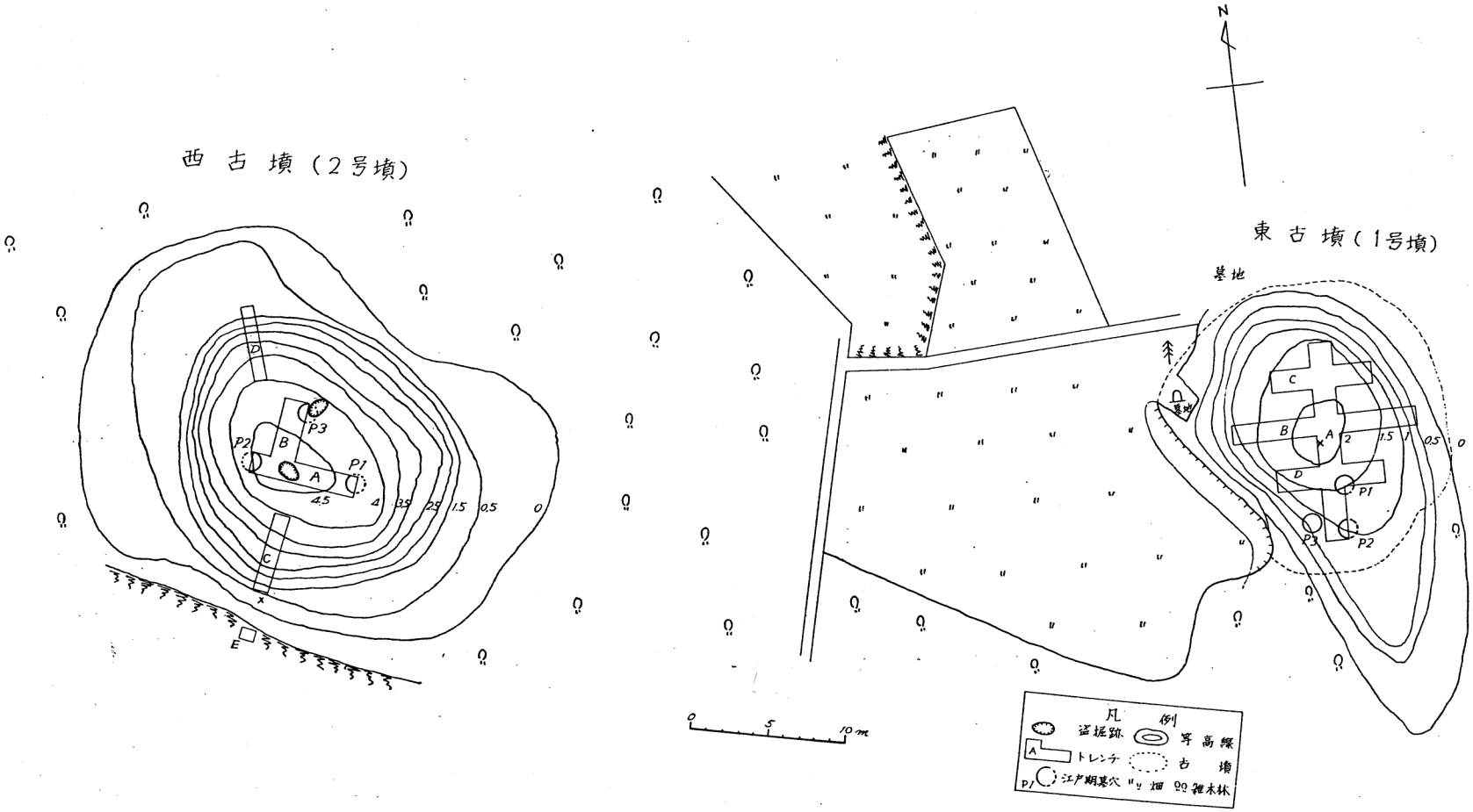
（梅宮　茂）

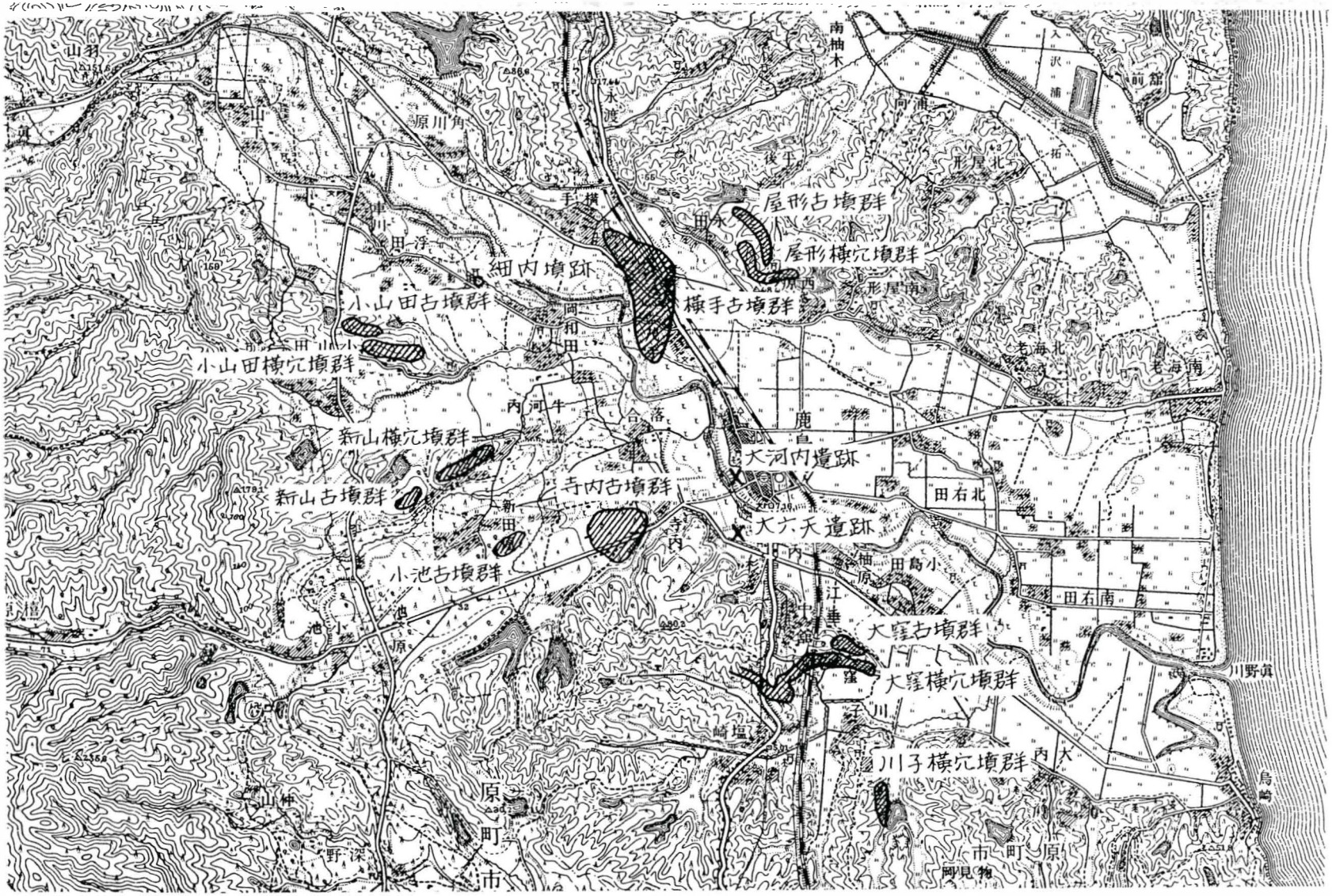
（註）

(1) 福島県遺跡地名表一九六一年版（福島県教育委員会編）
(2) 日本大学考古学会埋蔵文化財報告書（昭和三四・一〇・六）
(3) 考古学雑誌四八巻一号仙台市燕沢善応寺横穴古墳群（加藤孝・小野力・氏家和典）
(4) 福島県文化財調査報告書第八集勿来市金冠塚古墳調査概報（梅宮茂・成田克俊）
(5) 同所堀越直人氏発掘保管
(6) 双葉高等学校　丈六古墳発掘調査報告書
(7) 日本大学考古学会埋蔵文化財報告書（昭和三八、原町市泉大磯古墳）

# 根岸古墳実測図

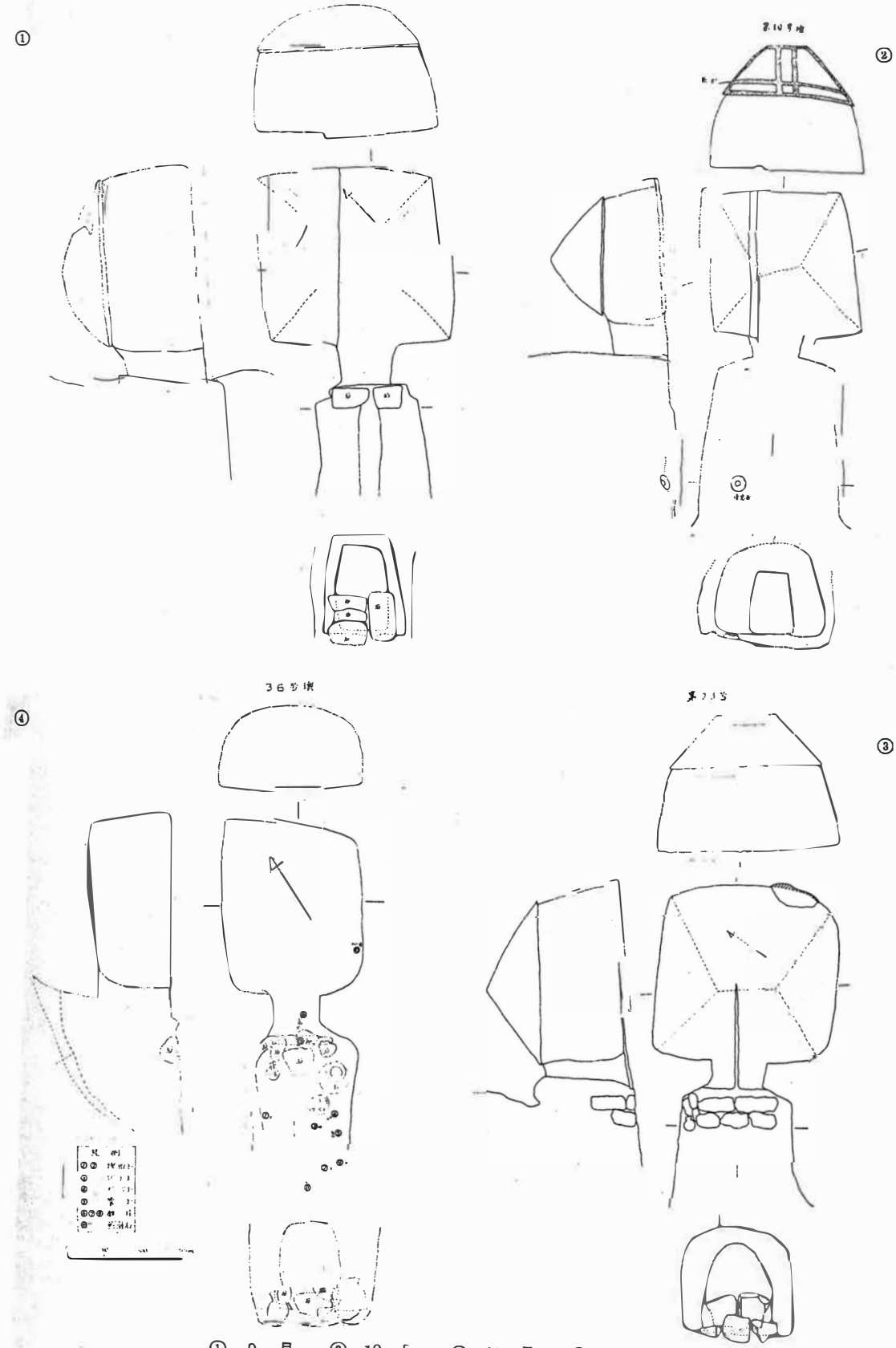



西古墳（2号墳）
東古墳（1号墳）
墓地
墓地
A
B
C
D
E
P1
P2
P3
4.5
4
3.5
2.5
1.5
0.5
0
2
1.5
1
0.5
0
5
10m
凡例
盜掘跡
等高線
トレンチ
古墳
江戸期墓穴
畑
雑木林



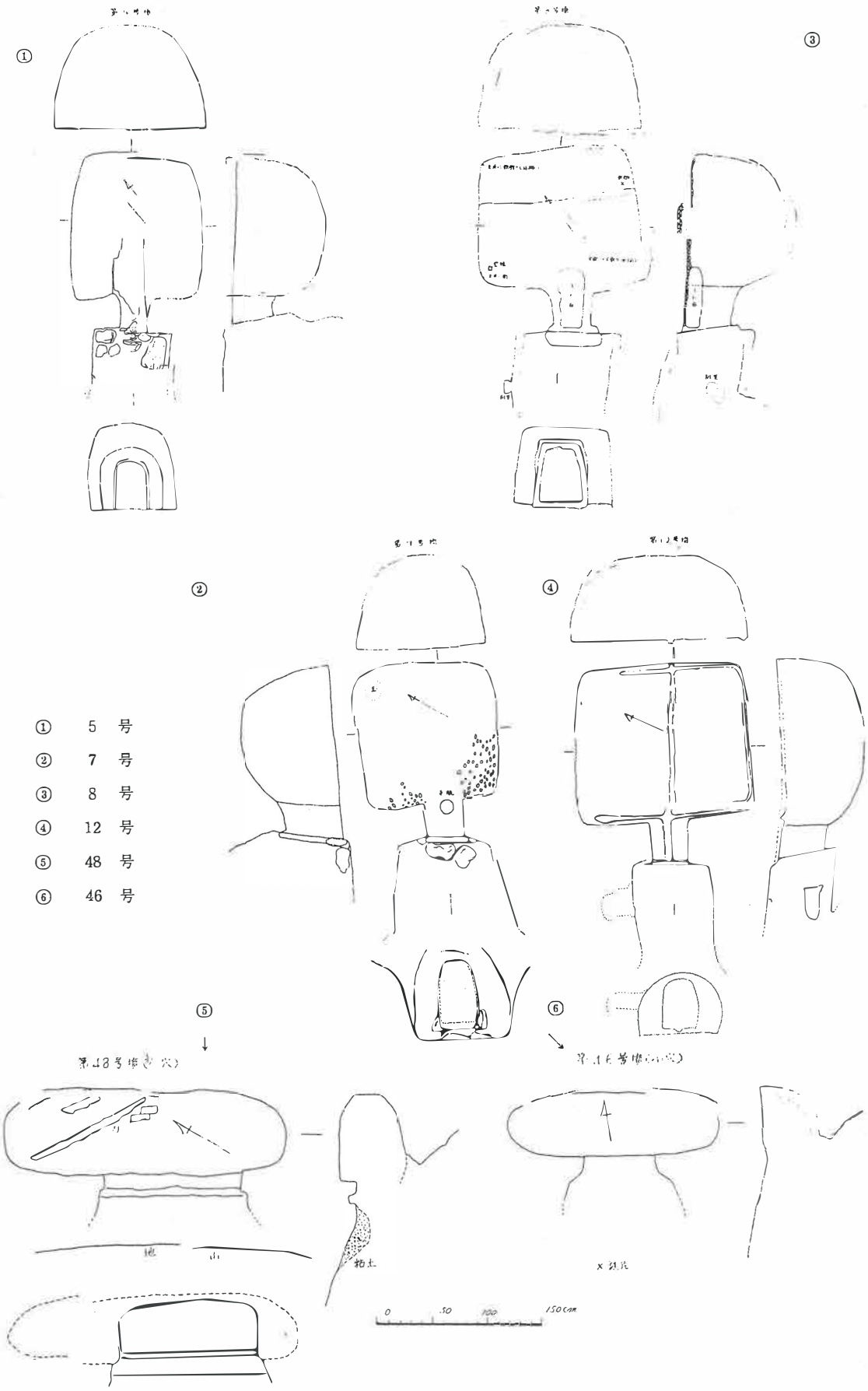

一大窪横穴墳は下段常磐本線の東にあり一

# 大窪横穴実測図(1)

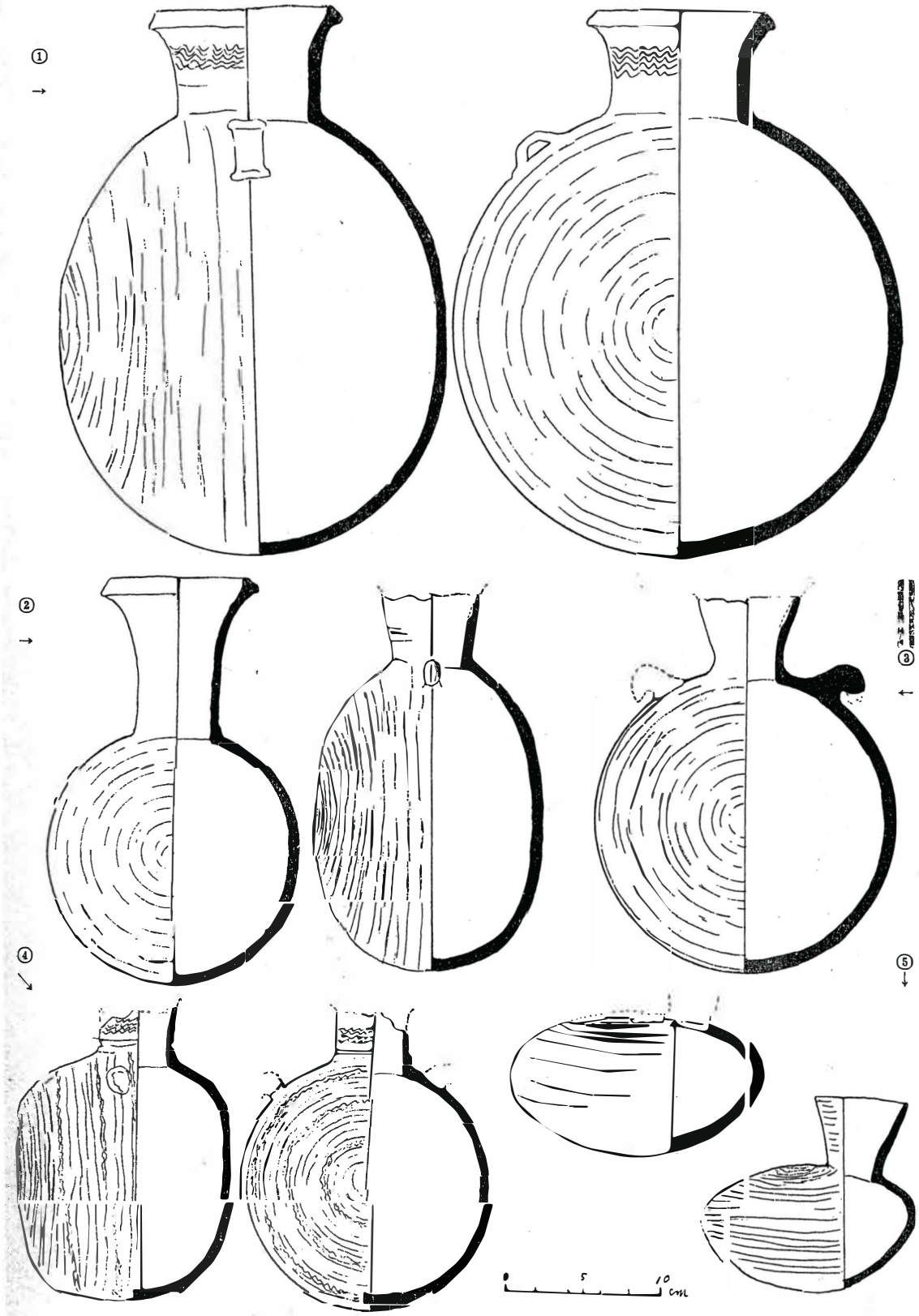



① 9 号　② 10 号　③ 23 号　④ 36 号

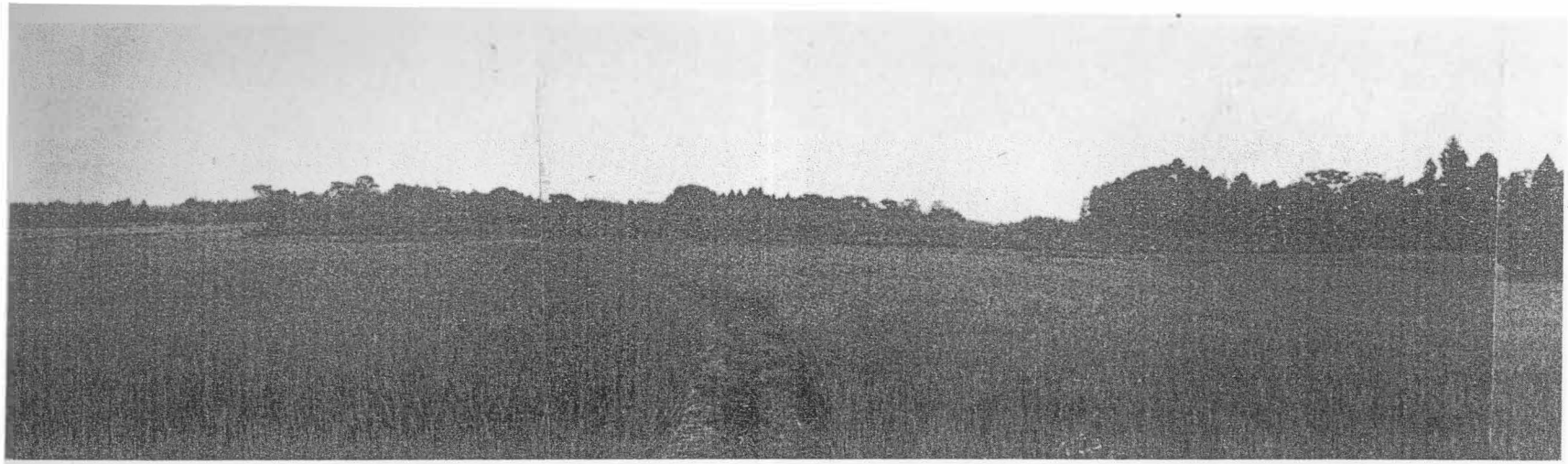
# 大 雑 横 穴 実 測 図 (2)



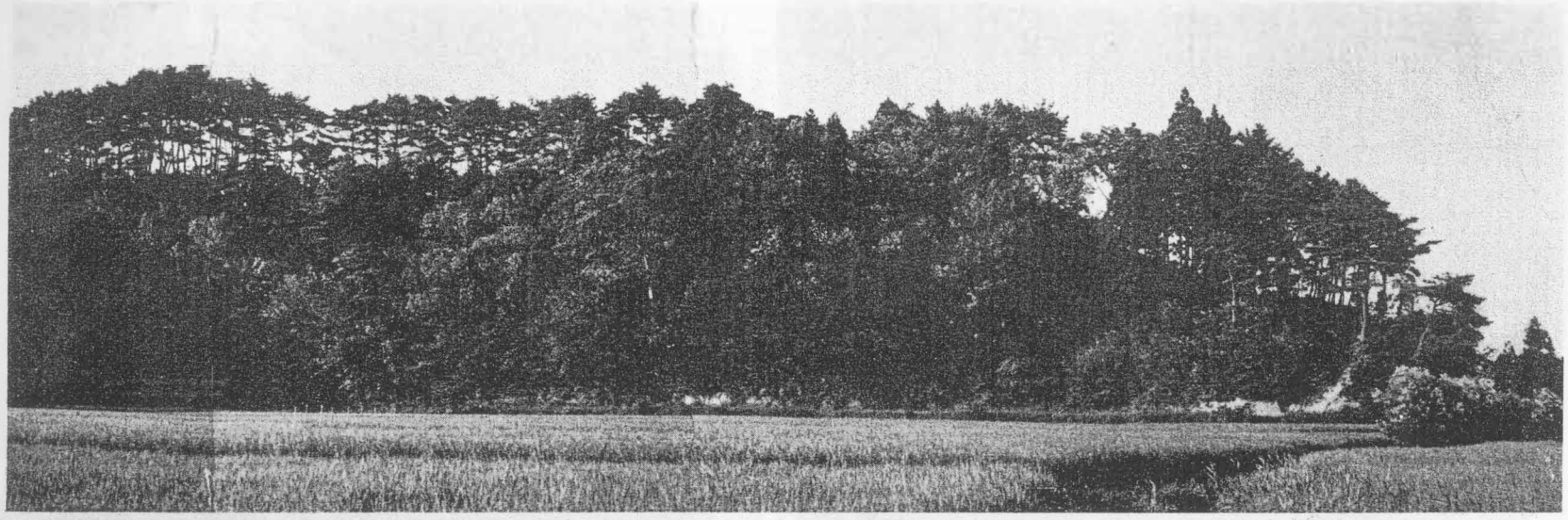
大窪横穴出土須恵器実測図




① 提瓶（23号）　② 坩（36号）　③ 提瓶（8号）
④ 提瓶（8号）　⑤ 左平瓶（10号）　右平瓶（7号）

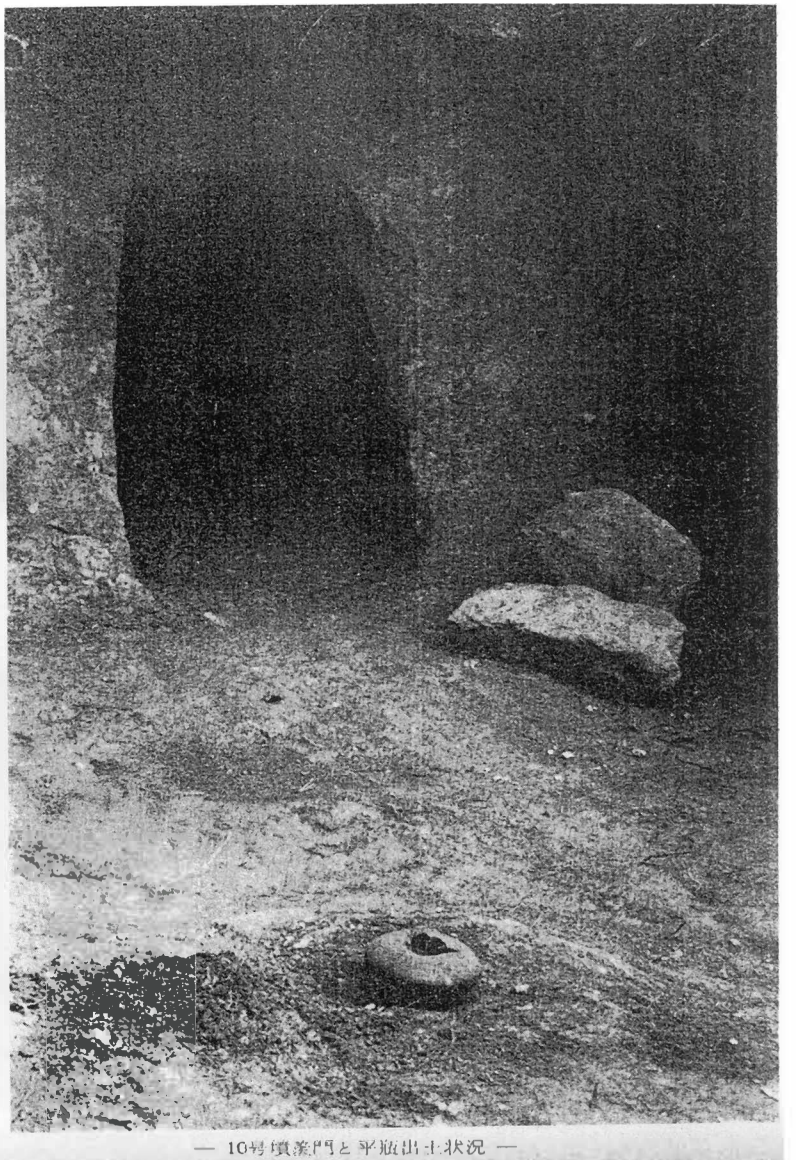


一塚ノ越遺跡遠望一



一大窪横穴古墳所在丘陵一

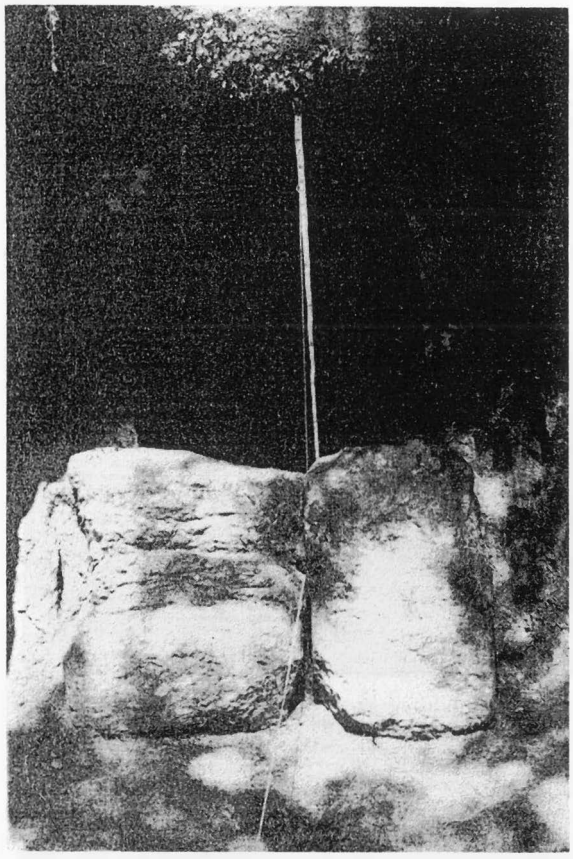
— 大窪横穴36号墳遺物出土状況 —



— 10号墳羨門と平瓶出土状況 —

## 一大窪横穴古墳一

①

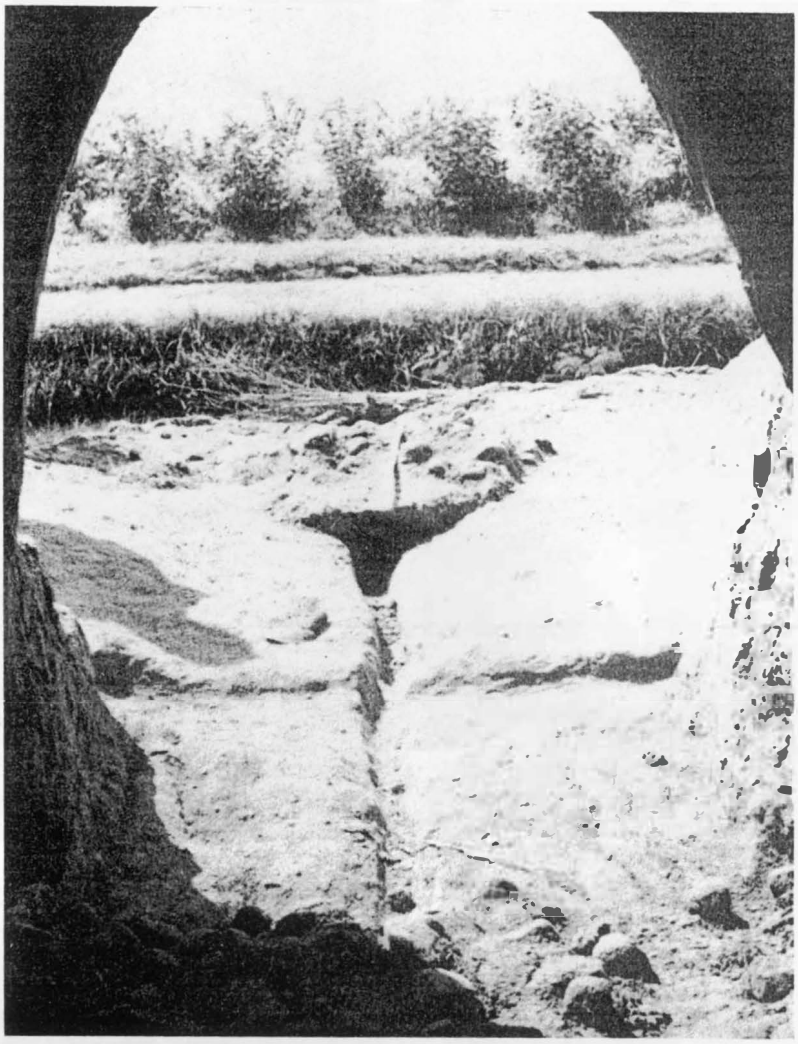


②

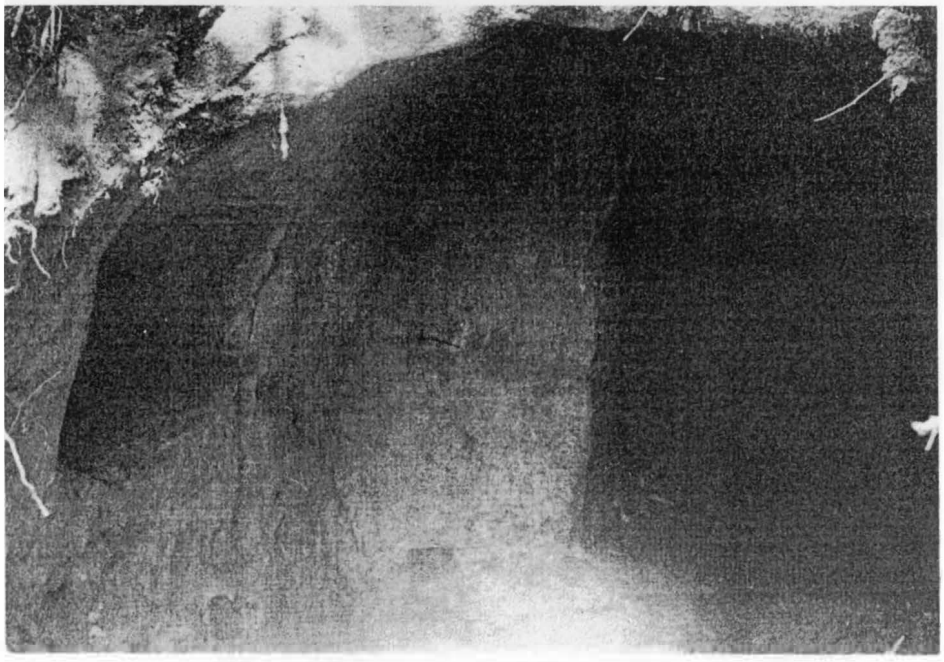
③

④

① 9号墳蓋石羨石
② 23号墳提瓶出土状況
③ 12号墳玄室内排水溝
④ 10号墳天井（寄棟の隅部）



高松塚穴墳羨門外排水溝の出況（橿原市　高松町）



12号墳　前室の左壁に副室がある。下から須恵器出土

大窪四八号　小横穴（直刀出土状況）

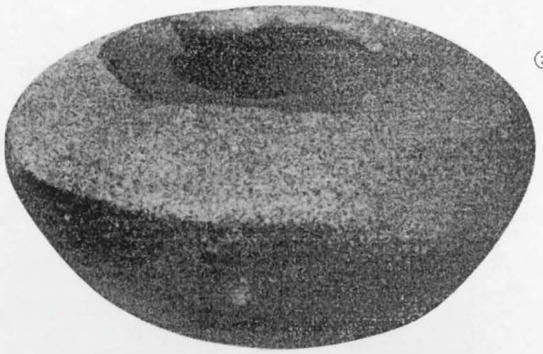


寺内前横穴　五号（双葉）

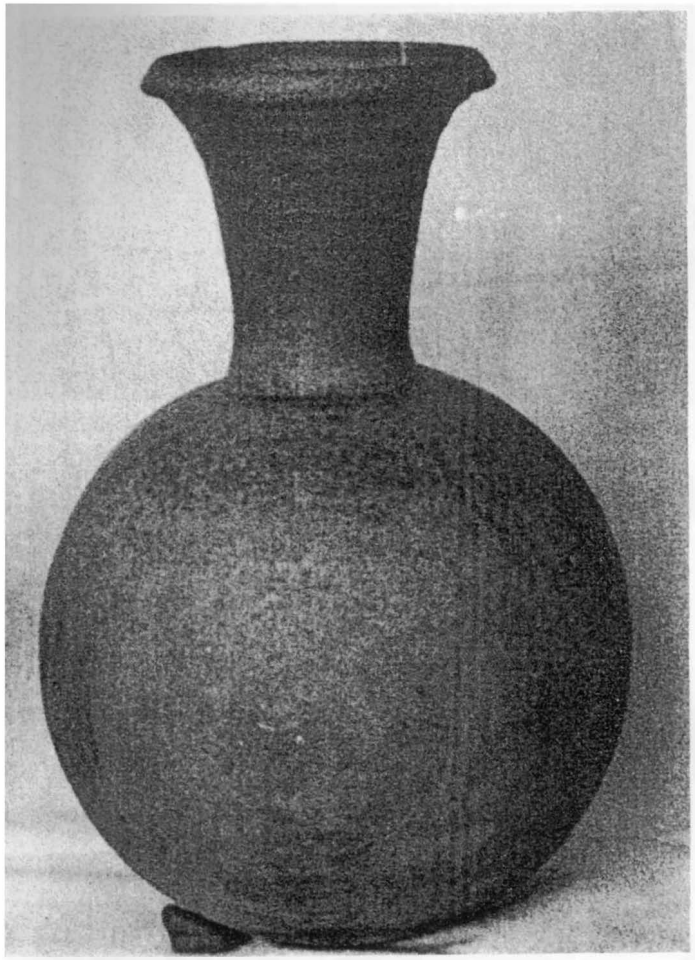


根岸東古墳（相馬市）

大雑院穴出土須恵器(2)

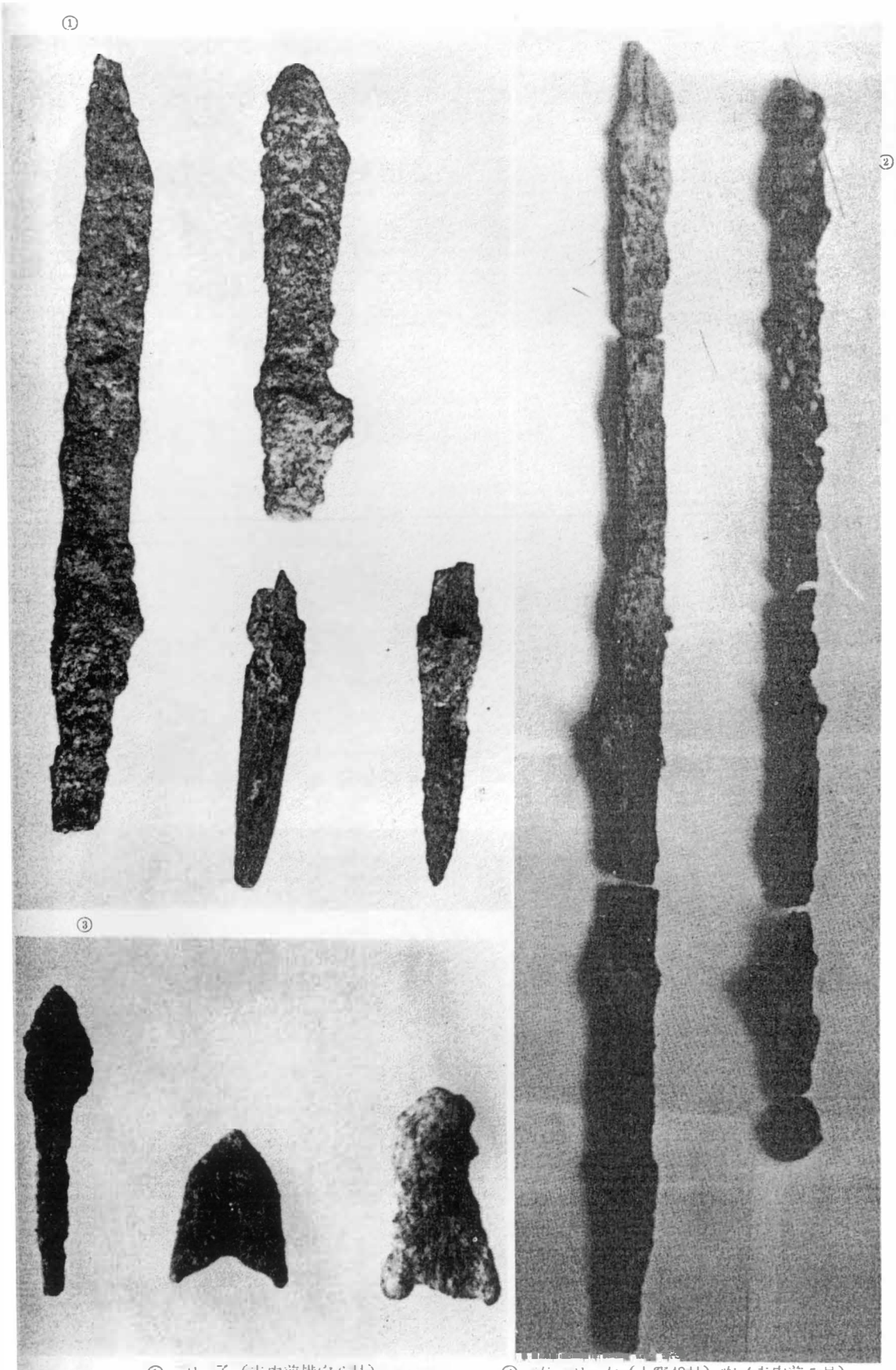


① 提　瓶（8号）　② 平　瓶（10号）（破損）　③ 平　瓶（36号）
④ 平　瓶（7号）　⑤ 提　瓶（8号）　⑥ 提　瓶（23号）

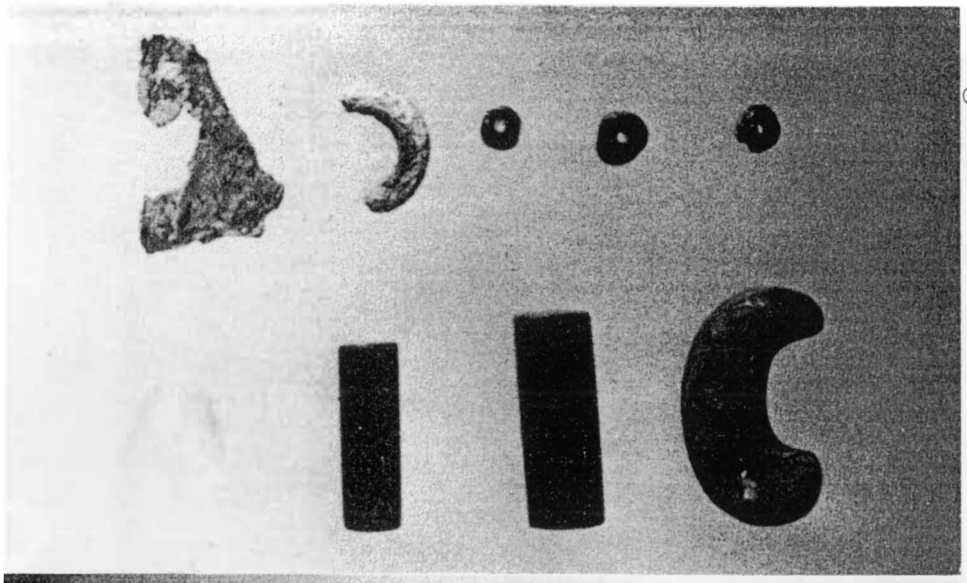


大窯横穴出土須恵器(1)　左　長頸壺

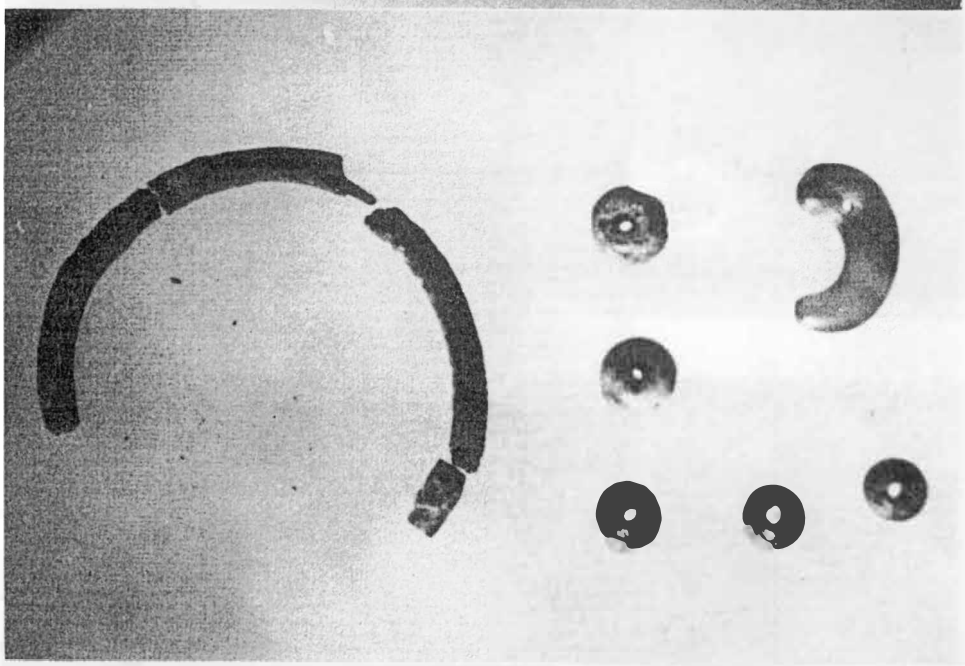
右　壺（ともに33号墳出土）



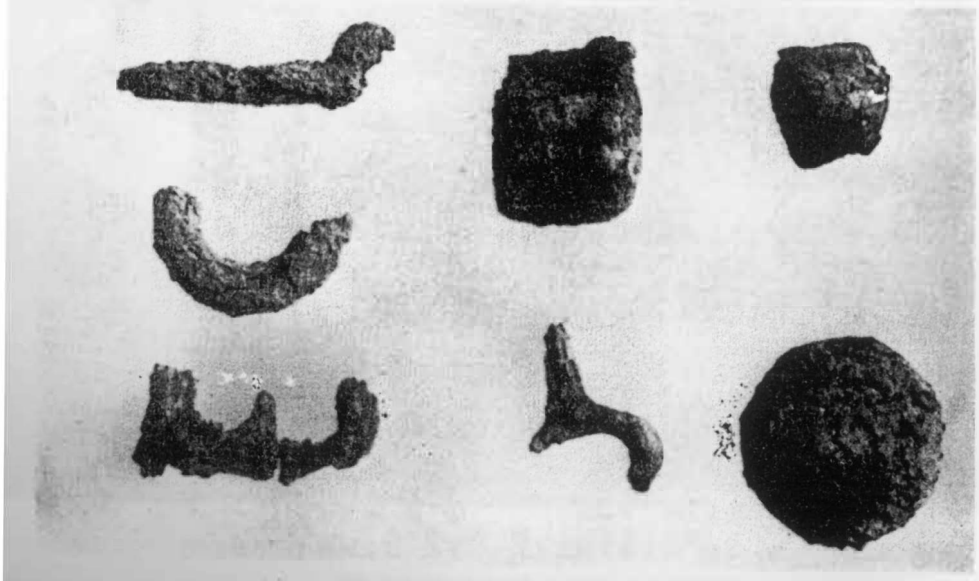

① 刀　子（寺内前横穴6号）　　② 直　刀　左（大窪48号）右（寺内前5号）
③ 鉄　鏃　左（寺内前6号）　　右　平　根（大窪23号）



①



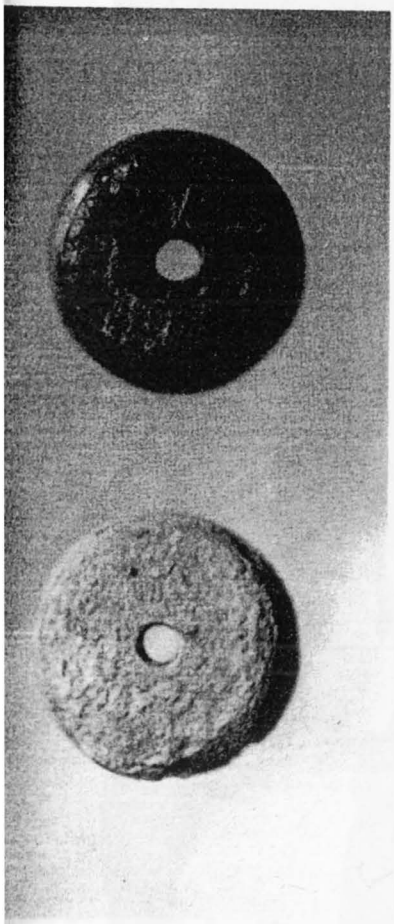
②



②

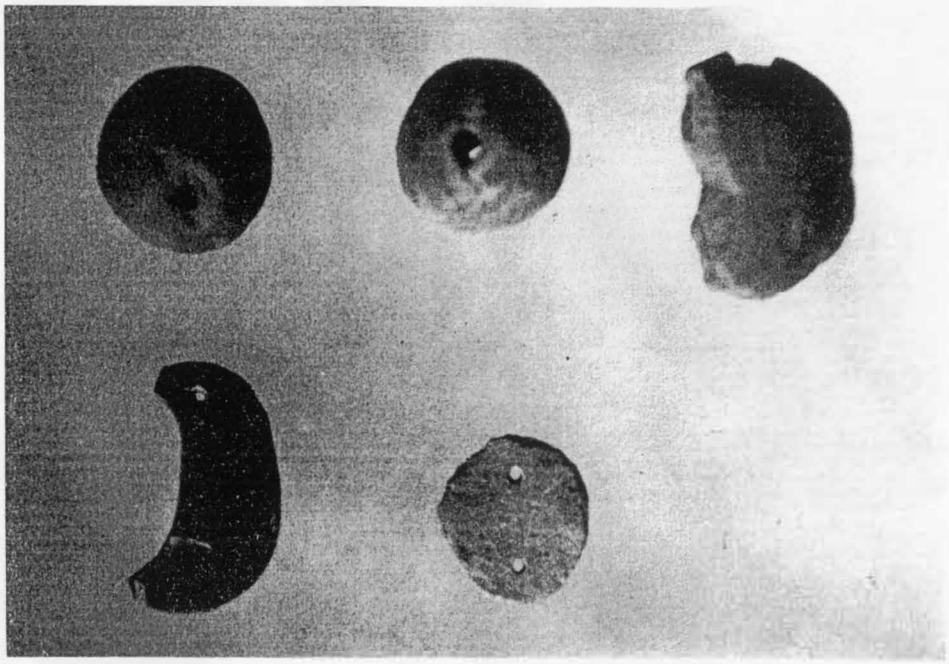
①　玉　　類（大窪36号）、金環（同12号）、金銅片（同23号）
②　玉　　類、銅製釧（寺内前6号）　　③馬　　具？（大窪8号）

①



②

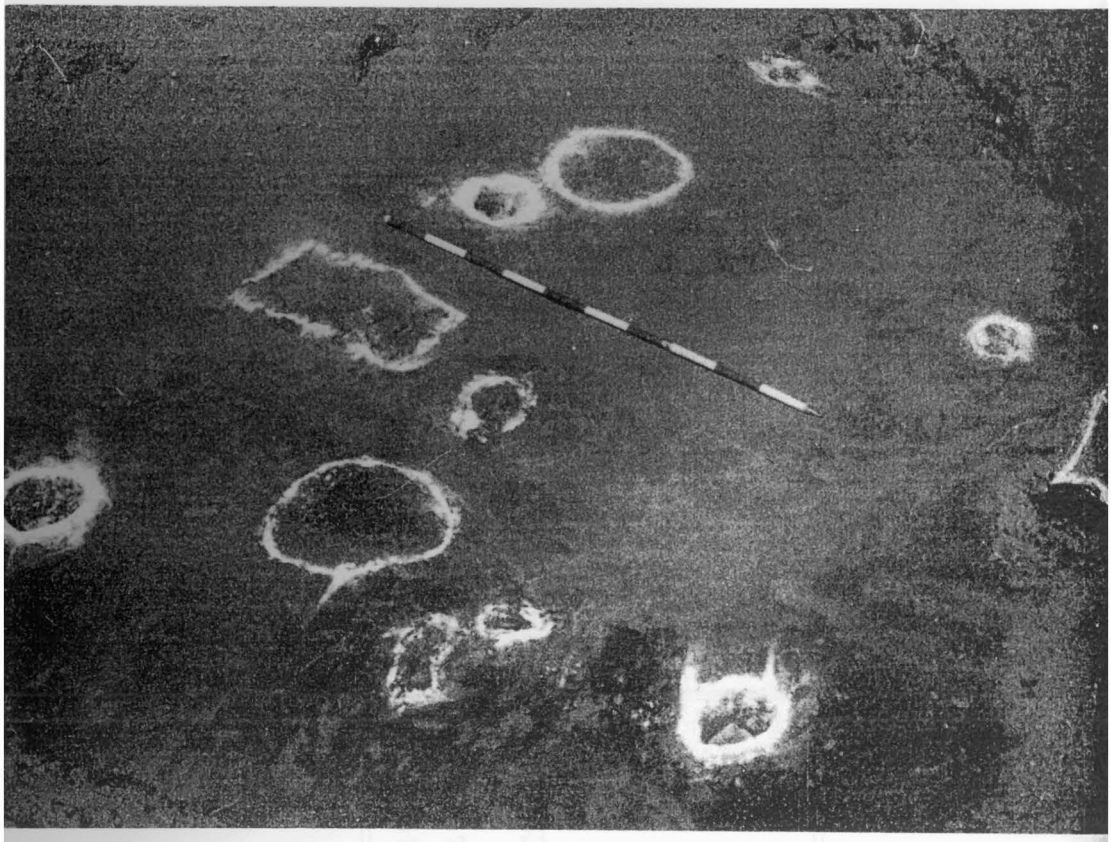
③



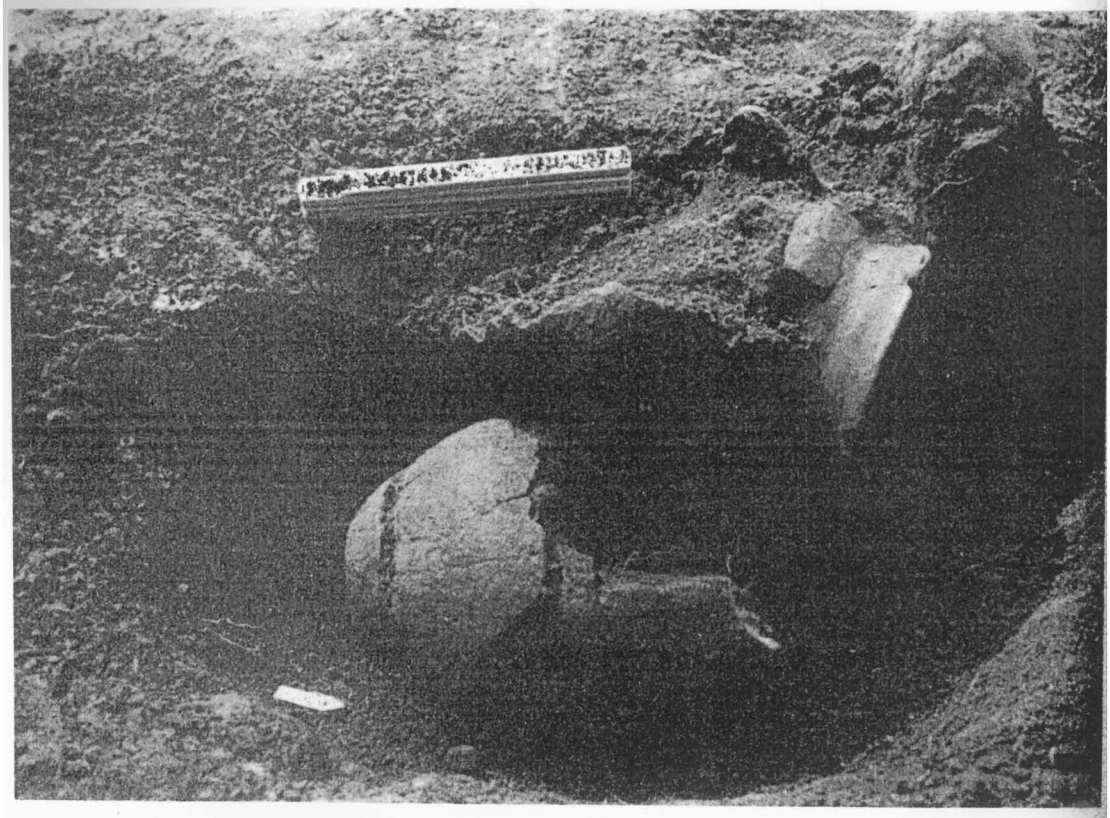
① 綜　麻　石（上大窪10号、下同36号）　　② 鉄　斧（46号）

③ 上　土　　錘、下左　幻玉塚ノ越出土）　　下右　双孔円版（根岸東古墳）

塚ノ越遺跡



B 住居跡（柱穴と炉）



A 住居跡（土師器出土状況）

昭和三十八年三月二十五日　印刷
昭和三十八年三月　三十　日　発行

福島県東部地区遺跡発掘調査報告書

―文化財調査報告書第十集―

発行所　福島県教育員委会

印刷所　小浜印刷株式会社